

静薬學友會報

静岡県立大学薬学部同窓会報
2018年（平成30年）No.86号

特集

Change ～ 往古来今

変わったところ
変わるどころ



コスモスと富士山 犬伏 式生(昭和39年卒)

平成 30 年度薬学生涯研修講座

参加申込書

日時：平成31年2月24日(日) 13:00～16:30

会場：静岡県男女共同参画センター あざれあ 2階 大会議室（静岡駅北口を西に 700m）

主催：一般社団法人静薬学友会・静岡県立大学薬学部

※日本薬剤師研修センター2 単位認定

1.参加者氏名

卒業年次：

連絡先ご住所

電話番号：

2.参加者氏名

卒業年次：

連絡先ご住所

電話番号：

通信欄

○講座への参加申し込みは、平成 31 年 1 月 25 日(金)までにお願いいたします。

○卒業生以外の参加も受け付けますので職場の方もお誘い合わせてご参加ください。

○本用紙に 2 名までご記入いただけますが、参加者2名を超える場合は通信欄にご記入ください。

○講座参加費については、当日集めさせていただきます。（参加費：500 円 ただし学生は無料）

問い合わせ先／ 平成 30 年度薬学生涯研修講座運営委員会

一般社団法人静薬学友会

TEL: (054)265-8763 FAX: (054)265-8769

E メール: shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

ホームページ: <http://shizuyaku.jp>

静薬学友会報

2018 No.86

目次

研究室だより	生化学	衛生分子毒性学	32
	薬理学	医薬生命化学	33
	身体運動科学	生体機能分子分析学	34
		科学英語	35
	医薬品製造化学	薬物動態学	36
	創剤科学	生体情報分子解析学	37
	臨床薬効解析学	医薬品情報解析学	38
	実践薬学	医薬品化学	39
	生命物理化学	医薬品創製化学	40
	統合生理学	免疫微生物学	41
	創薬探索センター	分子病態学	42
	臨床薬剤学	キャンパス風景	43
薬学部教室名および教員一覧			44
在学生だより	五十嵐 千乃	宮 国大	介 涼
	中 村 洸	友 安 倍	大 友 涼
	大 嶽 瞳	丹 羽 智	紀 涼
静薬微生物学教室開設六十周年記念同門会開催案内			48
大学院学位論文			49
本部だより			
議事録			50
会計報告・予算			54
静薬学友会ホームページをご活用ください			57
平成30年度寄付・平成29年度会費納入者一覧			58
平成30年度会費納入のお願い			67
小鹿ゴルフコンペのお知らせ			68
激甚災害に指定された災害で被災された方へ			68
関東地区同窓会総会開催のお知らせ			69
東海地区同窓会総会 薬剤師セミナーのお知らせ			70
静薬学友会報への広告掲載について			71
定款			72
代議員一覧			80
役員一覧			81
編集後記			82
訃報			82
平成30年度薬学生涯研修講座参加申込FAX用紙			
平成30年度薬学生涯研修講座案内			

会長挨拶	横 倉 輝 男	2
特集 Change～往古来今 変わったところ	田 中 喜久夫	3
静岡県行政薬剤師	木 村 正 伸	4
臨床開発30年—変わったところ、変わらないところ—	内 田 林 彰	5
薬学教育モデル・コアカリキュラムの改定と実務実習	小 木 村 文 子	6
薬剤師を巡る環境の変化について～薬局薬剤師の視点から～	大 藤 彩 香	7
求められる病院薬剤師になるために	加 藤 明 代	8
静薬学友会報に寄せて		9
平成29年度薬学生涯研修講座開催報告		
地区同窓会だより		
北海道／長野県／北陸／東海／関西／関西(奈良県)／中国／四国		10
会員だより		
静薬34回同級会報告	安 藤 圭 子	20
昭和37年卒同期会	河 村 信 弘	21
静岡薬科大学8回生同期会	名 倉 猛 夫	22
昭和38年入学同期会	若 宮 忠 弘	23
静薬湯けむり同期ツアー松島大会(昭和49年度入学)	木 下 俊 也	24
2017年度小菅教室同門会のクリスマスパーティー報告と2018年度のお誘い	木 下 俊 也	25
植物研究部OB会報告	桑 山 雅 枝	26
大学だより		
退職に際して	奥 板 直 人	27
	井 井 知 茂	28
新任教授	近 藤 浩 啓	29
	古 島 大 資	30
新任挨拶		31
薬学部教員の人事異動		31

「コスモスと富士山」

湘南から見る富士山は、季節により大きく異なります。純白のペールを頂いた富士山はそのペールの裾が長く、降雪の直後が最も優雅と私は思います。しかし、真夏の黒々とした富士山も雄大さを感じさせられる姿です。季節別には、冬期は乾燥した北風が富士山をスッキリ見られるようにしてくれますし、春先は残雪の富士山の姿が靄によりペールを架けたように朧気に見え、梅雨前から真夏の「夏高気圧」が居座るまでは雲に隠れてしまう日がおおいのです。趣味の一つに「篆刻」を楽しんでいます。以前にこの富士山と風について「富士山を北風は近くに、南風は遠くにする」と八分(25mm角)の石に朱文で刻んだことを今でも覚えています。

秋から冬にかけては天候が安定する日は比較的少ないですが一雨毎に富士山の初冠雪を待つ楽しみがあります。総じて撮影的には北側の河口湖方面からのシャッターチャンスが多いと言えますが、湘南からの写真は燃え立つような朝焼け富士を撮る楽しみがあることです。天気予報や気圧配置など前日までに調べて早起きをし、雲の状態を見て、カメラを持って近くの小川の土手に行き、空が明るくなり中天のピンク色が徐々に降りて山々に近づくと、富士山の頂点に赤い点が現れどんどんと純白のドレスを赤く染めていく秒単位の変化は太平洋から見ることの出来る特権だろうと思っています。私はNHKに投稿する写真も家の近く、日常の変化を捉えてシャッターを切ったものとしています。今回は花を引き立てる富士山としてみました。最盛期のコスモスと初冠雪の時期が微妙にタイミングが合う時期を狙った写真であることを知って見て頂くと幸いです。

二〇一八年七月二日

犬伏式生(昭和39年卒)

会長挨拶



静薬学友会の一般社団法人への移行に寄せて

一般社団法人静薬学友会 会長 横倉輝男

(昭和40年卒)

静薬学友会会員の皆様、日頃は学友会活動にご支援を賜り誠にありがとうございます。心から厚くお礼申し上げます。

さて、本年平成30年は我が静薬学友会にとって記念すべき年となりました。それは本会がこの4月からはこれまでの任意団体から一般社団法人に移行したからであります。静薬学友会はいまでも法人化を試みましたがいろいろな事情があつて実現できず、この度永年の念願が叶つて法人化することができました。

一般社団法人静薬学友会の組織上の特徴は代議員制を採用したことにあります。より広い世代と地域からの意見を会の運営に反映させるため、現役学生(7名)と全国の卒業生(30名)から代議員37名が選出されました。代議員は27名の役員(理事25名、監事2名)による学友会の運営に対して監視する役割を担います。一般社団法人と

しての第一回総会が去る5月20日に開催されました。

静薬学友会は静岡県立薬学専門学校から静岡県立静岡薬科大学に移行した翌年、昭和29(1954)年に「静薬同窓会」として発足し、1975年に同窓会名が「静薬学友会」と変更されました。同窓会の初代および第二代の会長は当時の静岡薬科大学学長の宮道悦男先生、鶴飼貞二先生がそれぞれ就任され、第三代目からは卒業生が就任して参りました。以下歴代の会長は、横田芳久氏、鈴木健介氏、藤原伸司氏、若尾直司氏と引き継がれ現在の私は第七代目です。

本年は同窓会発足から64年目に当たりますが、この間、静薬学友会は静薬学友会報の発刊(1955年)、大学創立50周年記念式典挙行(1965年)、静岡薬科大学創立65年史発行(1982年)、静岡県立静岡薬科大学から静岡県立大学薬学部へ移行(1989年)、

静薬学友会事務局を県立大学内に開設(1994年)、静薬創立88年記念式典挙行(2004年)、静薬創立88年記念誌発行(2005年)、静薬創立100周年記念式典挙行(2016年)、静岡創立100周年記念誌発行、薬学部発祥の地記念碑建立、静薬創設者・岩崎昭吉先生レリーフ設置(2017年)と歴史を積み重ねて参りました。

この度の法人化によって静薬学友会は組織としての独立性が向上すると共にその運営については法人化に際して新たに定めました「一般社団法人静薬学友会定款」に沿ってさらなるコンプライアンスの徹底が要求されることとなります。

我々役員一同は「定款」に明記された法人の目的、「会員相互の親睦と学識及び職能の向上を図るとともに、静岡県立大学薬学部の発展並びに薬学・薬業の振興に貢献し、あわせて社会に寄与すること」を実現すべく今後とも

努力を重ねる覚悟しております。会員の皆様には今後とも静薬学友会に対して一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、この度、大変ありがたいことに、昭和46年静岡薬科大学卒業の近藤隆氏(本年4月から静薬学友会理事)から静薬学友会に対して多額のご寄付がありました。近藤氏のご寄付の目的は「静岡県立大学薬学部を一流の薬学部にすること」と伺っております。静薬学友会としては近藤氏のご意向を具現化するためにその使途について安倍道治理事をリーダーとする検討チームを結成して対処することと致しました。

※P58にて近藤隆様のご寄付詳細を掲載しております。

P72に定款を掲載しました。

特集

change

～往古来今

変わったところ

変わるどころ

静岡県の行政薬剤師

静岡県健康福祉部生活衛生局薬事課

田中 喜久夫

(昭和59年卒)

みなさん、「行政薬剤師」の仕事を
知っていますか？

行政薬剤師は、国や地方自治体等に
勤務し、薬事や食品衛生等の行政に従
事している薬剤師です。都道府県には
3,787人（日本薬剤師会行政薬剤
師部会の平成28年度アンケート調査）、
静岡県には180人（平成30年4月現在）
の薬剤師が行政に従事しており、その
約半数が静薬出身者ですが、静岡県立
大の創立から30余年が経過し、私のよ
うな静岡薬科大の出身者は残り少な
くなっています。また、政令市である静
岡市と浜松市には、約100人の行政薬
師が従事しています。

行政薬剤師には、科学的根拠に基づ
いた施策の立案、実行することが期待
されており、薬学的知識と科学的知識
を兼ね備えた公務員として、住民の生
命・生活・環境を守ること、住民の衛
生環境・経済基盤を向上させること、
住民が受ける医療の質を向上させるこ
とが求められています。

私が配属されている薬事課では、か
かりつけ薬剤師・薬局の推進、献血の

推進、医薬品製造業等の許可認可、い
ゆる健康食品の取締り、薬物乱用防止
の推進、毒物劇物の取締り等の業務を
行っています。

また、医薬品製造業等の医薬品医療
機器等法関連の産業は、本県の主要な
産業の一つであることから、本年2月、
県内に製造所がある企業の工場長と本
社役員にお集まりいただき、知事・副
知事を始めとした県の幹部職員との意
見交換会を開催するなど、企業への支
援も強化しています。

さらに、近年、若者による大麻の乱
用が増加していることから、県立大学
等の大学生と協働し、若者目線での薬
物乱用防止活動を行っています。

これらの他、行政薬剤師の一般的な
業務としては、食品営業許可や食中毒
発生防止等の食品衛生、理美容所・旅
館営業許可や民泊、温泉関係等の生活
衛生、大気・水質・土壌等の生活環境、
廃棄物許可や不法投棄防止等の廃棄物、
医薬品や食品等の検査・研究等の業務
があります。

加えて、静岡県では、ドクターヘリ

運航や肝炎対策等の医療対策、危機対
応や原子力安全対策等の危機管理、
ファルマバレープロジェクト（医療健
康産業の振興）やフーズ・サイエンス
ヒルズプロジェクト（食品関連産業の
振興）等の産業支援、厚生労働省や気
象庁への職員派遣など、幅広い分野で
行政薬剤師が活躍しています。

薬事に関する業務については、行政
薬剤師の業務として知っていらっしや
る方も多いかと思いますが、その他の
業務についても行政薬剤師が担当して
いることは、あまり知られていないの
ではないでしょうか。

大学の就職担当者からも「学生は、
行政薬剤師が何をやっているのか知ら
ない。」と聞いており、加えて、医療
技術の高度化、医薬分業の進展等に伴
い、高い資質を持つ薬剤師養成のため
の薬学教育は、学部修業年限が4年
から6年に延長され、臨床が重視され
るようになってきている現在、結果的に静
岡県庁の採用試験を受ける学生も減少
しています。環境行政、検査業務、研
究所等における試験研究等を化学職と



静岡県庁—右は献血の看板

して募集している自治体もありますが、
静岡県の場合は、これらの業務も行政
薬剤師を中心に行われているため、多
くの薬剤師職員の確保が必要です。
このため、数年前から、首都圏及び
中京圏の大学に対する訪問説明、就職
説明会等で、行政薬剤師の業務を紹介
しています。加えて、県立大学1年生
の薬学概論の講義、静岡県庁インタ
ンシップ等でも行政薬剤師の業務を紹介
しています。

変化する学生等に対するこのような
取組により、今後、静岡県職員採用試
験の受験者が増えることを期待してい
ます。薬剤師職種は35歳まで受験でき
るよう年齢制限を伸ばしてありますの
で、是非、受験してください。



臨床開発30年——変わったところ、変わらないところ

タカラバイオ株式会社 取締役 木村 正伸

(昭和59年卒)

早いもので卒業して32年、修士を修了して30年。

この間、ずっと新しい治療法の開発に携わってきました。この30年で医薬品の開発は劇的に変わりましたし、私が主にやって来たがんの治療法もこの数年で劇的に変わりました。10年前まで異端にされていたがん免疫療法が今は主流です。私は免疫の力を信じて2007年にがんワクチンの会社に転職しましたが、当時はASCO（米国臨床腫瘍学会）で知り合いに会うと「そんな会社やめろ」の大合唱。2008年のASCOではMemorial Sloan-Kettering Cancer Center (MSKCC) のDr. Wolchok（現在はチェックポイント阻害剤の申し子的存在）と友達になりました。ちなみに何故友達になれたかというと、その年のASCOの彼のイピリムマブ（抗CTLA-4抗体）のdelayed responseのポスターには私以外は誰も来なかったのです。彼と私はポスターの前で2時間話して、私は「このデータはいずれ評価される。BMS（ブリストル・マ

イヤーズ・スクイブ社）はあなたに感謝することになる」と断言したのですね。先日彼と一緒にご飯を食べに行つた際にその時の話で盛り上がりました。さて、本題に移ります。今回戴いたお題は変わったところ、変わるところですが、失礼して、「変わったところ＋変わるところ」、「変わらないところ」で書かせて戴きます。「変わったところ＋変わるところは」、前述の通りがんの標準治療が全く変わりつつあります。学部4年・大学院のとき私は

生化学教室（松本亮教授で平林義雄先生にご指導戴きました）の所属。当時の研究室の論文紹介で当番が廻ってくると、私はいつもDr. Old (MSKCCにずっといらして、2008年にMSKCCに行つた際はまだ現役で（もう80歳を越えていらつしやいました）が、「貴方は私が学生のときのアイドルでした」とお話したらニコニコなさっていました。ちなみに前述のDr. WolchokはDr. Oldの弟子）の論文を紹介していました。それが現実のものになってきているのです。

変わらないところは、おそらく倫理性の担保、PK/PD解析、そしてプロジェクト管理の考え方でしよう。

試験は新しい治療法を評価するためには必須なのですが、口の悪い私は「人体実験」とおっしゃいます。臨床試験を企画・実施するときに興味本位の「人体実験」とならないよう、歯止めをかけるのが倫理性です。大鵬薬品で臨床試験を担当するときに教わった規準が、「自分の母親や子供がその病気になるかとして、その試験に組み入れることができるか？」というものでした。現在私は遺伝子治療に携わっていますが、今でもこの基準は私の中では全く変わりません。

またPK/PD解析の重要性についても変わりません。薬剤学の授業で木村良平教授（当時）が、「製薬会社に勤めているOBがいまでも教わりに来る」と仰っていました。その通りでした。大鵬薬品でも第一製薬でもおおいにやりましたし、最近では遺伝子改変T細胞療法でも使えました。やってみると意外に色々見えてくるものです。

プロジェクト管理の考え方は薬学とは離れていますのでここでは触れませんが。ちなみに日本で一番古いプロジェクト管理って何で行われたと思いますか？おそらくは戦艦大和の建造です。呉にあるヤマトミュージアムでそのときの進捗管理チャートを見ることが出来ます。

これからも新しい治療法は開発され続けます。そんな中で薬剤師がどんなことで貢献できるのか、薬剤師の特性を大いに活かして頑張つて戴きたいと思いますし、私もまだまだ頑張ります。





薬学教育モデル・コアカリキュラムの改定と実務実習

静岡県立大学薬学部 准教授 内田 信也

(平成5年卒)

私は現在母校で、薬学科4年生の実務事前実習を担当しています。本年度から、事前実習は新しいモデル・コアカリキュラムに準拠して進めています。そこで本稿では最近の薬学教育の話題としてモデル・コアカリキュラムの改定について紹介したいと思います。

2006年(平成18年)、薬学教育は6年制と4年制の並置という制度に変更され、薬剤師の資格を得るための国家試験受験資格は、「薬学部」の6年制課程を正規に修了することとなりました。薬学教育モデル・コアカリキュラムは、薬学教育の6年制への移行に際して初めて導入されたもので、学生が卒業時まで身に付けておくべき必須の能力(知識・技能・態度)の到達目標を示し、教育内容ガイドラインとして提示したものです。最初に導入されたモデル・コアカリキュラム(2000年および2004年)の作成から10年近く経過し、教育の到達目標が現在のニーズに合わなくなった部分があることや実務実習の更なる充実が必要になったこと、カリキュラムの内容が過密であることなどの理由から、2013年(平成25年)に「薬学教育モデル・コアカリキュラム」の改定が

行われました。本年度4年生以降の学生が、入学時からこの新しいモデル・コアカリキュラム(改定モデル・コアカリキュラム)を用いています。

この改定モデル・コアカリキュラムでは、カリキュラムの内容を更新するとともに、2つに分かれていたものを1つにまとめました。教育課程の時間数のおよそ7割をモデル・コアカリキュラムで示されている内容の履修にあて、残りの3割程度の時間数は大学独自のカリキュラムにあてるとされています。また学習領域を7つ(A.基本事項、B.薬学と社会、C.薬学基礎、D.衛生薬学、E.医療薬学、F.薬学臨床(実務実習)、G.薬学研究)に分類し、1073項目の到達目標(SBO)を提示しています。

今回のモデル・コアカリキュラム改訂における大きなポイントは、医療人である「薬剤師」として求められる基本的な資質が設定されたこと、学習成果基盤型教育(outcome-based education, OBE)を取り入れたことです。「薬剤師」として求められる基本的な資質」として①薬剤師としての心構え、②患者・生活者本位の視点、③コミュニケーション能力、④チーム医療への参画、⑤基礎的

な科学力、⑥薬物療法における実践的能力、⑦地域の保健・医療における実践的能力、⑧研究能力、⑨自己研鑽、⑩教育能力、が明記されています。そしてこれらの「基本的な資質」を卒業までに習得できるように学ぶ、というOBEに力点をおいて、一般目標(GIO)と到達目標(SBO)が示されています。

改定されたモデル・コアカリキュラムに準拠して、本年度(平成30年度)から実務実習がスタートすることになりました。2016年(平成27年)には薬学実務実習に関するガイドラインが出されています。このガイドラインは大学での臨床準備教育と病院および薬局での臨床実習を適正に行うための指針を示したもので、薬学実務実習の在り方として「基本的な資質」の修得を目標とします。大学で行う臨床準備教育では、臨床実習施設で円滑で教育効果の高い実習を行うことができるよう実務実習事前学習などの確実な実施が求められます。さらに臨床での実習は実践的な臨床対応能力を身に付ける参加・体験型学習であり、医療現場でしか学べない内容を臨床実習で体験しながら身につける、と示しています。また代表的な8疾患を提示

し、継続的に患者さんに関わるような実習に務めるようにとされています。そのために大学、病院実習、薬局実習の連携を図り、一貫性を確保することも明記されました。またOBEの導入に伴い、評価方法の大きな変更が求められています。概略評価で学生の成長を評価しますが、その際にはSBOを具体的なチェックポイントとして活用し、最終的には指導者の責任ある主観による形成的評価を行うことが重要であるとされています。

コア・カリキュラムは、今の社会や医療のニーズを反映したものでなければなりません。しかしそれだけでなく、これからの薬剤師が必要とする新たな内容を含むことも必要です。そのために、今後どのような知識や能力が必要となるのか、議論しながら薬学教育を進めることが大切になります。薬学教育は今、大きく変化しています。しかし、「往古来今」、カリキュラムは変わっても、今の学生もかつての学生と同様、それぞれの夢や希望に向けて一所懸命に学んでいます。すべての学生がさまざまな分野で活躍してほしいと心から願っています。

薬剤師を巡る環境の変化について―薬局薬剤師の視点から

なすな薬局 小林 隆 彰

(平成12年卒)

私は平成12年に薬剤師となり、以来薬局薬剤師として働いてきました。現在は静岡県西部で調剤薬局を運営しています。ここでは現場の薬局薬剤師の目から見た薬剤師業務の変化を綴っていききたいと思います。

薬局業務で大きく変わったことと言えばパソコンを使う業務、インターネットを使う業務が増えたことです。

私が薬剤師になりたてのころは紙媒体をつかった仕事が大部分でした。薬歴は手書きでしたし、診療報酬の請求(レセプト)も紙に印刷したものを、高額レセプトは処方箋のコピーを裏面に貼付してダンボール箱で郵送していました。現在は電子薬歴の薬局が増えましたし、レセプトも特殊なインターネット回線を使ったオンライン請求になっているため、月末深夜の編綴作業もなくなりました。また、レセプトコンピュータ(レセコン)や電子薬歴のコンピュータは、毎週のようにインターネットを通じてデータの更新を行うことで、新薬や後発医薬品の新たな発売や薬価削除、保険請求に関

する改定や、添付文書の改訂などに対応しており、日々の保険調剤になくはならないものとなっております。

医薬品情報の検索についても現在は書籍より、インターネットを利用することが多いです。コンサータなど特殊な薬剤は、ネット上の所定のサイトで処方医が登録医師であるか確認してからでないと調剤できない決まりになっています。

また、2年ごとの薬価改定、調剤報酬改定により、ルールは複雑に、業務の内容も変化してきています。後発医薬品使用促進のため、医療機関で一般名処方加算が認められるようになってから、一般名処方が増えてきています。それに伴い、商品名で販売されていた後発医薬品が一般名に名称変更されました。また、後発医薬品の普及、後発医薬品メーカー間の競争激化にともない、製薬会社の吸収合併、製品の製薬会社間での販売移管、製品の包装の縮小(140錠包装がなくなり100錠包装だけになったりします)など、それにとりなう対応も求められます。また、合剤

の発売解禁も変わったところです。降圧薬の合剤に始まり、最近では糖尿病薬の合剤も発売されるようになり、また合剤の後発医薬品も発売されるようになったため、調剤室の棚の管理も、自分の頭の管理にも苦労しています。

調剤業務には薬剤師の負担を減らす便利な機器が増えてきました。軟膏混合器や全自動分包機などいろいろな機械はありますが、監査システムはすごく進化しました。当薬局で導入した監査システムはレセコンから受け取った処方データをもとに、調剤した薬を監査するもので、薬をトレイに乗せて箱形の機器の中に入れると、薬の写真を撮って画像の解析を行い薬の種類を同定、同時に重量を測定し、重さから数量の監査を行い、結果を記録するものです。頑張れば1度に10種類くらいの薬を監査できます。分包された散薬や一包化された薬などは監査できませんが、画像は残せます。システム導入によりミスは着実に減り、投薬後のクレーム対応も自信を持って行えるようになり、精神的にとっても楽になりました。

た。若干待ち時間は増えますがおすすめです。

最後に、対人業務としては、平成28年の診療報酬改定で「かかりつけ薬剤師」という、薬剤師が患者の服薬状況を一元的かつ継続的に管理する仕組みが作られました。かかりつけ薬剤師業務の有無が、薬局収入に影響するようになり、特に在宅訪問指導は高齢化社会への対応という面で薬局が果たす役割として欠かせません。対物業務から対人業務への転換が謳われていますが、症候学を学び、プライマリケアを実践し、地域住民の健康をサポートしていくことが薬局薬剤師に求められています。



なすな薬局近影 お花に水をあげているのが筆者です

求められる病院薬剤師になるために

亀田総合病院 木村 文子

(平成25年卒)

私は静岡県立大学薬学部を平成25年に卒業し、千葉県の亀田総合病院で5年間働いてきました。社会人になり、新たな環境の中でこれまで過ごしてきましたが、もう少しで大学生として過ごした期間に並ぼうとしていると思うと本当にあつという間だったと感じます。

私は社会人として過ごしたこの5年間で、責任感に対する意識の変化を実感しています。社会人が責任感を持つというのは当たり前のようなことかもしれないませんが、私の学生時代はというと、部活動のダンスに熱中した一方で、学業・研究に関してはテストがあるから勉強する、卒業論文があるから研究するというような自主性の低い学生で、今思えば責任感も足りませんでした。その結果、卒業後は希望通り亀田総合病院に就職したのですが、知識も経験も少なく、学生時代にもっと勉強しておけばよかったと感じる場面が多々ありました。月日が経ち、現在私は循環器内科病棟で病棟薬剤業務を行っています。病棟薬剤業務においては、用法

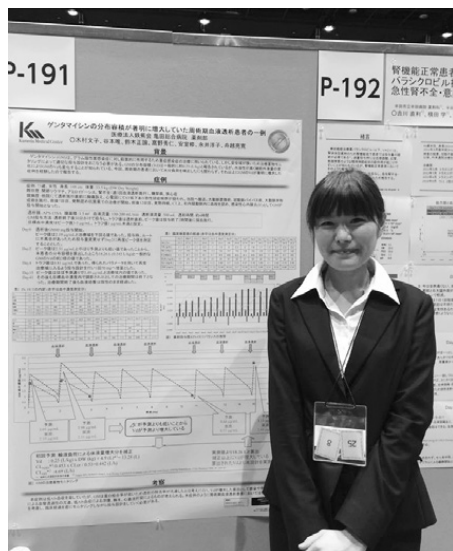
用量・相互作用・配合変化・投与速度は適切か、必要な薬は処方されているのか、この薬は本当に必要なのか、といったDrug Related Problemsとともに、患者と面談し得られた情報から薬物治療について考察し、医師と協議しています。自分の知識、考察力、判断が直接患者の治療にかかわっているということを実感し、大きな責任を感じている一方で非常にやりがいも感じています。これまでの努力不足を後悔するところもありますが、今では心を入れ替え患者の治療に役立てるよう自主性をもち勉強に励んでいます。また医療の発展は速く、日々新しい作用機序の薬剤が開発されており、薬剤師としての勉強はつきることはないと感じております。私の周りには同世代の薬剤師が多く、それぞれの得意分野についてフォローしあえる環境があります。この恵まれた環境の中でさらに自分を高め今後も医療に貢献していきたいと思っています。

今回Changeというテーマですので

病院の変化について私の感じたことを書かせて頂きます。2012年に薬学部新課程になってから初めての薬剤師国家試験が実施され6年が経過しました。私の勤務している亀田総合病院には現在93名薬剤師がおり、そのうち6年制卒は52名とすでに半数以上を占めています。私自身6年制の2期生として大学を卒業しましたが、実際に働いてきた感想として6年制卒と4年制卒で現状それほど差はないように感じています。6年制ではCBT、OSCEや長期実務実習を行い学生時代に臨床力、コミュニケーション力をつけるよう取り組まれているようですが、実際臨床現場において活用できるスキルは、就職してから臨床での経験が大きいように思います。また、6年制の学生は研究経験が少ないためか、4年制+修士課程を経て病院に就職した薬剤師と比較し文献検索や臨床研究に対する意識、スキルが低いように感じられ、6年

制卒の薬剤師は見習わなければならぬ点だと感じています。

一方で、2012年度の診療報酬改訂で病棟薬剤業務実施加算が新設されてから、薬剤師の病棟活動が活発になってきており、現在ではチーム医療の一員として薬剤師の積極的な関わりがますます必要とされています。今後6年制のカリキュラムがさらに充実し、より実践的な臨床力をもった薬剤師が増えることが期待されますが、それとともに患者のために何が出来るかを考えながら、自主性をもって行動できる薬剤師が活躍できるのではないかと考えます。またそれは病院薬剤師に限らず、どの職種でも自主性を持つことは重要だと思います。現在学生の皆さんは大学生活でそれぞれライフスタイルがあるかと思いますが、目標に対して自主性を持って行動できるようになっ



クリニカルファーマシーシンポジウムにてポスター発表しました



静薬学友会報に寄せて

独立行政法人医薬品医療機器総合機構 加藤 彩香

(旧姓 岡本)
(平成26年卒)

皆様、こんにちは。今年の3月に静岡県立大学大学院を修了いたしました、加藤彩香と申します。この度は、静薬学友会の一般社団法人化につきまして誠にありがとうございます。また、特集記事の編綴にあたりお声がけいただきありがとうございます。"Change"をテーマにこのことですので、自分の身の回りの変化について綴ることにいたします。

月並みですが、やはり一番の変化は学生から社会人になったことかなと思います。

私は平成26年3月に本学薬学部薬学科を卒業し、平成30年3月に薬食生命科学総合学府 薬学専攻(医薬生命化学講座)博士課程を修了しました。4月からは(独)医薬品医療機器総合機構(PMDA)で働いています。

PMDAは、健康被害救済業務、承認審査業務、安全対策業務というセイフティ・トライアングルを通じて、国民保健の向上に貢献することを目的とした組織です。私はPMDAの中で、「再生医療製品等審査部」という部署に所属しています。再生医療等製品の品質、有効性及び安全性について、治験前から承認、市販後まで一貫した体制で指

導・審査をするための部署です。先輩職員の皆様の指導を受けながら、新たな環境で業務に邁進しております。学生・院生の頃とは異なり、デスクワークが中心の日々です。本原稿執筆時点でまだ入構4カ月半ですが、数々の資料とにらめっこする毎日なので、研究室で実験等に明け暮れていた学生時代が早くも懐かしくなっています。

再生医療等製品とは「(1)人又は動物の細胞に培養等の加工を施したものであって、身体の構造・機能の再建・修復・形成するもの、疾病の治療・予防を目的として使用するもの、(2)遺伝子治療を目的として、人の細胞に導入して使用するもの」であって、政令で定めるものを指します。現在、「ジェイス」(株)ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング、平成19年、「ジャック」(株)ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング、平成24年、「テムセルHS注」(JCRファーマ(株)、平成27年)及び「ハートシート」(テルモ(株)、平成27年)の4品目が承認されています。このうちジェイスとジャックは旧薬事法下で医療機器(生物由来製品)として承認されました。当時は再生医療等製品という区分がな

かったためです。

再生医療等製品に係る規制上の大きな"Change"がもたらされたのは5年前のことです。平成25年5月に「再生医療を国民が迅速かつ安全に受けられるようにするための施策の総合的な推進に関する法律」が公布され、これを踏まえて同年11月に「再生医療等の安全性の確保等に関する法律」及び「薬事法の一部を改正する法律(薬事法改正法)」が公布されました。この薬事法改正法により「再生医療等製品」が先述のように新たに定義され、同時に、再生医療等製品の特性を踏まえて「条件及び期限付承認制度」が導入されました。再生医療等製品の特性とは、例えば、アンメットメディカルニーズに応える製品であるがゆえに治験に登録できる患者数に制限があること、原材料であるヒト・動物由来細胞等の品質が不均一であることによる評価の困難さ等を指します。従来の医薬品規制をそのまま当てはめすぎることにより、治験や審査が長期化するリスクが高ことから、再生医療等製品を特別に早期に承認できる仕組みが導入されました。先述のハートシートは、本制度により承認され

た初めての再生医療等製品です。

制度、規制というものは、その時点での最新の科学的見地に基づくものであり、科学の進歩等により常に変化しうるものと思います。医療現場のニーズや開発現場の現状等を踏まえた"Change"に柔軟に対応できるよう、継続して勉強する必要があると感じます。仕事に関係する話ばかりになってしまいましたが、私生活でもこの数カ月で引越しまり結婚など色々な変化がありました。充実した毎日を送れているのは、いつも支えてくれる夫や家族たちのお陰であるということを常に忘れずにいたいと思います。また、卒業してもお付き合いくださる静岡県立大学の恩師、友人、先輩後輩の皆様へ、心より感謝を申し上げます。学生の皆様にもぜひ、大学で築くかけがえのないご縁を大切にしたいです。変わりゆく日々の中、変わらぬ縁は、想像以上に強く自身を支えてくれるものです。結びになりますが、静岡県立大学ならびに静薬学友会の今後益々の発展を祈念いたしまして、寄稿文とさせていただきます。

平成29年度薬学生涯研修講座 開催報告

薬学生涯研修講座運営委員 理事 大木 明 代
(昭和62年卒)

平成29年度薬学生涯研修講座のテーマは医療薬学最前線であった。現在の薬学教育の実際、そして将来、国が薬剤師に望んでいるものとは何か、を提議する研修会だった。

今回の研修会は、三部構成になっており、それぞれが今の最前線の内容であった。

第一部はハートシートの研究開発と治療について。ハートシートとは、傷ついた心臓に自己の筋肉で作った薄い膜を貼り付ける事で、心臓の機能を補う医療材料であり、再生医療の研究から生まれたものである。私は単純に筋膜が心筋の助けをする物と思っていたのだが、そう単純なものではなく、むしろ分解されて心筋の一部になって新たな心筋を生み出すと言うのに近い作用と考えられる。

勿論心筋梗塞を起こした心臓が元どおりとはいかないだろうが、考えようによっては心臓移植より安全な医療と言えるのではないだろうか。自己移植だから、少なくとも免疫抑制剤は使わなくて済むわけだし、免疫を損なわないということとは将来にわたって感染症のリスクも下がる。癌などのほかの疾患を招くリスクも下がるかもしれない。今後、心筋細胞だけでなく、他の損なわれた臓器への応用も広がっていく可

能性を秘めた研究だと思った。

岐阜薬科大学の取り組みも面白かった。被災地へ実際に行った先生のお話はとてもリアルで、その活動力が聞いているものにも分け与えてもらえるような感じがした。新しい取り組みであるモバイルファーマシーは、災害時に威力を発揮するものとして静岡県でも導入されているが、それが実際に使われた熊本地震では、しっかりと薬局の機能を果たしていた。また、発災時の24時間対応も複数の薬剤師がいてこそできることだったろう。本当に発災したばかりの時は中々薬剤師ができる仕事は少なそうだが、JICAとして行った時は、医師の助手もしていたようだし、最低限の医療技術は身につけていた方が良さそうだと感じた。

そのほか、アルプスでの夏期診療所での活動、インターネット販売の有用性の研究など、多岐にわたるお話を聞いた。

岡田副会長のお話も、サポート薬局を目指すものにとっては勇気づけられるものだった。薬局はある意味過渡期を迎えている。国の医療に対する締め付けは今後ますます厳しくなっていくだろう。福祉分野を締め付ける国の方向性はどうかと思うが、実際赤字財政の国としては少しでも医療費を下げた

いだろうことは想像できる。今後、簡単な医療（風邪など）は保険診療からOTCでの治療にしていくような国の政策誘導がされていくかもしれない。国の政策で右往左往するのが薬局の立場だが、一番大事なのは身近な患者さんだろう。向く方向を間違えず、自分に出来ることを積極的にしていくことが大事だろう。

今回の生涯学習講座は、それぞれの内容的にはつながりがなかったかもしれないが、大局で捉えたとき、薬剤師がおかれている生き残りの方法を示し

ている。

大病院の薬剤師は最先端医療に通じるように求められ、開局薬局の薬剤師は地域に密着して一番身近な医療人であることを求められている。そして、そこには、医師と対等なパートナーとして働く薬剤師の姿勢がなくてはならない。実際在宅医療で医師に同行すると、薬剤師として意見を述べる機会がある。薬剤師法の第一条にあるように、国民の健康に貢献するために、日々研鑽しなければと気持ちを新たにさせられる研修会だった。



静岡県薬剤師会副会長 岡田国一先生



岐阜薬科大学 林秀樹先生



平成29年度薬学生涯研修講座 H30.2.25

地区同窓会だより

北海道地区

地区同窓会代表 水島 教之

(昭和54年卒)

この夏約2週間の間に母と義父を看取った。平成14年に透析継続中の実父を病院のICUで見送った。医療に関わる身でありながら、あつけない死・実感がわかない違和感を否定できない後悔が残った。時を同じく妻(久美)の母親がパーキンソン病の症状が悪化し、鹿児島から北海道を終の住処と決めて両親が移住、同居の介護生活が始まった。平成25年 その母は、夫である義父の腕に懷かれて静かに逝った。死んだとの実感、明日からいないという空しさを感じました。この看取りこそが自分自身の在宅業務に刺激をくれた。

実母は圧迫骨折をきっかけに徒歩圏の施設に入居し、今回亡くなる前二ヶ月を訪看さんのお世話になった。義父は5年前に要介護5となり、ほぼ寝たきりとなったが自宅での暮らしを希望したこともあり、医療の介入無しで終末を選択した。この6月中旬からは飲食を拒否、自ら枯れることをはっきりと希望した。僕たち夫婦は何回も何回も検討をした。食事・水分補給を拒否

する父にある種の共鳴を感じた。最終的には、はっきりした意識の中「本人の意識」を尊重した。細いことを挙げればきりが無いが「人間の生きる可能性に向かう知恵と勇気」を学んだやり切った看取りだった。身を持って僕らに在宅介護の24時間×365日を体験させてくれた。大正生まれの義父には

【大あっぱれ！】を贈ろう。これから薬局は在宅が始まろうとしています。この経験をいかして老人が家族が納得できる在宅をしていきたいと思っています。薬剤師よ、外に出よう！チャレンジをしよう！仕事は、人生を豊かにするには小さな手段でしかない。

また最後に僕たち夫婦の在宅をしてくれる薬剤師を大募集しています。

長野県地区

地区同窓会代表 勝山 善彦

(昭和57年卒)

一般社団法人静薬学友会の発足おめでとうございます。学友会が法人化され長野県支部でなく長野地区同窓会となりました。学友会支部と異なり、各

地区の同窓生の親睦会となります。形式上は一般社団法人静薬学友会には支部組織が規定されておりませんので、静薬学友会からの参加をお願いしますが、独立した形での開催となります。次回の長野地区同窓会の開催は、先ず、今まで通りの方向で進めて行こうと考えております。

長野県は県歌「信濃の国」で「信濃の国は十州に 境連ぬる国にして」と歌われている通り、越後(新潟県)、上野(群馬県)、武蔵(埼玉県)、甲斐(山梨県)、駿河・遠江(静岡県)、三河(愛知県)、美濃・飛騨(岐阜県)、越中(富山県)の十国に囲まれています。そのため長野県在住と言っても、地域により隣接県のイメージが変わってきます。飯田市ですと愛知県が近いですし、長野でしたら新幹線がありますので北陸も東京も比較的近く感じます。松本ですと、愛知も、東京も北陸もある程度の時間が必要となります。次回の長野県地区同窓会は2019年に開催する予定で準備を進めております。同窓会では、地区同窓会の今後の方針なども話し合っていきたいと思ひますので、ぜひ多くの長野県在住の同窓生の皆様の出席をお待ちしております。予定が決定いたしましたら、静薬学友会ホームページや、郵便物、メールなどにてご連絡いたします。

私自身は、還暦にさしかかり、職場では、デスクワークが多くなり、筋力、体力がめっきり落ちてきたことを最近

痛感しております。気持ちはまだ大学を卒業した当時と変わっておりませんが、足腰が弱く、バランス感覚が落ちてきています。反面、朝起きが得意になってきました。朝目が覚めると4時ころで、しばらくすると窓の外は、明るくなってきました。そこで、最近では体力維持、メタボ対策で朝、畑に出かけて野菜、果物などを作っています。畑に行く途中や畑では、キツネ、イノシシ、キジ、タヌキなどによく出会います。人生100年時代と言われてきておりますので、そろそろ第二の人生の準備も始めていこうと思っています。

北陸地区

第5回北陸支部総会開催報告

地区同窓会代表 村松 郁延

(昭和44年卒)

第5回北陸支部総会を平成30年3月11日(日)に、福井市のユアーズホテルフクイにて開催いたしました。参加者は11名と少なかつたのですが、賑やかに開催することができました。総会では、まず、本部の大石悦子副会長から、学友会活動の近況と4月からの法人化について報告がありました。その報告を受け、法人化に伴い本支部は「静薬学友会北陸地区同窓会」と名称を変更す



北陸地区同窓会 H30.3.11 於ユアーズホテルフクイ

ることが承認されました。そして北陸地区同窓会選出の代議員は、原則として、北陸地区同窓会代表とすることも決まりました。

北陸地区同窓会は福井、石川、富山、新潟の4県で構成されています。そこで、各地区の支部長として、福井支部は村松（昭和44年卒）、石川支部は益岡尚由氏（平成15年卒）、富山支部は門脇 真氏（昭和57年卒）、新潟支部は山下和夫氏（昭和56年卒）にお願いしました。次回は、2年後に金沢市で開催する予定です。

次に、地区同窓会を今後どのように発展させ、参加人数を増やしていくか、議論しました。

第一案は、他地区の同窓会との合同開催の可能性です。以前、長野支部が

ら合同開催について問い合わせがありましたので、今後長野地区同窓会と連絡を取っていくことになりました。第二案は、北陸地区出身の在校生にできるだけ声をかけ、在学中からコミュニケーションをとり、夏休みや春休みに開催して参加を促すという意見でした。次回の金沢市開催は、在校生の帰省時に合わせてみようと思っています。どの先輩が地元のどこで働いているかといった情報は意外に知りませんので、在校生にとっては貴重な機会になると思います。総会後の懇親会で参加者の近況を聞いているうちに、あつという間に2時間が過ぎてしまいました。飲みたらない人と一緒に、大石副会長を交え、2次会で福井の地酒を楽しみました。北陸地区同窓会会員はじめ同地区出身の在校生の皆様には、次回の総会に是非出席していただきたくお願いする次第です。

東海地区

平成29年度東海支部総会・
薬剤師セミナーが開催されました

地区同窓会代表 松崎雅英
(昭和60年卒)



平成29年度東海支部総会 セミナー参加者の皆さん

今年度より、静薬学友会代議員と共に静薬学友会東海地区同窓会代表を仰せつかりました。法人化された静薬学会の発展と共にこの地区における会員の取り纏め役として微力ながら活動させて頂きますので、三上前静薬学友会東海支部長同様、ご支援、ご協力を賜りますようしく願います。

ここでは、平成29年12月17日(日)に名古屋駅前にあるウインクあいち(愛知県産業労働センター)で開催された「平成29年度静薬学友会東海支部 総会・第41回薬剤師セミナー」を紹介させていただきます。

このセミナーでは、薬剤師としてのモチベーションを高めることを目的に、それぞれの立場で活躍されている静薬卒業生の講演が行なわれておりますが、講師が同窓生であることから気軽に率直な意見交換を行なうことができ、理解を深められるとても貴重な場となっています。そして、研修会終了後には、地下のお店へと会場を変え親睦を深めることも行なわれました。

今回のセミナーは、平成30年12月9日(日)に開催を予定しておりますので、皆様の参加をお待ちしております。

講演要旨

実務実習への周術期の導入とその成果

愛知県がんセンター中央病院薬剤部指導科長

松崎雅英

(昭和60年卒)

高齢化に伴い手術適応が拡大し基礎疾患を有するハイリスク症例が急増している。手術患者の総合的なリスクを決めるのは基礎疾患であり、既往歴や内服歴についての十分な評価と周到な準備、術後の適正な管理が必須である。

これらの対応は他職種の協議なくしては不可能であり、厚生労働省は他職種が目的と情報を共有し互いに業務を分担、連携補完し合う「チーム医療」を推進している。

日本麻酔科学会では、周術期医療の質を向上させるために「周術期管理チーム」プロジェクトを立ち上げチーム医療の導入を図ってきており、2014年に「周術期管理チーム看護師」の認定試験が開始された。薬剤師については、2015年に「周術期管理チーム薬剤師」として認定制度が設けられると共に他職種連携に参画することとなったが、薬剤師が具体的に何を行うかは定められていない。

日本病院薬剤師会の調査によると、手術室薬剤師の業務の多くは医薬品管理の延長にとどまり医師等の負担軽減のみになりかねない現状が分かったことから、外来で手術が決まった時点から医師と協議し薬物治療に対する管理と提案をするあるべき姿へ進化させるため薬学的管理の標準化を立案し、「根拠に基づいた周術期患者への薬学的管理ならびに手術室における薬剤師業務のチェックリスト」を作成し業務の標準化を図りつつある。

薬学生の実務実習における新モデル・コアカリキュラムにおいては、チーム医療において周術期の導入が視野に入れられているが、今回当院で行われた実務医実習に周術期管理の力リキュラムを導入し、外来診察、症例カ

ンファレンス、入院時の介入、麻酔科医・看護師への動向、手術立会及び薬剤管理、術後ケア及び医師回診同行などを行った。

その結果、薬学的知識を用い他の医療スタッフへ情報提供すると共にコミュニケーションを図ること、inner balanceなど周術期独特の知識について学生の時点においても意識して学ぶことが必要であるとの訴えが学生からあった。

今後、この実習を重ねると共に学生からの意見を集約し、今後の薬剤師の職域拡大及び薬学教育充実への働きかけを続けてゆきたい。

講演要旨2

食物成分による薬物トランスポーターの機能修飾

名古屋大学大学院 医療技術科学専攻教授

涌澤 伸哉

(昭和51年卒)

薬の消化管吸収、組織分布、体外排泄などの際の膜輸送に関わるトランスポータータンパクとして多くの種類のタンパクが見出されている。それらはその特徴からABCトランスポーターとSLCトランスポーターに分類されており、前者はタンパク分子内にATPase領域を有するタイプで、主なものはMDR1 P-glycoprotein (ABC BCB1)、MRP2 (ABCC2)、B

CRP (ABCG2) などが細胞からの汲み出しを担い、後者はATPase領域を持たないタイプでOATP1A2 (SLCO1A2)、OATP1B1 (SLCO1B1)、OATP1B3 (SLCO1B3)、OATP2B1 (SLCO2B1) などが細胞内への移行を担っている。

グレープフルーツジュースの薬物代謝酵素CYP3A4阻害作用は広く知られているが、MDR1 P-glycoproteinの阻害作用も知られている。グレープフルーツジュースは他にもOATP1A2、OATP2B1を阻害する。オレンジジュースやリンゴジュースもこの2つのトランスポーターを阻害する。OATP1A2、OATP2B1は消化管で比較的多くの薬物の吸収に関わることから、影響を受ける可能性も指摘されている。緑茶もOATP1A2に影響を及ぼすと報告されている。

玉ねぎに豊富に含まれるケルセチンは緑茶にも多く含まれ、玉ねぎと共に年間を通してケルセチンの供給源になっている。ケルセチン自身OATP1A2、OATP2B1を介して吸収されるが、ケルセチンはこれらのトランスポーターを阻害する。お茶カテキンもやはりこれらを介して吸収されるときにも阻害もする。カテキン類の体内移行については良くないので茶を淹れて飲む程度のカテキンで影響があるとは思えないが、玉ねぎなどの他の食材との兼ね合いによっては薬の吸収に

影響を及ぼかもしれない。まだまだ食品成分の作用についての情報量が少ないので、より多くの情報が待ち望まれる。

講演要旨3

医薬品安全性のための

「かかりつけ薬局」の役割

在宅への第一歩、一包化の前に危険予知

有限会社はなみずき薬局 取締役・本部長

北川 俊朗

(昭和49年卒)

2015年10月23日に厚生労働省から出された「患者のための薬局ビジョン」は、「医薬分業の原点に立ち返り、現在の薬局を患者本位のかかりつけ薬局に再編する」ことを目的として策定されました。

2016年4月から「かかりつけ薬剤師」を希望すれば、自分が信頼できる薬剤師を選び、薬、健康のことをトータルで把握してくれ、相談に乗ってもらおう薬剤師に担当してもらうことができる制度になりました。

かかりつけ薬剤師とは、「患者の服薬状況を一元的・継続的に把握し、それに基づき患者へ指導等を行う」「得られた患者情報に基づき、かかりつけ医に服薬情報等を報告するとともに、薬学的見地から処方内容の疑義照会や処方提案等を行う」薬剤師と定義されました。

「かかりつけ薬剤師指導料」「かかりつけ薬剤包括管理料」を届け出るための施設基準の一つに地域包括ケアシステムの構築に向けた、地域住民を含む地域における総合的なチーム医療・介護の活動医療の参画があげられます。

地域に根ざしたかかりつけ薬局になれば当然在宅への関わりが求められます。昨年4月から全国各地でかかりつけ薬局の研修会・在宅薬剤訪問管理指導の研修会が行われています。患者の自宅での薬剤の残薬状況、保管状況を把握し、一包化の提案や「お薬カレンダー」「配薬ボックス」を使って薬剤を管理する等の推奨がされています。薬剤師が在宅医療に於いて残薬の確認、適切な服用指導することで医薬品が整理され、数百億円の薬剤費の節減が期待されております。

服用コンプライアンスの向上のために在宅薬剤訪問管理で実施されている薬の一包化、お薬カレンダー等を利用した薬の管理は、一方で過量投与による副作用を引き起こす危険性を含んでいる。

医師は患者が処方通り薬を服用していると思っている場合が少なくない。また他科での処方に対しての相互作用までは考慮されていない場合が多い。患者が処方どおり間違えなく薬を服用した場合の過量による副作用のリスクまでは考えてはいないと思われる。一包化されている患者の多くが腎機能の低下した高齢者である。

一包化の前にまず処方された薬の投与量から患者の腎機能を考慮して、実際に血中濃度を測定しなくても予想される定常状態の血中濃度を考え、相互作用を考慮して副作用のリスクを予測する必要がある。

関西地区

静薬学友会関西地区同窓会の開催報告

地区同窓会顧問 中村 一基
(昭和58年卒業)

静薬学友会会員の皆様におかれましては、お元気でご活躍のことと存じます。

6月18日には、大阪府内で統計を取り始めてから最大(震度6弱)の大阪北部地震が発生し、多くの方々が被災されました。また、7月上旬にかけて、各地で大雨特別警報が発表されるほどの記録的な大雨となり、大きな災害が発生しました(平成30年7月豪雨)。被災されました会員の皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

さて、静薬学友会関西地区同窓会が、平成30年6月3日(日)11時より京都平安ホテルにて開催されました。前回開催後、静薬学友会総会の京都開催、静薬創立100周年記念事業の開催があり、4年ぶりの開催となりました。出席者は38名であり、昭和36年卒業の佐藤美也

子氏から平成4年卒業の岩崎綾乃氏、澤下仁子氏、藤本勝博氏まで、幅広い年齢層の卒業生にお集まりいただきました。まずは、地区の総会として、藤本司氏の司会のもと、河本光宏関西地区同窓会発起人(3月までの旧学友会組織における関西支部長)からの挨拶、岩崎綾乃関西地区同窓会会計担当からの会計報告に続いて、横倉輝男静薬学友会会長から、挨拶を頂きました。

河本発起人からは、静薬学友会の法人化に伴い、関西地区に求められた3名の代議員を互選し、河本光宏氏、藤本司氏、松田通明氏が選出されたことが報告され、新しい任意組織として、関西地区同窓会としたいこと、組織の構成として、静岡県立大学の卒業生(大学院・学部)で組織する役員体制に刷新するとともに、同窓会を開催するための実行委員会組織(旧支部役員を含む)を設けること、県立大学卒業生の関西地区同窓委員会を設置することが提案され、同意されました。

新役員は、旧関西支部の幹事の中から、松田通明世話人(代表)、藤本司世話人、岩崎綾乃会計が、また、新たに、澤下仁子幹事、藤本勝博幹事が選任されました。なお、顧問として、北村正孝氏、河本光宏氏、筆者(中村一基)の3名が支援します。また、実行委員会には、役員や顧問のほか、尾阪芳孝氏(兵庫県同窓会主幹)、友村雅昭氏(奈良県同窓会主幹)、清家功氏が加わります。

横倉会長には静薬学友会が一般社団法人として生まれ変わった現状についてお話しいただき、横倉会長は、今後とも活発な会活動を維持するために、出来るだけ多くの会員から年会費を納入していただけるよう、出席者の方々にも協力をお願いしたいと呼びかけられました。

総会後、出席者全員による集合写真を河村信弘旧関西支部顧問のご指導のもと、撮影致しました(写真1)。



写真1 関西地区同窓会 H30.6.3 於京都平安ホテル



写真2 講師の小林寛氏

工業㈱の小林寛氏（写真2）と元日産化学工業㈱の坂下光明氏（昭和52年卒業）から貴重な情報を提供していただきました。

小林氏からは「免疫チェックポイント阻害薬PD-1抗体とは？」その抗がん作用メカニズムとリアルワールドエビデンス」という題目で、従来なかった全く新しい作用機序によるファーストイン抗がん薬であるニボルマブ（オプジーボ[®]）に関する懇切丁寧な講演をいただきました。ニボルマブが効くであろうと予想されるのはPD-1のリガンドであるPD-L1が高発現している患者であり、PD-L1は診断および治療のバイオマーカーになり得ることやニボルマブの最初の適応症が悪性黒色腫であった理由として、悪性黒色腫には免疫療法が奏効すること、悪性黒色腫に有効な治療薬が少なかったことを知りました。ご講演の最後に、「もしも私がかんに罹ってしまった場合には、是非ともオプジーボを使ってみたい。」と自信を持って締めくくられたのが、大変印象



写真3 懇親会にて 関西地区同窓会

的でした。
続いて坂下氏からは、「新規高コレステロール血症治療薬の開発」HMG-CoA還元酵素阻害剤・ピタスタチンの創生」という題目で、種々のスタチンの中でベストインであるピタスタチン（リバロ[®]）に関する膨大な情報を効率よくご講演いただきました。商品名の由来がLipid and Vascular



写真4 懇親会でなごやかに歓談



写真5 一人ずつステージに立ってあいさつ

event Lowering (LIVALO)であること、ピタスタチンは強力に血中LDL-Cコレステロール値を下げるのみではなく、血中HDL-Cコレステロール値を上昇させること、さらに、他のスタチンはCYP3A4やCYP2C9などにより代謝されるが、ピタスタチンはCYP非代謝型であるために他薬との相互作用を起こしにくい

ことなどを知りました。

このように、講演会にて十分に勉強した後は、懇親会が開催され、参加者の皆様が世代を跨いで親睦を図りました（写真3）。司会は、清家功関西地区同窓会実行委員と松田通明関西地区同窓会世話人（代表）が務め、参加者全員の自己紹介・近況報告（2名の先輩方から、それぞれ独唱のご披露もございました）を中心に大いに盛り上がりしました（写真4・5）。最後に北村正孝関西地区同窓会顧問が閉会の挨拶を述べ、閉会の運びとなりました。

最後に、参加者全員のご氏名を掲載させていただきます。

佐藤美也子、大久保好子、河村信弘、上杉史代、名倉猛夫、横倉輝男、森本正信、尾阪芳孝、清家 功、今村政晴、田村義男、吉村京義、矢野千恵、北村正孝、野瀬和孝、蓑内徳蔵、辻屋正弘、坂下光明、井浦教子、篠塚朋子、河本光宏、美濃部淳子、中村一基、堺谷研嗣、森山賢治、柴野広介、本城武子、藤本 司、松田通明、園田寿寿、長野有美子、松木いつ子、岩田直子、岩崎綾乃、澤下仁子、藤本勝博
小野薬品工業株式会社 小林 寛、谷口勝也

（敬称略・順不同）

講演要旨

新規高コレステロール血症治療薬の開発

—HMG-CoA還元酵素阻害剤・ピタバスタチンの創生—

元日産化学工業(株) 取締役医薬品事業部長

坂下 光明

(昭和52年卒)

高脂血症(高コレステロール血症)は、高血圧、糖尿病、肥満等と並んで動脈硬化性疾患の重要な危険因子の1つであり、疫学的調査により血中LDLコレステロール濃度と動脈硬化性疾患の発生率は正の相関があることが示されている。日本においても近年の食生活の欧米化に伴い高脂血症患者が増加し、有用な高コレステロール血症治療薬の登場が望まれていた。

その様な中、治療において、HMG-CoA (β -hydroxy- β -methylglutaryl coenzyme A)還元酵素阻害剤は、最も有効に血中コレステロールを低下させる薬剤として認知され、1980年



講師の坂下光明氏

台には、世界中において更なる有効性及び安全性の高い治療薬の創生を目指していた。その作用機序は、肝臓でのコレステロールの合成の律速酵素であるHMG-CoA還元酵素を拮抗的に阻害することにある。この酵素阻害作用によりコレステロール合成が抑制され、細胞内コレステロール含量の低下をきたし、それにより肝細胞表面のLDL (low-density lipoprotein) レセプターが増加し、血液中のLDLを積極的に細胞内に取り込むことにより血中のLDLコレステロールを低下させる。HMG-CoA還元酵素阻害剤は、スタチンと総称され、その開発の端緒は1976年に青カビの一種から抽出された天然物(メバスタチン)から始まる。天然物スタチンとしてプラバスタチン(三共)、ロバスタチン(メルク)、シンバスタチン(メルク)が上市されており、いずれもその構造としてナフタレン環とHMG-CoAと類似する β -hydroxy- δ -lactone構造(あるいは開環構造)を有していた。

天然物スタチンの発見以後、大手外資を中心にそれをリード化合物として活性中心である β -hydroxy- δ -lactone構造を保持し、ナフタレン環を交換する試みがなされ、第2世代のスタチンとして全合成品であるフルバスタチン(ノバルティス)やセリバスタチン(バイエル)が上市されつつあったが、有効性と安全性が充足されている薬剤は



講演会の様子 関西地区同窓会

無かった。その様な中、日産化学工業株式会社は、有効性と安全性を兼ね備えた新規スタチンを開発すべく、基盤技術である有機合成力を生かし、数々の構造変換に注力し、薬理スクリーニング結果を基に、メデイシナルケミストリーを実施した。その結果、複数の

複素環においてシクロプロピル基を有する有望なスタチン類を見出した。

その後、日産化学工業株式会社は興和株式会社とライセンシング契約を締結し、興和株式会社が主導し、共同開発を進めることにより第3世代のスタチンと呼ばれるキノリン骨格を有するピタバスタチンを創生し、2003年に日本において上市した。ピタバスタチン(リバロ)は、他剤と比較して、有効性が高く、薬物相互作用が少なく、副作用発現率が低く、安全性の高い有用な高コレステロール治療薬として認知され日本において広く使用されており、医療に大きく貢献している。また、アジア・欧米においても上市され、世界21カ国において発売され医療に貢献している。

奈良県副支部会

平成29年9月に関西支部奈良県副支部会(現・関西地区奈良県同窓会)を開催

副支部長(現・関西地区同窓会実行委員)

友村 雅昭

(昭和53年卒)

静薬学友会の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

本年4月から学友会が法人化されましたが、旧体制での開催を報告します。そのため、以下、当時の組織表示になっていますことを申し添えます。



写真② 近況報告会 奈良県副支部会



写真① 奈良県副支部会 H29.9.10



写真④



写真③

平成29年9月10日(日)、奈良市で奈良県副支部会を開催しましたところ、16名のご参加を頂きました(写真①)。日曜日にも拘わらず河本関西支部長をはじめ皆様方のお元気を拝見することができました。奈良県内居住者で公開している会員は60名位です。今回は16名の参加があり、本場に打ち解けた雰囲気のであつたように思います。まずは私事ですが、昨年35年の病院勤務から調剤薬局に転職いたしました。初めて転職サイトにも登録、そして勤務した薬局も肌に合わず、転々としてやっと落ち着ける薬局に巡りあえて今、勤務しております。

河本関西支部長には学友会の活動報告と来年に開催される京都での4年ぶ

りの関西支部総会の案内、次の100年に向けての動き、学友会の法人化、支部活動の方向性などの報告を頂きました。講演では会員である奈良総合医療センターの森田芳樹様からCKD(慢性腎臓病)についてお話を頂きました。チーム医療の関り、CKDの教育入院など興味深い講演を頂きました。皆様から活発な質疑があり活況な講演会でした。

恒例により、2年間の近況報告会も1時間40分とこれも楽しい時間でありました(写真②)。皆様の趣味の多彩さに、驚きそして、勇気も頂きました(写真③④)。

久しぶりに先輩、後輩の親しさを感じながら、学生時代に戻ったようにリラックスした雰囲気の中、時間のたつのも忘れ懇談しました。皆様方の生き生きとして活躍されている様子を拝見し、心が熱くなるのを感じました。最後となりましたが河本関西支部長をはじめ皆様方のご協力のもと、開催できたことを厚くお礼申し上げます。次回元気で会いできることを心から祈っております。

参加者

森田芳樹 今本哲治 伊藤俊雄
三並衣織 駒木玲子 北田祐子
北田善三 小瀬晶子 小瀬俊裕
松井 博 今村政春 福田忠明
山本育弘 中村芳正 河本充宏
友村雅昭

講演要旨 CKD(慢性腎臓病)について

奈良総合医療センター 森田 芳樹
(平成29年卒)

平成29年9月10日に静薬学友会関西支部奈良県副支部会が開催され、僭越ながら「CKD(慢性腎臓病)」について」というテーマで講演させていただきました。

私は2つの病院で計7年ほど、慢性腎臓病サポートチーム(現在勤務している病院ではKSTと呼んでいます)というチーム医療に関わり、そこでの経験も踏まえてお話しさせていただきました。

当日の講演内容について簡単に書かせていただきます。

CKDとはChronic Kidney Diseaseの頭文字をとったもので、慢性腎臓病とも言います。

診断基準は①蛋白尿が出ている。②糸球体濾過率(eGFR)が60ml/分/1.73㎡未満の項目の両方またはどちらかが3か月以上続くとCKDとして診断されます。

まただいたい糸球体濾過率が10ml/分/1.73㎡を下回ると、透析療法を考える必要があります。

CKDになると治療行っても腎機能がよくなることはありません。正しい知識を身につけて、今ある腎機能をいかに維持するかがポイントとなります。



講演する森田氏



熱心に講演に聞き入る 奈良県副支部会

す。腎機能悪化を抑制するには、蛋白尿（アルブミン尿）を抑えることが重要です。そのためには、腎臓に負荷をかけない食事療法と薬物療法を実践することが必要です。

食事療法と生活習慣の改善としては、①塩分制限（摂取量6g未満／日）②蛋白質制限（腎機能が悪化してくると0.6～0.8g/kg／日）③禁煙などが挙げられます。

また蛋白尿を抑える薬としては、レニン・アンジオテンシン系阻害薬として①ACE-I（アンジオテンシン変換酵素阻害薬）②ARB（アンジオテンシンII受容体拮抗薬）③抗アルドステロン薬が挙げられ、ジピリダモールや塩酸ジラゼブなどの抗血小板薬も使われることがあります。

腎機能を悪化させる因子としては、①高血圧②糖尿病③脂質異常症④高尿酸血症⑤尿毒症毒素などが挙げられます。

私の勤務している病院では、医師・看護師・栄養士・臨床検査技師・薬剤師からなる慢性腎臓病サポーターチームが組織され、情報を共有しながら各職種が職能を生かして、患者さんに教育・サポートしています。我々は患者さんが正しい知識を持って取り組み、腎機能の低下を抑えられる例を数多く経験しており、腎機能の低下を抑えて寿命までに透析にならないようにすることが、我々チームの目指すところです。そのためには早期から正しい知識を

身につけてもらい、腎機能の低下を抑えることが重要です。

中国地区

体験実習『へき地医療を学ぼう！in庄原』

地区同窓会代表 池田 潔

（昭和54年卒）

静薬学友会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素、支部会の運営にご協力頂き心より感謝申し上げます。

この度の西日本豪雨災害により、西日本を中心に広島、岡山など甚大な被害を受けました。被災された皆様におかれましては、心よりお見舞い申し上げます。

毎回、中国支部の特色ある地域性を生かした会報の話題探しに苦労しています。本学では、広国教育スタンダードとして健康・医療・福祉からなる専門職連携教育（IPE）を進めています。今回は、本学の薬学部環境衛生薬学教室・杉原数美教授が取り組んでいる地域連携活動の一環として、移動診療車による中山間地無医地区医療の体験実習『へき地医療を学ぼう！in庄原』についてご紹介いたします。

広島県は、瀬戸内海の島嶼部から平野部を挟み中国山地に至る広大な中山

間地を有しており、無医地区が北海道に次いで全国第2位（第3位高知県）と多く、その約半数が県北部の庄原市に位置しています。広島県では医療へのアクセスが悪い住民に対して、「広島県へき地医療支援機構」が中心となり効率的・効果的な医療体制の確保が行われています。広島大学医学部では、地域医療教育センターが設置されており、医学部5年次に全員が広島県下の地域病院で1週間の地域医療実習を行っています。しかしながら薬学生のへき地医療の学習および実習はあまり行われていません。さらに学生の就職先も都市部に片寄り、薬剤師不足に困窮している地域の医療機関も多いのが現状です。地域医療では、医師以外の医療スタッフの人材不足が深刻で、現場では専門分野を超えて全員の協力協働が必要とされています。本学では、無医地区やへき地ではどのように医療サービスが提供されているかを学び、将来へき地医療に携わる意欲を持つ薬学生の育成などを目的として、無医地区医療の体験実習をへき地医療の拠点である庄原赤十字病院の協力で行われました。

庄原赤十字病院は、広島県北部の拠点病院の一つとして昭和56年より無医地区診療を実施しており、平成24年からは車内での診療が可能な移動診療車が導入されました。今回、本学薬学部の4、5年生が移動診療車での診療活動を中心に体験実習を行いました。移

へき地医療の拠点となる庄原赤十字病院



病床数 303床

18診療科で広島県北部の中山間地域において急性期から慢性期までの治療を行う病院として機能しています。



動診療車には、主要な医療機器が設置されており、血液検査、超音波診断や心電図検査などが可能であり、医師、薬剤師、看護師、検査技師が同乗しています。薬剤師の事前業務としては定期服用薬の準備、常備薬の点検のほか、訪問先では患者さんの処方監査、薬の説明、問診や他職種のフォロー、電子カルテが使用できない地区では会計支援など、そして帰院後には処方箋、薬歴の記入、次回診療への申し送りなど、きめ細やかな対応を行っています。医療スタッフ間の連携が緻密で患者の要望への対応も早いなど、地域の特性、住民のニーズに合った医療がスタッフの連携で提供されています。中山間地では保険薬局、ドラッグストアへの利便が悪く、配置薬などの利用も多く在宅医療など薬剤師がサポートできることが多くあります。医学部生も実習しており、医学部では地域医療実習が講座として行われており、薬学部をはじめ他の医療職学生も地域医療実習により地域医療に関心を高める必要性があります。巡回診療に対する患者さんの声として、遠方の病院まで行かなくても良く、待ち時間が短く体への負担が少ない、医師や薬剤師との距離感が近く相談しやすいと安心だ。一方、改善点として、集会所は遠いので自宅の近くに来て欲しい、巡回の回数を増やして欲しい、診療科を増やして欲しいなどが挙げられました。医療スタッフの薬剤師の声として、病院より近い距離

で患者さんと接することができる、看護師としては、病院内では見ることができない患者さんの背景を知ることができるので、より良いアドバイスをできる、検査技師は、検査結果を早く医師に連絡でき、正確な診断に役立ちやりがいを感じるなどが挙げられました。大変な点としては、薬剤師は持参できる種類は限られており、持参薬の選択が難しく、必要な薬が出せないことがある、次回の診療まで時間が空くので、治療経過を見ることができない、検査に時間がかかるため連続して患者さんが来た時には時間がかかってしまう、その他、ネットや電話が使えない時、その場で点数が調べられず非常に困る、などがあつた。医療スタッフ間の連携が緻密で患者の要望への対応も早いなど、地域の特性、住民のニーズにあつた医療スタッフの尽力で提供されてきました。さらに体験実習生のコメントは、医療スタッフ全員誇りを持って楽しそうに仕事をしている様子を見ることができとても貴重な体験であつたとのことでした。

地域医療の現場での実習は、チーム医療の重要性を学ぶ意味でも重要な体験になると思われるので、医学部生だけでなく、医療関係の学生全員が地域医療実習を行うことが望ましいと思います。医療従事者を目指す学生さんへの一言として、病院外の医療にも目を向けて欲しい、新しい情報を得る努力、その情報から多くの情報を読み取

り、自身の行動につなげてほしいとのことでした。

今回、広島県庄原地区でのへき地医療についてのチーム医療を標榜する本学の活動を紹介しました。今後、このようなへき地の方々に薬剤師として何が出来するかを考えて活動を発展させていくことが重要であると思われます。機会があれば、学生チャレンジプロジェクトの一環として、「瀬戸内海診療巡回船で行く、へき地医療の現状を学ぼう」を紹介したいと思っています。

今年度は、広島にて静薬学友会中国支部総会を開催予定ではありましたが、諸事情を鑑みて開催を中止したいと思っています。

次回の支部総会では、皆様お誘い合わせの上、ご出席下さいますようお願いいたします。学友会活動へのより一層のご理解とご支援の程、お願い申し上げます。

四国地区同窓会

地区同窓会代表 井上 泰秀
(昭和59年卒)

平成29年11月29日にグランドパレス徳島にて、2年ぶりの静薬学友会四国支部大会を開催致しました。本部から参加して頂きました関本征史理事を含め総勢16名の大会となりました。下記

に内容をご報告させて頂きます。

①支部総会

関本理事のご挨拶の後、木戸智史会計幹事(H16卒)より、会計報告をして頂きました。

②講演会

徳島大学教授 滝口祥令先生(S54卒)により、「表題：Total Drug Monitoring…もうひとつのTDM」のご講演を頂きました。臨床応用にも即したアカデミックな内容でしたが、大変分かりやすくご講演して頂きました。学生時代に戻った気分です。聴し、質疑応答も活発に行なわれました。

③懇親会

全体の記念撮影の後、牛川務顧問(S48卒)の乾杯で、懇親会が始まりました。途中、恒例となりました小野郁夫高知県副支部長(S29卒)のバイオリン演奏に引き続き、野田弘子さん(S41卒)の長唄三味線、井上千佳恵(S63卒)と井上の協奏(シンセサイザーとアルトサックス)で懇親会は盛り上がりしました。最後に、中村芳正顧問(S46卒)の一本締めにて納会となりました。今回、平成12年卒以降の方も4名参加していただき、若返りした会となりました。四国支部大会としては今回で最後の大会となりますが、今後も四国地区同窓会として引き続き、和気藹々の楽しい同窓会を開催して参りたいと思います。



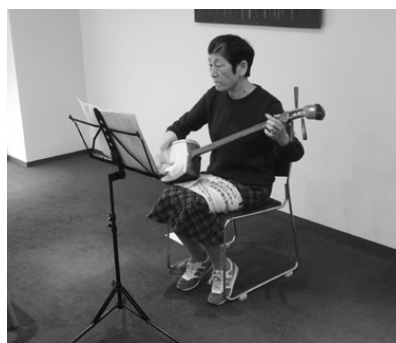
関本征史理事のご挨拶



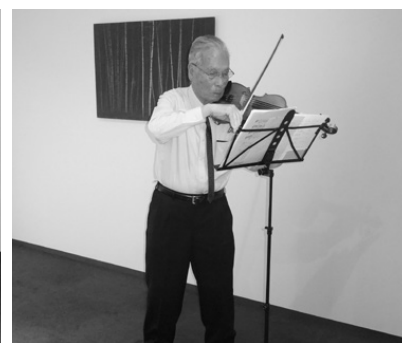
四国地区同窓会 H29.11.29 於グランドパレス徳島



滝口祥令先生(S54卒)のご講演



野田弘子さん(S41卒)の長唄三味線



小野郁夫高知県副支部長(S29卒)のバイオリン演奏

会員だより

静薬34回同級会の報告

安藤圭子
(昭和34年卒)

平成29年10月27日、JR静岡駅の隣の「ホテルアソシア静岡」にて担当幹事の静岡県東部の長倉久美子、清水武、酒井光江さんにお世話になりました。わずかの一年間に、元微生物学教室教授の森田全さん、元気印のあの体格の彼が亡くなったのに唖然とした。静岡に生まれ、自ら頑張っていた彼、事ある毎に同級生は随分お世話になった。

次に、堀田保幸さんは、会社経営の傍ら、母校で実社会での貴重な体験を後輩に指導されるなど幅広い活躍をされた。あの独特のソプラノ？は忘れられません。

秋には富沢裕さんが亡くなりました。定年退職後、博物館で勾玉などの歴史教室をボランティアでされていました。同級会の恒例で17時から21時頃とおしゃべりが続いた。翌日は、景山静夫さんを見舞う者や、美術館等を訪ねたり各々楽しんだ。

次回からは、丁寧な招待状がなくても年一回発行の静薬学友会報に極力同級会の記事は載せてもらおうという意見も出ました。何卒宜しくお願いします。

次の同級会のお知らせ

日時 平成30年11月25日(日)・26日(月)
一泊二日
集合 午後4時
場所 「ホテルクラウンパレス浜松」
JR浜松駅より徒歩3分
電話 0120-1111-982
会費 17,000円
(日帰り宴会のみ・13,000円)
幹事 山添節子
TEL(053) 473-6525
安藤圭子
TEL(053) 473-2144

今回の同級会の参加者(集合写真参照)

山本昭野 伏見喜代子 吉田薫子

松下倭文夫 安藤圭子 大嶽英子

清水 武 稲岡万里 逸見絹代

藤田昌彦 柴田幸子 遠藤瑞子

池田啓子 伊藤玲子 清水 武

長倉久美子 山添節子

(参加者18名)



薬大3回生(昭和34年卒)同期会 H29.11.27 於ホテルアソシア静岡

昭和37年卒同期会

河 村 信 弘

(昭和37年卒)

開催日…2018年5月25―26日
場 所…クラウンパレスホテル浜松
参加者…

大久保好子、大塚勝久、河村信弘、
亀井 興、川合頼子、工藤弘子、
桑原伊玖子、小西一宏、近藤静男、
境澤貞夫、佐藤朝子、斎藤裕久、
笹田庸子、田中恒夫、豊田 満、
野口弥生、平良武男、松岡千恵子、
松下玲子、山本俊子、吉岡はま
以上21名

前回の同期会(2016年7月17―18日)から笹田さん、佐藤さん、吉岡さんの3名が今後幹事をして下さることになり、今回は笹田さんの地元浜松で開催することになりました。会の前にはやむを得ず欠席の連絡があった方が数名おられ、最終的には21名の参加となりました。

○5月25日…懇親会

懇親会とは同ホテルの中華料理店・鳳凰で行われました。幹事挨拶のあと、すでに亡くなられた方々のご冥福を祈り黙祷。しばらく歓談の後、参加者全員による近況スピーチがあり、卒業すでに56年が経ち、現在の生活状況、趣味、ご自身の身体のことなどなど積もる話題に一同聞き入りました。次いで

別室での二次会では、懇親会で話し足りなかったことなど皆打ち解けて話し合い、時の経つのも忘れるほどでした。
○5月26日…バスツアー及び次回の予定

10時にホテルを観光バスで出発。先ず女城主直虎ゆかりの龍潭寺、井伊谷宮へ向かう。

龍潭寺の庭園は小堀遠州作といわれ、大小の石が表現する禅寺の庭で、丁度満開のサツキと池のスイレンなどとマッチして素晴らしい景観を生み出し、一同感嘆の声を上げました。

更に近くの井伊谷宮も拝したあと、農家レストランとんきいにて昼食をとりました。地元の野菜をふんだんに使った和風形式のバイキング料理について食べ過ぎるほどでした。

次いで浜松名物の「うなぎパイ」のファクトリーを見学。完全にオートメ化したパイの製造から包装に至るまでの流れに一同感心。ここではパイ以外の土産物もあり、めいめい買い求めました。さて、バスガイドのユーモアあふれる話術に皆引き込まれ、かくして楽しいツアーも終わりました。

最後に幹事より次回同期会の提案が出されました。時期は1年半先の2019年11月29―30日で、場所はやはり幹事地元の浜松開催が提案され、了承されました。

今回参加されなかった方も次回は参加下されば幸いです。

「青春の友との絆風薫る 信弘」



薬大6回生(昭和37年卒)同期会 H30.5.25-26 於クラウンパレスホテル浜松

静岡薬科大学8回生同期会

名倉 猛 夫

(昭和39年卒)

平成29年10月17日、同期会を京都駅すぐ近くの「ホテルセントノーム京都」で開催しました。私たちは昭和39年卒ということで会の名前をサンキュー会と名付け、静岡地区、関東地区、中部地区、関西地区の持ち回り制で、2年に1回開催しています。今回は関西地区が担当で、京都で開催することになりました。幹事は、宝塚市の柿谷さん、神戸市の左納さん、大阪市の中村さん、それに長岡京市の筆者でした。

当日、西は福岡から、東は浦和からと総勢20人の出席があり、53年振りや10年振りに出席の人もいましたが、学生時代の姿が直ぐ蘇り、全員が昔に帰った気持ちになりました。私たちは卒業後53年で、喜寿を迎えた、あるいはこれから迎えるという年代です。

会の初めに当たり、逝去された同期の人たちのご冥福をお祈りしました。次いで総幹事長・鈴木次郎氏の乾杯の

後、出席者全員による近況報告に移りました。大学教授、会社社長、医療の電話相談、介護の仕事、薬局経営、キリスト教聖書の解説等、社会貢献をしている人、菜園やスポーツに励み老化防止、健康維持に努めている人、病院通いをしている人、変わったところではオレオレ詐欺に引っかかりそうになったが、犯人逮捕へ繋がった話等々があり、皆さんの一生懸命な生き様を楽しく、面白く生き生きと話されるのをお聞きするうち、予定されていた3時間があつと言う間に賑やかに過ぎてしまいました。

二次会にも全員が参加し、終わったころには外が暗くなり始めていました。次回静岡での再会を楽しみに散会しましたが、京都に残って観光をする人、国立博物館の国宝展を見に行く人もいました。



薬大8回生（昭和39年卒）同期会 H29.10.17 於ホテルセントノーム京都

昭和38年入学同期会

若宮 忠 弘

(昭和42年卒)

今回の同期会は、卒業後丁度50年になるのを記念して同級生全員が共に過した思い出の地静岡で行いました。

幹事が関西在住のため、地元の鷺巣昭弘さんに全面的に協力して頂きました。

参加人数は目標の50人には届かなかったものの福岡▼鳥取・長野等の遠方を含め15都府県から40人が集いました。また、初参加の方も数人いました。

定刻17時に始まった会の司会進行係は幹事の船山和彦さんです。

第一部は記念講演です。演者は静薬学友会賞第一回受賞者、聖隷福祉事業団理事長 山本敏博さん。「実践躬行（体育会系薬剤師から医療福祉経営者へ）」と題して、自らの歩みを振り返り、実践躬行の重要性を強調する内容でした。学生時代そのままに明るく、はつらつとしたスピーチに出席者一同たいへん元気をもらいました。

第二部の宴会は、前回幹事 前田国昭さん発声の乾杯で始まり、たちまち50云年前の思い出話やその後の50年の話、孫の話、健康の話などで、わいわいがやがやと賑やかになりました。

佳境に入ったところで全員の近況報告です。どの人の話にも皆耳をそばだてて聞いていました。その間、カメラ担当の長谷川進彦さんは飲まず食わずでシャッターを押し続けていました。

こうして昔の仲間と共有した3時間は瞬く間に過ぎてしまいました。

同期会終了後は2次会カラオケ、3次会ワインバー、4次会？と続き、夜が更けるまで歳も忘れて静岡の街で頑張りました。

翌日は希望者15人で静岡県立大学薬学部見学です。

大学の正面スロープまで生化学教室の3名の先生方が出迎えて下さり、記念写真の撮影に始まり、講義室・実習室を懇切丁寧に案内して頂きました。薬剤師教育や国家試験のお話では、ハードルの高さに驚き、「50年前は楽だったなあ」と。また生化学研究室の見学では、最前線の研究にただただ感嘆するばかりでした。

この日の昼食は学生食堂で頂きました。小鹿のバラック小屋学生ホールとは雲泥の差で、50年の歳月を感じました。また、客員教授をされている黒柳・糠谷両先輩にお会いするというハプニングもありました。

生化学教室の先生方の心のこもったおもてなしに感動し、全員が大満足した県大薬学部見学でした。

次回の同期会は平成の次の年号元年に開催予定です。その年には全員が後期高齢者になります。

同期会

日時・平成29年11月14日

場所・葵タワー24階

グランディエールブクトーカイ

(静岡)



薬大11回生（昭和42年卒）同期会 H29.11.14 於グランディエールブクトーカイ（静岡）

静薬湯けむり同期会ツアー・

松島大会（昭和49年度入学）

木 下 俊 也

（昭和53年卒）

昭和49年度に入学した同期による『静薬湯けむり同期会ツアー』を2017年10月8～9日、宮城県松島で行いました。今回の参加者は40名で幹事は佐々木敏郎さんでした。松島センチュリーホテル午後5時集合のため、午後

一番出航の松島湾一周遊覧船に乗船したところ、何と参加者の半数以上が奇遇にも乗船していました。そのため、船上で一足早く盛り上がり、ガイドさんによる松島湾観光アナウンスを聞き逃しました。下船後は、各自で瑞巖寺、円通院、天麟院、五大堂、福浦橋に行き、最終的にホテルに集合しました。

宴会は午後6時ぴったりに始まり、8時ぴったりに終わりました。その後、宴会用の部屋をキープしていたのでそこで日が変わるまで、高齢となった親の話、老後の話、孫の話、趣味の話など話は尽きませんでした。今回最も遠方の方は鹿児島からきた前田さん。次の遠方者は小豆島の森さんでした。

翌日、東日本大震災の被災地閑上地区の見学を中心としたバスツアーを企

画しました。閑上・日和山での語り部ガイド佐竹さんのお話（54人の園児を無事避難させたこと）に皆感動しました。日頃から防災訓練を行っています。仙が、その重要性を再認識しました。仙台駅で解散でしたが、40名のうち10名は、作並温泉の鷹泉閣岩松旅館に宿泊しました。作並温泉では、天然岩風呂や山寺参拝で「閑けさや岩に染み入る蟬の声」を感じてきました。

昭和49年度入学生は仲が良く、還暦を迎える3年前から『静薬湯けむり同期会ツアー』と称して、『京都嵐山』、『下呂温泉』、『焼津・松風閣』を巡りました。2018年度も既に『小豆島』が10月7日～8日に決定しています。同期の皆様、予定に入れておいて下さい。

今回の参加者は、青木、安達、荒木、池上、伊藤、内田、宇野、大田、岡本、荻野、葛上、勝岡、瓦谷、木下、木下、桑名、佐々木、篠原、曾布川、竹本、辻本、鶴見、寺田、道鬼、成瀬、丹羽、萩原、東山、久嶋、藤井、堀江、前田、松橋、三谷、森、山本啓、山本昌、吉澤、吉田、利光（敬称略）の以上40名でした。



昭和49年度入学同期会 H29.10.8-9 於松島センチュリーホテル

2017年度小菅教室同門会の クリスマスパーティー報告と 2018年度のお誘い

木下 俊也
(昭和53年卒)

昨年末、恒例となっております小菅教室同門会のクリスマスパーティーをホテルセンチュリー静岡のプラタナスで行いました。このパーティーは静岡薬科大学小菅教室時代から伝統として引き継がれてきたもので、毎年12月第一土曜日に開催されます。今回の参加者は約50名でした。静岡薬科大学薬剤製造学教室、漢方薬研究所、静岡県立大学薬品資源学教室の卒業生とその関係者が集い、1年を締めくくるイベントとなりました。

パーティーは辻邦郎先生のご発声で始まり、最後は全田浩先生から受け継いだ『万歳三唱』で塚本さんが締めくくりました。あちらのテーブル、こちらのテーブル、どこのテーブルでもうるさいぐらい会話がはずみ、大変盛り上がりしました。二次会にも30名以上が参加し、11時過ぎまで昔話に花が咲い

ていました。

今年も12月1日(土) 午後6時からホテルセンチュリー静岡のプラタナスで『小菅教室同門会のクリスマスパーティー』を開催いたします。卒業生の皆様または関係者の皆様、是非、手帳にメモし、ご参加下さい。懐かしい人々と楽しいひと時を過ごしませんか？常に100名以上で盛り上がるパーティーを目指したいと思っております。なお、当日の記念写真を添付いたします。

前回欠席で今年参加希望の方は、木下までご連絡下さい。

木下…携帯電話 090・3830・2754



小菅教室同門会 H29.12.2 於ホテルセンチュリー静岡

植物研究部OB会報告

桑 山 雅 枝

(昭和45年卒)

植物研究部OB会が六月九・十日、北八ヶ岳方面に於いて、二十七名の参加で開催されました。

心配された天気でしたが前夜の雷雨もあり、静岡組はマイクロバスにて九名で出発、昼はおぎのやの釜飯を食べ、茅野駅で電車組七名を乗せ、八ヶ岳中信国定公園の横谷峡トレッキングコースへ。

水量豊かな霧降の滝などを眺めながら、イワセントウソウ、ヤマキケマン、ウツギ、ヤマボウシ、モミジ、カエデ類の美しい新緑の中、二時間程マイナスイオンたっぷりの森林浴を楽しみ、今晚の宿、横谷温泉旅館へ、国内でも希少な鉄分を含んだ鉄泉に炭酸ガスが溶け込んだ珍しい二酸化炭素泉で疲れをとりました。

夕食後は恒例のスライド会、本日見た植物の復習、海岸性のソレナセンブリ、北陸地方のキバナサバノオなど珍しい花々、シマフクロウのつがい顔のをのぞかしている巣穴、魚を捕獲に翼を広げているシャッターチャンス、葉草つれづれ草の本を頂戴したり素晴らしい会になりました。

翌朝も雨に降られず、八千穂高原植物園へ、ハルナユキザサ、ベニバナイチヤクソウ、ベニサラサドウダン、イ

チョウラン、大喜びのカモメランなど多数の植物を見ることができました。その後、白駒池で集合写真を取り散策へ、コイワカガミ、ミツバオウレン、ガンコウランを見つけました。

出席者は奈良、大阪、愛知、東京、神奈川、埼玉、静岡と多方面に渡り、付き添いの方一名を除き六十九才から八十三才と高齢化が進み一人の怪我も病気もなく何よりでした。又コースも平坦で、多数の植物と出会い、コース推薦のBさんに大感謝です。

高齢化しているとはいえ植物への情熱はまだ衰えず、写真を取り名前を記載し、斎木先生、上野のご健在だった頃と変わらない様子です。又来年の開催を楽しみに弁当で昼食をとり、現地解散となりました。



カモメラン



植物研究部OB会 H30.6.9～10 白駒池にて

大学だより

退職に際して



退職に際して

前 医薬生命化学分野 教授 奥 直人



1991年に縁あって静岡県立大学に奉職し、27年間充実した日々を楽しく過ごすことができました。これもひとえに皆様のおかげと感謝しています。今までの人生を振り返ってみると、目の前に示された道をただ進んできたような気がします。大学で薬学を選択し、衛生分野で大学院まで進学し、ライフワークとなるリポソームDDSと出会い、留学先も進められて決めました。留学の直前に教授に挨拶に行ったとき

摂南大学薬学部の話が来て、これも情報ゼロのまま即決し、米国に留学中に行つて枚方がどこにあるのか知つたような気がします。摂南大では多くの人と出会い、充実した時間が過ごせました。関西での7年間の過ぎたところ、「静岡県立大学薬学部の衛生出身の教授が、助教授を探している」という連絡をもらい、静岡駅前ホテルで岡田昌二先生と面談しました。日を改め静岡県大を見に行くことになり、真新しいきれいな大学を見て良いなと思いましたが、放射薬品学教室では何を研究しているかも知れないまま、静岡県大への転職が決まってしまうしました。ただ、これまでの道のりを振り返ると、周りの人々が進めてくれた道が合っていたためか、すべての選択が最終的には良かったと思っています。

静岡県大に移るにあたり、岡田先生より「教える子である塚田秀夫さんより

トップとして浜松ホトニクス株にPETセンターが開設されるので、PETを使った研究をしてほしい」と言われました。そこでPETとは何かというところから勉強し、PETの主流が低分子プロローブの合成と知り、合成では勝負できないので、細胞を標識して細胞の動態解析をするという全く新しい観点からPET研究をはじめました。研究対象として転移性がん細胞の体内動態と転移組織との関連を選んだのもよかつたと思います。塚田さんにはPET研究を始めて以来、長年お世話になり心より感謝しています。静岡県大では、教室で行っていたジメチル砒素化合物や中波紫外線によるDNA傷害に関する研究を行う一方、DDS関連の研究についても継続することとなりました。当時から私が教授になった後のテーマまで含めると光線力学療法、腫瘍新生血管障害療法、マルチターゲティング、花粉症や自己免疫疾患治療のためのリバースターゲティング、脳梗塞治療、核酸医薬品開発、ポリマーナノ粒子など、大学院学生・学部生の熱心な研究と卓越したアイデアから多くの研究が生まれましたが、常にアクティブで明るい教室を作ってくれた学生たち、ならびに研究を支えてくれた教員、共同研究者等の方々に感謝しています。大学教員になって一番幸せだったことは、多くの学生たちと巡り会えたことかもしれません。

さて研究以外の活動を少し振り返ってみたいと思います。1つ目は矢内原昇先生に先導して頂き、広田貞雄先生らと始めた静岡DDSカンファランスです。DDSCを基に1996年には

広田先生を組織委員長として(The 5th Liposome Research Days (LRD))を静岡で開催することができました。2つ目は廣部雅昭元学長、木苗直秀元学長らの基で2002-2012年の10年間、先導的健康長寿学術研究推進拠点として21世紀COEプログラム及びグローバルCOEプログラムを展開できたことです。この間、研究の発展や大学院学生の海外研修などが可能となり、大学としても活気に満ちた充実感溢れる時代を経験できたと思っています。3つ目は学会主催に関するものです。2006年11月に第28回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム、2011年5月に第75回日本生化学会中部支部例会・シンポジウム、2016年6月に第32回日本DDS学会学術集会を行いました。一方で最も印象に刻まれた学会は、2011年3月に開催を予定していた万人規模の日本薬学会第131年会です。開催まで17日に迫った3月11日に発生した東日本大震災は未曾有の災害であり、学会を誌上開催としましたが、あまりにも大きな出来事でありました。参加予定の多くの方が懇親会費を寄付してくださり、日本赤十字を通して被災地に送付することができました。

さて稿を閉じるにあたり、もう一度お礼を述べさせていただきます。静岡県大での27年間は私にとってこの上なく充実した大切な時間でありました。卒業生、修了生の皆様、静岡県立大学の教職員、共同研究者や同じ研究分野の皆様、静薬学友会の皆様、静岡県薬剤師会の皆様、本当にありがとうございます。

退職に際して



第二の故郷、静岡を去るにあたり

前 創剤化学分野 教授 板井 茂



間の経験は、大学で学生にGMPやレギュレトリサイエンスを指導する面で私の強みになったと感じている。

2006年9月18日、現永井記念国際交流財団理事長の永井恒司教授より、一通の手紙が届き、それが私の人生を大きく変えた。内容は前任の園部尚教授が定年となるため、その後任として私を推薦したいということであった。私はこの申し出を受け、その結果、運よく教授選考会に合格し、静岡県立大学に勤めることになった。

私は1952年に静岡県三島市生まれ、横浜で育った。大して秀才でもなかった私は偶然にも東京大学に合格し、薬学部に進学した。大学卒業が近づいても進路を決めきれずにいた私に指導教授から大正製薬を勧められ、1975年に入社した。大正製薬では30年以上、新薬の製剤化研究に従事し、幸運なことに、いくつかの新薬の開発、製品化に従事することが出来た。2002年、研究所を離れ生産部門の管理職を拝命した。この工場での5年

静岡県立大学に赴任すると、東京大学の同窓生であった奥直人、野口博司の2名が教授として在籍していた。彼らは既に薬学部の中心的存在になっており、全く教育経験のない私を支援し、また、多くの疑問に答え、アドバイスを与えてくれた。一方、私が赴任した創剤科学分野（大学院は創剤工学

研究室）では宮城島惇夫准教授と佐塚泰之講師が研究指導に当たられていた。佐塚先生は翌年、岩手医科大学教授に栄転され、熊本大学より、岩尾康範助教（現准教授）を迎えた。以降、この3人での体制は宮城島先生が定年退職される2011年まで続いた。宮城島先生の専門は粉体工学で、企業において実施してきた研究に近く新剤形を開発するにあたり、良きパートナーとして活躍して頂いた。先生は、非常に温和な方で、口癖であった静岡弁の「だもんで」を聞くと、常に心が温まる気持ちになった。岩尾先生の専門は薬物動態学であったが、理解が早く、製剤学に関連したあらゆる分野の知識を吸収し、数々の研究成果を上げていき、多くの褒章を獲得した。特に2015年には助教として2018年には准教授として、本学教員の最高栄誉である学長賞を2度獲得した。宮城島先生の後任として野口修治准教授が東京大学薬学部より赴任した。野口先生は構造解析のスペシャリストで単結晶構造解析のみならず、固形製剤の製造中、あるいは溶出過程における微細内部構造の変化やナノ粒子の構造を放射光X線CTやX線小角散乱で解析する製剤学における画期的手法を確立した。この手法は当研究室の製剤設計の根拠を支

える理論的支柱になったのみならず、製剤学上の高い評価を受けた。野口先生は2016年、東邦大学薬学部教授に栄転された。野口先生の後任として岩尾先生が准教授に昇格し、新たに木村晋一郎先生が企業より助教として赴任した。木村先生は私が赴任した時、当研究室に配属された学生で、企業での経験を今後の大学での研究・教育に活かしていかれることを期待している。

創剤工学研究室11年間の研究成果として原著論文を109報、著書／総説を31件発行し、学会発表や招待講演は総計300回を超えた。また、6件の特許を出願した。当研究室では多くの社会人や留学生を受け入れた。コース、論文博士を含め20名の社会人がPh.D.を取得した。シリア、バンングラデシュ、タイ、中国から計9名の留学生が来日し、当研究室で研鑽を積んだ。

これらの研究成果の支えとなったのが、本学の教員・職員の方々、各種財団、企業よりの奨学援助、企業、他大との共同研究であった。今、11年間の充実した大学生活をふりかえり、私に働きかけてくれたこれら全ての方々に感謝の気持ちを伝えたい。

新任教授

新しい景色を見る

医薬生命化学分野

教授

浅井 知浩

(平成9年卒)



2018年4月1日付けで薬学部
医薬生命化学分野の教授を拝命しまし
た浅井知浩と申します。どうぞよろし
くお願い致します。当分野は、
1961年に放射化学講座として開設
された研究室(1966年に放射薬品
学、2001年に医薬生命化学に名称
変更)であり、今年で58年目を迎えて
います。歴史ある研究室の教授として
の重責を担うことは、大変光栄である
と同時に身の引き締まる思いでありま
す。諸先輩方が築かれた礎を強固にし、

研究室がさらに発展するよう、誠心誠
意努力いたす所存です。さて私は、
1993年に静岡県立大学薬学部に入
学、1997年に静岡県立大学大学院
薬学研究科に進学、そして2002年
に博士(薬学)の学位を取得しました。
大学4年生のときに放射薬品学(現医
薬生命化学)教室の門を叩いて研究の
いろはを学び、博士後期課程修了まで
お世話になりました。大学院修了後は
製薬企業の研究職に就き、一度は大学
から離れたましたが、2004年から静
岡県立大学薬学部の教員として奉職し
てまいりました。この度、母校の出身
研究室の教授職に就くことになりました
たことは、私にとって大きな幸です。
最高学府である大学の使命は教育と研
究であるという根幹を大切に職責
を果たし、母校への恩返しとなる活躍

をしたいと思います。薬学関連の仕事
が人の命を救える誇りある仕事である
こと、また創薬研究が夢と挑戦しが
いのある楽しい仕事であることを学生に
伝え、第一線で活躍できる人財を輩出
したいと考えております。また私は、
本年5月に静薬学友会の理事を拝命し
ました。これからは静岡県立大学薬学
部卒の教授として、静薬学友会の活動
にも積極的に貢献してまいりたいと存
じます。同窓生の皆様方のご指導、ご
協力を賜りますよう宜しくお願い申し
上げます。

私の専門は薬物送達学であり、特に
脂質ナノ粒子を基盤とする薬物送達シ
ステム(drug delivery system: DDS)
に関する研究に注力しています。
リポソームを代表とする脂質ナノ粒子
は、実用的な薬物キャリアであり、リ
ポソーム医薬品は世界で18品目が上市
されています。当研究室では、「薬物
送達学の力でくすりを創る」ことを最
終目標に掲げ、がん、脳梗塞、炎症性
腸疾患などの疾患をターゲットに研究
を展開しています。治療法がない病氣
を治すために、あるいは痛みや副作用
を極力伴わずに病気を治すために、D
DSが果たせる役割は非常に大きいと

考えています。また近年では、DDS
が実用化の鍵を握る次世代医薬品とし
て、RNA干渉薬やゲノム編集薬が注
目されています。こうした次世代のく
すりを生むためにも、DDSの基礎研
究は真に必要とされています。そこで
当研究室では、産官学連携と異分野連
携を積極的に推進し、ナノテクノロ
ジーを基盤とした独創的なDDS研究
に取り組んでいます。静岡県立大学発
のDDS技術を世界へ展開し、医療に
貢献することを目指しています。当研
究室には、卒業研究・大学院研究に学
生自らが能動的に取り組む伝統が根付
いており、この良き伝統を未来に継
承・発展させることで、組織としてさ
らなる成長を遂げることができると信
じています。「どうせなら楽しく」困
難な物事に挑戦し、また新しい景色を
見たいと思います。

末筆になりますが、前任教授であり
恩師でもある奥直人先生をはじめ、こ
れまでご指導いただきました先生方、
共に研究に励んできた教室員の皆様に
心より感謝いたします。

新任教授

静岡県立大学で自己実現と社会貢献を目指して

創剤科学分野 教授 近藤 啓



平成30年4月より創剤科学分野を担当することになりました。静薬学友会の皆様にはこの場を借りてご挨拶申し上げます。

静岡に住み始めて25年が経過し（この間、約2年はニューヨークに駐在しました）、この4月から初めて電車通勤を始めました。藤枝駅より約30分、電車に揺られ、草薙駅で下車した後は、大学までのおよそ1kmの上り坂を歩いています。「1kmくらい大した距離ではないし、運動不足解消に丁度いい」

と書いていましたが、歩き始めた4月は想像以上にハードでした。上り坂の途中、建物の間から見える富士山は美しく、わずか1kmの上りで弱音を吐いている私を叱咤激励してくれているように思えました。本稿を執筆している現在は7月であり、歩きは慣れましたが、今年は猛暑で大学に到着するとしばらく汗が引きません。これも静岡県立大学で感じることのできる四季の一曲マダと思っています。

私と静岡県立大学との接点の始まりは30年以上前に遡ります。当時、高校三年で受験生だった私は漠然とエンジニアになろうと思い、工学部を目指していました。ところが、受験に惨敗し、浪人生活を余儀なくされました。親友の一人が当時の静岡薬科大学に合格・進学し、そこで初めて、薬学部とともに静岡薬

科大学を意識しました。一年後、私は名古屋市立大学薬学部に進学し、エンジニアではなく薬学の道を志すことになりました。大学では生物薬剤学に興味をもち、高分子化合物の体内動態研究に没頭しました。博士前期課程を修了した私は、博士後期課程へ進学するか悩みましたが、最終的に就職を選択し、アステラス製薬（旧山之内製薬）焼津事業場の製剤研究所で企業研究を開始しました。製剤研究所には静岡県立大学を卒業された先輩、同僚が数多く在籍しており、沢山のご指導を賜り、また、プロジェクトと一緒に遂行しました。アステラス製薬在籍中の最初の十年は主に経口剤の開発研究を、残りの十五年はDDS研究を、と一貫して製剤の研究開発業務に従事してきました。2015年からは九州大学大学院薬学研究院薬物送達システム学分野の客員教授として学生に製剤・DDSの魅力伝えていきます。製剤は患者さんが服薬する医薬品そのものであるため、製剤学はユーザーに最も近い学問であり、実学の色が強いです。最近では創薬のアプローチも多様化し、低分子化合物のみならず、中分子化合物、抗体、

核酸・遺伝子、細胞といった新しいモダリティの研究が進められています。患者さんがこれらのモダリティを医薬品として服薬可能になるためには製剤・DDS技術の基礎的な研究の進展が必須と痛感していました。企業では実行し難い基礎研究を進めるにはどうしたらよいか悩んでいたところに、静岡県立大学との縁を賜りました。さらには高校生の時に目指していた工学の名前が付いた創剤工学講座を担当するのも何かの縁だと思っています。

前職を離れる際、上司から教授就任の祝福とともに、以下の言葉をいただきました。「自己実現と社会貢献の両者を達成してほしい。静岡県立大学はそれができる環境を備えています。」患者さんに届くモノづくりを念頭に置いた基礎研究を展開したいという自己実現と将来のある学生を育成し、世の中に輩出する社会貢献を達成できる機会を戴きました。全力を尽くして取り組みます。静薬学友会の皆様にはご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新任のご挨拶

医薬品情報解析学分野

助教

古島 大資



はじめまして。平成30年4月1日付で医薬品情報解析学分野に助教として着任しました、古島大資と申します。静学友会の諸先生方にはこの場を借りてご挨拶申し上げます。

着任してまだ日が浅いですが、歴史と伝統のある静岡県立大学薬学部で研究・教育に携われることをうれしく感じるとともに、よりいっそう精進しなければならぬと強く感じております。簡単ですが自己紹介させていただきます。

私は高校まで熊本県熊本市で育ち、その後、広島大学医学部保健学科を経て大阪大学大学院医学系研究科に進学しました。修了後は、埼玉県保健医療部で感染症対策行政、東京女子医科大学で大規模疫学研究、大阪大学医学部附属病院で臨床試験や医師主導治験の

データマネジメント等に携わってきました。大学院では、感染症の流行予測と蔓延防止策の検討や薬局・病院の業務最適化戦略の提案にシミュレーション分析手法でアプローチする研究やがん登録等の医療データを統計的に分析する研究等も行ってきました。現在の所属では、医薬品や健康食品等の有効性・安全性の評価に関する研究や医療マネジメントへのシミュレーション分析の応用に関する研究を行っています。

私は、大学教員としてまだまだ未熟者ですが、教育活動を通じて学生の皆さんに、広い視野を持ち、自分の限界に挑戦し更なる高みを目指していく姿勢を身に着けてほしいと考えています。そのために、私自身も教員として自身の行動や発言には責任をもち学生から信頼されるよう努めていかないとけないと感じています。

慣れないことが多く至らない点もあるかと思いますが、静岡県立大学薬学部、静薬学友会の益々の発展に貢献できるよう努力してまいります。静学友会の諸先生方に置かれましては、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

薬学部教員の人事異動

退職

医薬生命化学	教授	奥 直人	平成30年3月
創 剤 科 学	教 授	板 井 茂	平成30年3月
創薬探索センター	助 教	村 岡 大輔	平成30年3月
薬 理 学	准教授	齊 藤 真也	平成30年8月

着 任

医薬生命化学	教 授	浅 井 知浩	平成30年4月
創 剤 科 学	教 授	近 藤 啓	平成30年4月
生 薬 学	講 師	佐 藤 道大	平成29年11月
医薬品情報解析学	助 教	古 島 大資	平成30年4月

研究室だより

生化学分野

生化学分野では、鈴木隆教授を中心として、核酸やタンパク質と並ぶ第三の生命鎖である糖鎖の機能解明と創薬への応用を目指し、ウイルス・神経・がんをキーワードに、高橋忠伸准教授、南彰講師、紅林佑希助教がそれぞれ研究室を担当し、研究を進めております。また、広島国際大学の池田潔教授（昭和54年静岡薬大卒）をはじめ他分野の先生方との共同研究により、糖鎖利用技術の開発にも取り組んでおります。鈴木隆教授におかれましては、平成29年4月より本学大学院の薬学研究院長に就任をしております。

現在、当分野は大学院生4名、学部生15名が所属しています。本年度9月には加藤大介さんが博士課程を修了し、博士号を授与されました。学生は精力的に研究に取り組み、学会発表では数多くの賞を受賞しています。ここ1年間の受賞は、老化促進モデルマウス（SAM）学会学術大会若手研究奨励賞（横山喬太さん）、日本薬学会東海支部総会・大会学生優秀発表賞（狩野孝裕さん、三上靖代さん、安部友涼さん）、日本薬学会年会優秀発表賞（大谷渚紗さん）、日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会ベストプレゼンテーション賞

（大谷渚紗さん）、糖鎖科学中部拠点奨励賞（大嶽瞳さん）です。また、その他、最近の研究内容や研究成果、トピックスについては、当研究室のホームページ（<http://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/~biochem/>）で閲覧頂くことができます。

本年度は、生化学教室65周年記念祝賀会を11月10日（土）に静岡市の中島屋グランドホテルにて開催いたします。多くの皆様の御参加をお待ちしておりますので、皆様お誘いあわせのうえ、ぜひ足をお運びください。参加の御連絡はメールでも受け付けております（biochem65@u-shizuoka-ken.ac.jp）。教室員一同、卒後生の皆さまに会えることを楽しみにしております。



平成29年度集合写真

衛生分子毒性学分野

現在、衛生分子毒性学分野には4名の教員（吉成教授、佐々木講師、保坂助教、志津助教）が在籍しており、吉成教授の赴任（2014年4月）から5年目の節目を迎えようとしています。

衛生薬学の領域は、食品衛生学、公衆衛生学、毒性学など、幅広い研究領域を含みますが、「化学物質から人を衛る」をメインテーマとして研究を進めています。化学物質は、私達の健康で豊かな生活に欠かすことができない一方で、時として人の命に係わる重大な健康被害をもたらすことがあります。そのため、動物実験等により安全性が確認されていますが、近年では製品開発の効率化や動物愛護の観点から、動物実験代替法の開発が強く求められています。現在私達は、このような社会的要求に応えるべく、経済産業省プロジェクトの一環として、毒性関連ビッグデータをを用いた人工知能による次世代型安全性予測手法の開発を進めています。また、この研究に加えて、化学物質の生体応答を制御する核内受容体に着目し、化学物質の解毒・毒性発現機序や感受性要因に関して、分子、細胞、個体レベルでの研究にも取り組んでいます。

まだ船出をして間もない研究室ではありますが、学生達の日々の努力と衛生薬学分野を支えてこられた諸先輩方のご指導により、国際学会における



2018年4月 薬学部正面玄関にて

travel grantの獲得（6年生、2016年）やYoung Scientist Awardの受賞（大学院生、2018年）、そして吉成教授の日本毒性学会日化協LRI賞（2017年）及び日本薬学会学術振興賞（2018年）の受賞と少しずつ成果が出るようになってきました。現在私達が進めている研究領域は、学問的な意義だけでなく、臨床現場や保健・医療行政への還元が重要な領域です。当研究室での経験を活かして、病院・薬局、医薬品・食品・化学関連企業、保健行政など広範な分野で化学物質のエキスパートとして活躍できる薬剤師及び薬学研究者を育成していきたいと考えています。

薬理学分野

OB会・齊藤真也先生最終講義と送別会

【平成29年度秋のOB会】平成29年10月14日 さかなや道場草薙駅前店

参加者…教職員、学生 18名、卒業後10年程度のOB/OG 7名

【平成30年度春のOB会】平成30年6月30日 anding 梅丸 静岡駅南口

参加者…教職員、学生 23名、卒業後5年程度のOB/OG 19名

【齊藤先生送別会】平成30年8月4日 静岡県立大学 はばたき棟地下1階食堂

参加者…教職員、学生 66名、卒業後10年程度のOB/OG 22名

薬理学教室では毎年春と秋に卒業生に声をかけ、在校生、教職員との交流会を開催しております。こうした会は、先輩の生の声を聴けることもあり、在校生にとって大変有意義な機会となっています。今年度は、准教授の齊藤真也先生が岡山理科大学獣医学部へ教授としてご栄転されることになり、夏に最終講義と送別会を開催いたしました。過去10年間の卒業生から多数ご参加いただき、おおいに語り合い、盛り上がりしました。齊藤真也先生の新天地でのご活躍をお祈り申し上げます。

次回イベント告知

【平成30年度秋のOB会】平成30年度10月中旬 静岡駅周辺

たくさん卒業生のご参加をお待ちしております。

研究活動

薬理学教室には、現在、3つの研究の柱があります。一つは、教室の現在の主流である糖尿病の薬理に関する研究で、インスリン分泌や膵β細胞量の調節に関わるシグナル伝達研究を行っています。二つめは、以前より継続している循環薬理関連で、皮膚循環の病態生理を中心とした研究を展開しています。そして三つめは、肝臓の類洞に存在し肝線維化の原因となる肝星細胞に関する研究です。

研究を行う上で最も大切なことは、研究の背景を理解し、その研究の目標や目的を明確に定めることです。そして、実験終了時には、その研究成果を英語論文として発表することが大切です。研究体制は変わっても、今後もこうした研究のプロセスを学生が実践できるように、指導を続けていく所存です。



平成30年8月4日 齊藤真也先生送別会
(静岡県立大学下食)にて

医薬生命化学分野

医薬生命化学教室では、「薬物送達学の力でくすりを創る」ことを最終目標とし、がん、脳梗塞、炎症性腸疾患などをターゲットに、ナノテクノロジーを基盤とした薬物送達システム(DDS)の研究を行っています。教室員一同が、切磋琢磨しながら日々研究に励むとともに、研究の合間には、ソフトボールやバドミントンなどのスポーツ、教室旅行、バーベキュー、飲み会を行い、親交を深めています。最近の出来事としては、20018年3月に27年間研究室の発展にご尽力くださいました奥直人教授が定年退職されました。定年退職記念祝賀会は、卒業生、大学関係者など300人以上が参加され、盛大に行われました。奥教授は、4月より帝京大学にご栄転され、今後も薬学教育にご尽力されます。そして、医薬生命化学教室は浅井知浩准教授が教授に昇任され、新しいスタートを切りました。浅井教授は医薬生命化学教室の卒業生であり、医薬生命化学の伝統は今後も引き継がれていきます。また、4月は木村純子先生が本学の薬学研究院附属薬食研究推進センターに特任助教としてご栄転されました。2018年3月に開催された日本薬学会第2018年会では、片桐百恵さんが学生優秀発表賞を受賞、同じく3月に岡本彩香さんが学長賞を受賞、5月に平井勇祐君が日本薬剤学会第33年会

にて七つ星薬師奨励賞を受賞、7月に佐伯椋子さんが日本核酸医薬学会第4回年会にて優秀発表者賞(川原賞)を受賞しました。さらに、小出裕之助教が第34回日本DDS学会学術集会にて第10回日本DDS学会奨励賞(基礎)を受賞しました。同賞は、DDSの基礎研究において顕著な貢献・成果をあげた若手研究者に授与される賞です。最近の研究成果ならびに教室の活動状況はホームページに掲載しておりますので是非ご覧下さい。

(<http://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/~radiobio/>)



2018年7月24日 医薬生命化学教室集合写真

身体運動科学分野

本学にて任じ身体運動科学分野を担当して4年目を迎えました。担当科目では、私の専門分野である健康管理学や健康運動心理学の観点を活かした授業を行っています。また研究室としては、健康維持・増進を図り、社会環境と良好な関係を構築する上で必要な知識・スキルの習得や、運動実践による心理的効果などに関する調査研究及び教育を行っています。

私は、本学全体での身体運動科学の通年165本の授業運営に加え、体育関連の用具・施設の管理、非常勤講師のコーディネート、体育会部活動活性化のための支援活動なども一手に担当しております。日々の授業では運動技術の習得のみならず、体育を一つのツールとして、学生が自信やライフスキルを身に付けられるような実践を行っています。大学における体育授業は、身体を動かしたりすることを習慣化させる最後の機会となります。授業の内容や進め方を工夫することで、体力向上・技術習得はもちろん、ライフスキルの獲得やメンタルヘルス改善の効果も期待できます。特に1年次には「仲間づくり」の手段にもなり、大学生活への適応や良好な人間関係の構築のための有効なツールにもなり得ます。

昨年度は、薬学部FD研修会で講演をさせていただきました。また夏のライフスポーツでは、アーチェリーや

トランポリンなど新しいスポーツに挑戦しております。このような新しい取り組みを通じて本学の学生・先生方に身体運動科学の考え方を広げられたと感じています。

今後も独自の授業実践を通じて上記のような教育効果を効率よく得られるよう授業の改善に努めるとともに、自身のテニス経験を活かした部の顧問として、学生と共にスポーツを通じた本学のブランドマネジメントに貢献できれば幸いです。今後ともご支援とご指導を賜りますようお願いいたします。



平成30年7月 身体運動科学 前期（テニス）窪田クラス受講生

生体機能分子分析学分野

当分野は昨年に引き続き、教員は轟木・水野および、特任教授として豊岡先生にサポートしていただきながら、多くの学生とともに毎日精力的に研究を行っています。

当研究室の主な研究テーマとしては、次世代バイオ医薬品の新規分析法の開発、光学活性標識試薬の開発とキララメタボロミクスへの応用、単一細胞メタボロミクスへの応用の超微量成分の高感度・高精度分析法の開発を行っています。また、各種疾患の早期発見や再発予防や薬効評価を目的として、ポイントオブ検査法の開発や、唾液等を試料とした無侵襲検査法の開発等も精力的に進めています。

これらの研究を支えてくれている学生諸君は、日々切磋琢磨しながら高いモチベーションで研究を行ってくれています。その成果は、昨年度の本学学士の成績優秀者表彰、学会での優秀発表賞受賞8件など、学生個人としても高く評価されました。勿論、研究以外にも手は抜いておらず、学内バドミントン大会、フットサル大会、そしてソフトボール大会でも毎年順調に勝ち進んでおります。

昨年度の修了・卒業生は、沼津市立病院、日本新薬、科研製薬、生化学工業、マルホ、高砂香料工業に就職し、各々の道で活躍しています。詳しい研究内容、研究室行事、学生の活躍等は

研究室HPで多くの写真とともにご覧いただけます。

最後になりますが、静薬学友会の皆様には変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



2018年5月 研究室BBQ 安倍川河川敷にて

科学英語分野

准教授 ホーク フィリップ (Philip Hawke)

As both the world of science and Japanese society are becoming more and more internationalized, English is increasingly needed both by Japanese pharmaceutical scientists to communicate their research to foreign colleagues, and by Japanese pharmacists to speak to foreign patients and customers. These trends were recognized by the University of Shizuoka in 2007 when it established the Scientific English Program to train science graduate students as part of the Global COE Program. The Program was integrated into the School of Pharmaceutical Sciences as the 科学英語分野 in 2012, when it began providing courses to undergraduate students as well. The Program is taught by me, Philip Hawke, a Canadian who has taught at the University of Shizuoka since 1998.

The Program teaches graduate students the practical English skills that they need to successfully communicate about their research. It offers courses in **Academic Presentations, Academic Writing, Scientific Manuscript Editing, Oral Communication, Small Group Discussion, and Independent Listening**. After taking the Program's courses, many students have presented their work at international conferences and published it in international journals, and some have worked abroad as post-doctoral fellows or now work for international drug companies.

The Program teaches undergraduate students more basic English skills related to science. The **Pharmaceutical Science English** course introduces third-year students to the English that they will need after entering laboratories in their fourth year, such reading scientific journal articles. Students also develop practical English for communicating with foreign patients and customers in hospitals and drug stores. In the English section of the **Scientific Practice I** course, first-year students have debates on scientific topics. In 2017, a new course called **Research Presentations in English** was introduced. The course gives 5th- and 6th-year students the opportunity to practice presenting their graduation research projects in English.

In recent years, an increasing number of foreign graduate students have been enrolling in the School, motivating faculty members to improve their own English skills. To help them do so, the Program offers weekly English Lunches for Science Faculty Members at a variety of skill levels. The Scientific English Program aims to help both students and faculty members to develop the English skills that they need to succeed as scientific research and Japanese society become increasingly internationalized.



Discussing research in Small Group Discussion class.

科学の発展や日本社会の国際化に伴って、日本の薬学研究者や薬剤師が外国人の研究者、患者、来店客と英語でコミュニケーションをとる必要性が増えています。こうした傾向を背景に、静岡県立大学で2007年にグローバルCOEプログラムの一環として科学系大学院生のためのScientific English Programが設立され、授業が行われてきました。2012年からは、このプログラムが薬学部の「科学英語分野」として統合され、同時に学部生に対しても授業が行われるようになりました。1998年より「科学英語分野」は私、カナダ出身のホークフィリップが担当しております。

大学院生を対象としたプログラムでは、研究について円滑なコミュニケーションを図ることを目的として、大学院生を対象に英語の実用的なスキルを磨くための授業を行っています。このコースではアカデミックプレゼンテーション、アカデミックライティング、科学原稿、オーラルコミュニケーション、スモールグループディスカッション、また自主的に行うリスニングなどのコースを提供しています。プログラム受講後は多くの学生が、国際会議での発表、国際学術雑誌への論文掲載、またポストドクターの一員として海外の大学で研究を行ったり、国際的な製薬会社に勤務するなど、多彩な経験を積んでいます。

学部生を対象としたプログラムでは、科学に関連した基礎的な英語を学ぶことができます。Pharmaceutical Science Englishでは学部3年生に対して、4年生になり研究室に配属されたのちに必要となる、科学に関連した英文記事を読むためのスキルを身につけるコースを用意しています。さらに学生は、病院や薬局で外国人の患者とのコミュニケーションを図るための実用的な英語を身につけます。Scientific Practice Iコースでは1年生が科学のトピックについて英語で討論を行っています。2017年にはResearch Presentations in Englishという新しいコースが設置され、5年生、6年生が卒業研究発表を英語で行う練習を行っています。

近年、海外から多くの大学院生が入学するようになり、教職員の英語スキルについても向上させる必要があります。その一助として、週に一度さまざまな英語レベルの科学系教職員が参加できるイングリッシュランチの機会を提供しています。科学英語プログラムは、学生、教職員双方が研究を成功させるため、また今後ますます国際化が進む日本で必要とされる英語のスキルを高めるための手助けをすることを目指しています。

医薬品製造化学分野

日頃、静薬学友会の皆様から絶大なご支援を受け賜り、厚く御礼申し上げます。

平成28年3月に江木正浩准教授が食品栄養科学部教授に、10月に浅川倫宏助教が東海大学講師（現准教授）に転出されました。平成29年1月に卒業生の大内仁志助教が微生物化学研究所から戻り、5月には北海道大学理学部化学科から吉村文彦准教授が赴任しました。大内博士は、アクロメリン酸の全合成にて学位を取得後、柴崎正勝理事長の下で研鑽を積み戻ってきました。また、吉村博士は東北大学理学部化学科の平間研究室にて学位取得後、ニューヨークのスローンケタリングがンセンターのダニエフスキー教授の元で研鑽を積み、北大理学部化学科の助手に赴任されました。北大では宮下・谷野教授の教室であり、天然物全合成の王道を渡り歩かれた方ですが、小職とは吉村博士が学生の時からよく知る同志です。

当研究室では、「何事にも全力投球」と「よく学び、よく遊ぶ」の精神をモットーに日々生活をしております。また、研究と教育の柱となる「天然物の全合成」は広範なサイエンスの知識を必要とするため、プロジェクトの進行は学生の成長を可能にします。現在も製薬企業を始めとする産業界から熱望されている「もの作り（有機合成）」

のできる人材」の教育を実践しております。これからも、学生が元気に明るく頑張れる体制を維持したいと考えています。

平成29年度に当研究室を巣立った学生は以下です。平日はトリアエイヨ株式会社に勤務して、土日に当研究室にて実験を続けてきた卒業生の長坂洋祐がTAN1251Cの全合成により10月に課程博士の学位を取得しました。また、平成30年3月の修士修了者（就職先）は、中尾祐太（JT）、並木拓哉（川研ファインケミカル）、長谷川寛直（日本新薬）、福田優亮（科研製薬）です。ソフフラバノンHの全合成を完成させた村上はる香（聖隷浜松病院）は6年制学士として卒業しました。



2018年6月25日 集合写真

薬物動態学分野

尾上誠良教授が薬物動態学分野を主宰されてから5年目となり、大学院生博士課程6名、修士課程6名、学部生11名でスタートしました。

クスリを逆から読むと「リスク」(GxR)となりますが、実際に薬効と副作用は表裏一体で、どのようなクスリでも副作用は発生してしまいます。そこで私たちは投薬した後のクスリが体内でどのように動くのか詳細に把握し、そのクスリの体内での動態制御による薬効改善・副作用回避を目指して次のような研究を推進しています。

(1)薬物動態制御による副作用の回避、(2)ナノテクノロジーや物性制御を利用した薬物動態・薬効の改善、(3)病態下の薬物動態変化解析とその戦略的な回避方法探索、(4)薬物の物性・動態情報からの副作用リスク予測。

当研究室は昨年、薬剤学教室設立から数えて50年の節目を迎え、2017年9月に創立50周年記念同門会を開催しました。本会には在学生および多数のOB/OGにご参加いただき、盛会のうちに終えることができました。旧交を温め、参加者の親睦を深める非常に良い機会であったのではないのでしょうか。今後も定期的に同門会を開催する予定ですので、今回残念ながらご参加いただけなかったOB/OGの方々も次回はお喜び致します。昨年の同門会の様子

ならびに同門会に関する情報は当研究室のWebサイトに掲載しております。
(<http://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/yakuzai/>)

本研究室出身者は、薬剤学に関する基礎研究から臨床研究まで視野にいた幅広い経験を活かし、医療機関、製薬・食品企業、行政機関や教育機関など様々な分野で活躍されています。今後も研究活動を通じて薬の専門家としての研究技能・知識とコミュニケーション能力を併せ持つ薬科学者を育成し、変化し続ける社会のなかでリーダーシップを発揮できる人材を輩出できるように邁進して参ります。今後とも皆様からのご支援を賜りますようお願い申し上げます。



創立50周年記念同門会にて撮影（2017年9月23日）

創剤科学分野

今年の3月末に、当研究室を11年に亘り主宰された板井茂教授が定年退職されました。板井先生のご指導の下、本研究室を卒業・修了した学部・博士前期課程の学生は70名を、博士の学位取得者は20名を超えており、医薬品業界を中心に主導的な立場で活躍いただいております。先輩方の活躍する姿を見ることが、研究室に在籍する学生にとって大きな励みになっています。

4月からはアステラス製薬より近藤が教授に就任いたしました。本年度は近藤の他、岩尾康範准教授と木村晋一郎助教の3名の教員、大学院生博士課程4名、博士前期課程8名、学部生13名の計28名で研究に取り組んでいます。本研究室の特徴の一つは静岡薬科大学時代より企業研究者が教授を務めている点であり、近藤で5代目となります。医薬品を創製するという共通目標の下、大学と企業が果たすそれぞれの役割を理解し、患者さんに届くモノづくりを念頭に置いた基礎研究を展開して参ります。近年の創薬パラダイムシフトは従来の低分子化合物に加え、中分子化合物、抗体、核酸・遺伝子、細胞といった新しいモダリティの研究を活性化しています。モダリティの多様化は、患者さんにとって薬物治療の選択肢を拡げることにつながりますが、実現を可能にするためには、それぞれのモダリティの効果を最大限に引き出す製剤・

DDS技術の進展が必須です。そこで、本研究室は従来の経口固形製剤化技術開発、粉体工学研究に加え、新しいモダリティをヒトに投与可能にする製剤・DDS技術の研究開発を進めていくことにします。新規放出制御製剤の開発、ナノテクノロジーを駆使した新規DDS技術の開発を通して、テーラーメイド製剤、小児用製剤への応用を目指します。

昨年度も何名かの学生が学会で最優秀発表者賞等を受賞し研究レベルの高さを示してくれています。研究室での活動を通して、薬を創る(研究者)および薬を使う(薬剤師)という異なる役割を担う人材を育成して参ります。



2018年4月3日 研究室お花見にて

生体情報分子解析学分野

生体情報分子解析学分野では、薬物療法の対象となる生体の生理学的特性に応じた医薬品の作用特性を分子レベルで解析し、医薬品の適正使用に必要なとなる生体情報を理解することを目指しています。平成29年9月に坂本多穂が講師として着任し、黒川の心血管を筆頭に、坂本の骨格筋、山崎の肝臓、山口の脂肪細胞とそれぞれの組織において、薬物作用の個人差に関わる分子メカニズムの発見を目指し、教育研究活動に励んでいます。昨

年は、不整脈薬の作用の男女差を説明するメカニズムの原著(J Physiol, 595: 469, 2017)やヒトiPS細胞を用いた心機能評価法の特許出願などの成果を上げました。平成30年度は、6名の薬学科4年が配属され、学生18名と教員・秘書5名の23名のチームです。それぞれの個性を思う存分伸ばしていくことが出来るようなラボ作りを目指しています。

現メンバーは県外出身者が多く、実習や休みを考慮して、4月に研究室旅行を行いました(写真)。結果として新歓

も兼ねたので、新メンバーが早くラボになじめたように思います。なお、2019年夏に同門会を予定していますので、住所変更等は専用メールアドレス:bipdownon@u-shizuoka-ken.ac.jpまでお知らせ下さい。



平成30年4月28日 教室旅行

臨床薬効解析学分野

臨床薬効解析学研究室は、現在、4名の教員と博士課程5名、修士課程1名、学部学生17名の総勢27名の研究体制で、「医療現場からシーズを見つけて研究を展開し、その成果を現場や社会に還元する」ことを目指して、基礎と臨床、それらの橋渡し研究など多種多様な研究を展開しています。昨年は、7月に博士課程の鈴木光路さんが日本薬学会東海支部総会・大会で学生優秀発表賞を受賞、10月には6年生の中森春美さんが第55回日本癌治療学会にて優秀演題賞を受賞、本年3月には5年生の植田萌美さんが日本薬学会第138年会にて学生優秀発表賞を受賞するなど、日々の研究成果を積極的に各学会にて発表し、高い評価を受けています。また、本年6月には平井啓太助教が日本薬学会東海支部 学術奨励賞を受賞しました。

当研究室では薬物治療などの臨床的課題を扱うため、静岡県立総合病院をはじめ、静岡県立こども病院、聖隷浜松病院、東北大学、東京女子医科大学、協和病院、がん研有明病院、国立がん研究センター東病院、日本大学医学部、東京医科歯科大学などの県内外の医療機関、大学、研究所と連携をもちながら共同研究を行っています。特に、昨年9月には静岡県立総合病院循環器病センター6階に設置されたゲノム薬理研究室が、病院内に新設された先端医

学棟5階のリサーチ・サポートセンターに移転し、静岡県立総合病院との共同研究がより行いやすい環境が整いました。

研究室の年中行事としては、本年度もお花見、新入生歓迎会、バーベキュー、研究室旅行、送別会などが開催され、連帯感の醸造につながっております。研究成果や研究室行事については研究室ホームページに随時公開しておりますので、是非覗いてみてください。また、研究室のFacebookを立ち上げましたのでこちらも是非ご覧ください。



2018年4月2日 2018年度お花見

医薬品情報解析学分野

当研究室は2005年に発足し、本年度で13年目を迎えます。その間、OB・OGが病院・薬局を始め、製薬会社の統計解析部門等で幅広く活躍しています。本年2018年4月から大阪大学より古島大資先生が助教として赴任し、新しい息吹で研究室が盛り上がっています。

当研究室のミッションは、薬学教育の中で重要な分野である新薬の臨床開発や臨床研究に必要な臨床研究方法論、生物統計学、疫学、EBM等の教育ならびに研究を実践することです。この様な理念を掲げた研究室は薬系大学では極めて珍しく、まさに時代に先駆けた研究室と言えます。

教育面では社会人にも門戸を広げた「CRC/CRA養成講座・創薬育薬基礎・応用特論」を毎年開講し社会的にも高く評価され、2007年から日本臨床薬理学会の認める「認定CRC更新のための講習会」に認定されています。またファルマバレーセンターと連携し、静岡県治療ネットワークの発展のためにCRCの養成や臨床試験実施体制の整備にも力を注いでいます。2010年には静岡県立総合病院内に当研究室内の分室が開設され、データマネジメント・統計解析機能を有する分室として、医療機関・大学連携による臨床研究の質を担保する拠点となるこ

とが期待されています。

研究面においては、静岡県立総合病院ほか、多くの医療福祉機関との連携で多施設共同研究を実施しています。特に緑茶の感染症予防や認知機能への影響に関する臨床研究はマスコミでも大きく取り上げられています。また、国立健康・栄養研究所との共同研究で健康食品の安全性評価に関する研究も継続しています。更に来年6月には本学において、第4回日本臨床薬理学会東海・北陸地方会を開催する予定です。大学院生・学部生等による研究成果も着実に積み重ねられ、国際誌への投稿も増え、今後の発展が益々期待されています。



2018年4月3日 研究室のお花見会（集合写真）

実践薬学分野

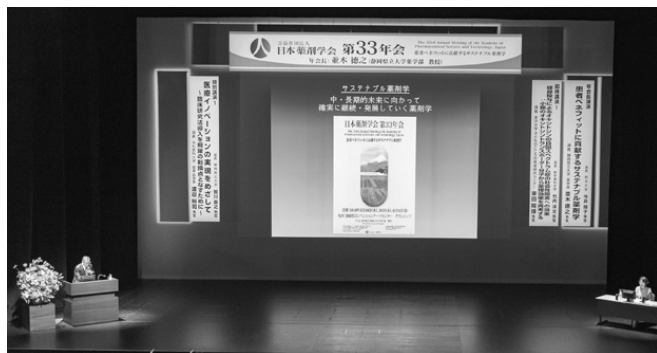
実践薬学分野は、薬学部6年制教育への移行に伴い2008年4月に誕生した薬学部で最も新しい研究室で、臨床教育とともに医療に密着した、分野名称の通り「実践的な研究」を行っています。

今年5月30日から6月1日には、公益社団法人日本薬剤学会第33年会在静岡にて開催され、並木教授が年会長を務めました。

如何に優れた薬剤が作られても患者さんが服薬できない薬剤であるならば、期待する治療効果を得ることはできません。そこで、薬剤は患者さんのものであるという原点に立ち戻って、過去から現在、そして現在から未来に向かって患者ベネフィットに貢献していくサステナブル(sustainable、中・長期的未来に向かって確実に継続・発展していくとの意味)な学会として存在感を示していきたいとの願いを込め、年会のテーマを「患者ベネフィットに貢献するサステナブル薬剤学」と決めました。本年会には日本薬学会会頭の奥直人先生(元静岡県立大学教授、現帝京大学教授)、並びに日本医療薬学会会頭の佐々木均先生(長崎大学教授・病院薬剤部長)にも加わって頂き、薬剤学会初となる3学会のコラボレーションを実現しました。本年会は全国から1250名もの参加者が集まる盛会となり、テーマの「サステナブル薬

剤学」を、存在感をもって社会にアピールできたことと確信しております。この素晴らしい会を開催できたのも、ひとえに組織委員、運営委員、全国の薬剤学研究者ならびに静岡県立大学の皆様のご尽力によるものと深謝しております。

実践薬学分野は、「医療への直接の還元を意識した領域での研究」に特化し、企業、病院、薬局や他大学と協力しながら「社会に開かれた実践的な研究」をモットーとして研究を進めてきました。本研究室は、2018年4月について創立10年目を迎えました。患者さんに優れた製剤と薬物治療を届けるという目標を持ち、これからも研究室一丸となって邁進して参ります。



2018年6月 日本薬剤学会第33年会 並木教授の年会長講演

医薬品化学分野

当研究室では現在、「Safe & Easy Synthetic Chemistry (安全かつ簡便な合成法を実現する化学)」の開拓を主な目標として、いろいろな研究を行っています。これらの研究を通じてこれまでに、安全・簡便な化学合成を可能とする一酸化炭素等価体の開発や、二酸化硫黄等価体を用いる新規触媒反応の開発、位置選択的反応を実現する新規触媒の開発、などを実現してきました。現在は、さらに研究を進展させることができるよう努力精進しています。

この1年の間では、念願だった、一酸化炭素等価体の反応機構に関する論文を、多くの共同研究者の方々に助けて頂きながら出すことができました。

また、当研究室で開発したPd-DHTP触媒の新たな可能性を広げることになった触媒反応(インドールのアリール化)も、論文として出すことができ、うれしく思っています。その他にも、一酸化炭素等価体TCPPFの反応や、フルオレノン合成に関する研究成果なども、論文という形で世に問うことができました。

さらにうれしいニュースとして、山口深雪助教が平成30年度有機合成化学協会東海支部奨励賞を受賞しました。これまでにPd-DHTP触媒を用いる新規合成法をいくつも開発してきており、今後の飛躍が楽しみです。

毎年5月ごろには、用宗海岸でバーベキューをしています。今年もOB・OGが何人か参加してくれました。来年も開催したいと思っていますので、OB・OGの方は是非ともご参加ください。

昨年の研究室旅行では名古屋方面に行つて金の鯨を鑑賞し、剣祭の研究室紹介では学生たちが餃子をふるまい、今年のお花見は雨に降られることなく無事に外で行うことができました。1年があつという間です。



誕生会で学生が用意してくれたケーキ(2018年)

生命物理化学分野

今年の夏は厳しい猛暑で、日中の実験室は30℃を超える日が続いています。そんな中でも、学生・教員一同、研究を頑張っています。さて、昨年10月からの研究室活動について報告いたします。昨年の12月15日、准教授の石川吉伸先生がI-T創薬コンテスト「コンピュータで薬のタネを創る4」グランプリにおいて、ナミキ商事賞（銅メダル相当）を受賞しました。本コンテストでは、お題となるタンパク質（今回はSirtuin 1）の阻害化合物を約250万化合物のバーチャルライブラリの中から400個の候補化合物を提示します。そのなかで阻害活性（IC₅₀）の優れた化合物を提示した参加者に賞が授与されます。石川先生は惜しくも2位でしたが、バーチャルスクリーニングでIC₅₀が1μM程度の化合物を提示できたのは経験のなせる業です。また、今年の6月30日、金城学院大学で開催された第64回日本薬学会東海支部総会・大会において、薬学科6年生の櫻井ひとみさんと村上慧くんが学生優秀発表賞を受賞しました。この賞は、学部学生および大学院学生を対象に、優秀な発表（口頭）に贈られるものです。同じ発表区分で2名の学生が受賞したことは大変喜ば



学生優秀発表賞の受賞（第64回日本薬学会東海支部総会・大会、平成30年6月30日）
左から村上慧くん、櫻井ひとみさん

しいことです。さらに、同じく第64回日本薬学会東海支部総会・大会において、助教の原幸大先生が平成30年度東海支部学術奨励賞（第2部門）を受賞しました。原先生が学生時代から現在まで取り組んできたREV7/MAD2L2というDNA修復などに関わるタンパク質の構造と機能の研究が評価されました。約10年間の継続的な研究成果が受賞に繋がり、続けることの大切さを再認識いたしました。

医薬品創製化学分野

私たちの研究室は今年で6年目を迎えました。大学院学生と学部生に教員3名を加えた総勢21名で、「新しい化学の創製」と「新しい医薬分子の創製」を目指して全力で頑張っています。学生さん達は江上講師と川戸助教から熱心な指導を受け、お互いに切磋琢磨しながら勉強研究に取り組んでいます。学生さん達の努力は論文投稿として実を結ぶだけでなく学会発表においても高く評価されています。最近では博士後期課程1年の丹羽智紀君が国際学会HALCHEMⅢならびに中部化学連合秋季大会において優秀発表賞を受賞しました。また、今年の6月には病院実務実習の合間を縫って薬学科5年生の伊藤優太君が日本薬学会東海支部総会に参加して、優秀発表賞を受賞する快挙を達成しました。

この3月には8名が社会人として巣立ちました。薬学科・博士前期課程を卒業・修了した6名は企業研究者や薬局薬剤師としてのそれぞれの道を歩みはじめました。また、博士号を取得した2名は武蔵野大学薬学部の助教ならびに米国イリノイ大学化学科の博士研究員として着任・留学を決め、さらに研鑽を続けています。来年3月に卒業・修了予定の皆さんも無事に進路が決まり、各々が指導的役割を担える薬剤師や企業研究者として活躍してくれると期待しています。



7月9日 院試壮行会 静岡パルコ屋上にて

昨年度に引き続き、今年度の4年生研究室配属も男性ばかりでした。華やかさはないですが、研究室に良い刺激を与えてくれる個性豊かな学生が集まりました。毎年恒例の院試壮行会では、受験予定の薬科学科4年生の皆さんが大きな目標を語ってくれました。本当に実現できるのか少し不安になる壮大な目標設定でしたが、院試休みの勉強の成果を試験にぶつけると約束し、とても盛り上がりました。

最後に、今年は「研究室発足5周年記念」と題して大々的な同窓会を開く予定です。たくましく成長した卒業生と会えることが今からとても楽しみです。この様子は来年の研究室便りで報告したいと思います。

統合生理学分野

当研究室では、「脳科学を基盤とする健康長寿」をメインテーマに掲げ、神経科学、生理学の知識を活かし、インビボ分子生理学を基盤に研究を推進しています。現在は、必須微量元素の亜鉛から見た脳の機能解析と病態解析を主軸に行っています。亜鉛イオンはシグナルファクターとして記憶の獲得・維持・想起に必要である一方で、過剰な細胞内亜鉛イオンは記憶障害の一因となります。アルツハイマー病の原因物質の一つとされるアミロイドβは、細胞外で亜鉛イオンと結合して凝集体を形成し、細胞内へ移行するため、細胞内で亜鉛イオンが過剰となります。また、活性酸素種や糖質コルチコイドも細胞外亜鉛イオンを過剰流入させ、それぞれ黒質ドパミン作動性神経変性による運動障害やストレス性記憶障害の一因となることを最近明らかにしました。アルツハイマー病、パーキンソン病等の脳疾患の予防・治療に神経細胞内亜鉛イオンの毒性制御がカギとなるとの視点から研究を進めています。疲労あるいは老化による神経内分泌系機能の乱れにも注目しています。

毎年数名の学生が学会発表で優秀発表賞を受賞しています。昨年は今春卒業した橋本若奈さん（6年生）と村上拓君（博士前期2年）と佐藤祐一君（博士前期1年）が受賞しました。橋本若奈さんは昨年3回の受賞を達成し



芝生公園でお花見（2018年4月）

ました。今年は竹内梓紗さん（5年生）と西尾隆祐君（博士後期1年）が受賞しています。鈴木美希助教は若手研究者の優秀発表賞を昨年と今年に受賞しました。玉野春南特任講師は日本微量元素学会の研究学術賞を受賞することが7月に決定しました。国際学会での発表にも毎年積極的に参加しています。今年11月には米国神経科学学会で大学院生3名が発表します。

毎年8月第1土曜日には現役学生を交えた同窓会を開催しています。昨年も十数名の卒業生が参加し、大いに盛り上がりました。開催情報は研究室HPに毎年掲載しています。卒業生の皆様のご参加をお待ちしております。

免疫微生物学分野

主な研究テーマ

- ・植物での可食性IgA抗体の発現による高次機能性食品をめざした研究
- ・IgAをプラットフォームとする新規免疫排除分子の開発
- ・TRPチャネルに着目した化学物質による皮膚アジュバント機構の解明
- ・レジオネラおよびヘリコバクター・シネダイの病原機構の解明

食中毒で有名な腸管出血性大腸菌O157・H7が産生するペロ毒素に対しては、大腸局所においてIgA抗体によつてその侵入を阻止できるかもしれません。ペロ毒素に対する分泌型IgAモノクローナル抗体を作製し、食べられる植物に生産させ、食べて効く抗体に発展させる研究が続いています。実用化にはまだ多くの課題がありますが、すでにシロイヌナズナやリーフレタスでの発現に成功しました。さらに、ミニトマトでの発現にも見通しがつきました。毒素中和活性を生体内で直接証明することを当面の目標としています。また、化学物質が有する、知覚神経に発現するTRPチャネルの活性化能力と、皮膚感作促進作用との関連が見えてきました。原因不明のアレルギイ発症機構の解明につながればと考えています。さらに、再発する細菌感染症として問題となっているヘリコバクター・シネダイの病原機構について

も、解明をめざしています。今年の10月27日に、静岡にて同門会を開催します。詳細は、別頁をご覧ください。個別の案内がお手元に届いていない場合には、お問い合わせください。

平成29年度の卒業生は、薬科学専攻の修士課程を修了した関口皓太君が、皮膚科領域の製薬会社マルホ（株）の研究所に就職しました。薬学部薬学科（6年制）卒業生では、遠藤由貴奈さんが杏林堂薬局に、小野内拓也君が安城厚生病院薬剤部に、梶原優佳さんが（株）マツモトキヨシ（調剤薬局）に、嶋芳裕君が（株）ミック（調剤薬局）に、松田弥奈美さんが藤枝市立総合病院薬剤部にそれぞれ就職しました。卒業生の皆さんのこれからの活躍を祈っています。



平成29年度卒業式の午後、県立大学モニュメント下で撮影

創薬探索センター

現代のがん治療を目的とした創薬では、新しい知識や仮説をもとにした分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が開発、実用化されています。しかし、その福音は一部のがん種に限定されており、多くの未解決セグメントを残しています。当研究室は2004年に開設されて以来、静岡県ファルマバレーセンターとの連携のもと、国内研究機関や製薬企業と共同で、新しい抗がん剤シーズの探索研究を進めています。これまでに転写制御因子を標的とした新規抗がん剤候補物質の創出に成功し、欧米アジアでの特許登録を完了、現在非臨床試験に進めています。さらに、従来の抗がん剤のようにがん細胞自体を攻撃するのではなく、生体にもともと備わる免疫細胞の力を利用する薬剤の開発を進めています。県内企業との共同研究で免疫調節機能を有する酵素を標的としたユニークな化合物を発見しており、構造最適化と細胞系や動物モデルでの詳細な解析を行っています。当研究室では腫瘍分子生物学、腫瘍免疫学について学生と共に学び理解を深めることにより、がんのアクセラレーターを狙った新薬の研究開発に取り組んでいます。今なお増え続けるがん患者さんにとっての「HOPPE & HELLER」を目指します。

今年度は、村岡大輔助教が長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の准教授と

して栄転しました。また、博士2名、修士1名、薬学科6年生2名、薬科学科4年生1名が修了／卒業しました。氏名と論文題目は以下の通りです。岩本一徳(博)「抗悪性腫瘍薬ベンダムスチンによるSTAT3阻害作用」、岡田祐介(博)「蛍光タンパク質タグを用いた新規細胞内STAT3ホモ二量体解析方法の開発」、深井椋太(修)「抗がん活性を有する新規システム誘導体の合成と作用機序解析」、石原桃子(薬学科)「新規IDO/IDO阻害化合物の構造活性相関研究」、長澤すなみ(薬学科)「新規キヌレニン産生阻害化合物の作用機序に関する研究」、安井文隆(薬科学科)「アビジン-ビオチン相互作用を利用したSTAT3固定化磁性粒子の作製」



2017年12月23日忘年会 静岡市内にて

分子病態学分野

分子病態学分野は森本達也先生が教授に就任してから今年で10年を迎えました。現在は教員4名、研究補助員2名、大学院生10名(うち博士課程3名)、学部生12名の総勢28名となりました。近年は博士課程への進学者も多く、時に指導しながら博士前期課程の学生、学部生と一緒に研究を行っています。

当研究室では心血管疾患の創薬を目指し「心不全発症に関わる心筋細胞内シグナル伝達機構の解析」をテーマに研究を行っています。具体的には心不全発症のメカニズム解析から治療標的タンパク質の同定を行い、薬物候補化合物をスクリーニング、さらには前臨床試験及び臨床試験へと応用、発展させることを目標としています。

学会発表も積極的に行っており、第138回日本薬学会年会(金沢)では留学生のNurmla Sariさんが優秀発表賞を、第23回国際心血管薬物療法学会(京都)で片山歩実さんがBest Abstract賞を受賞しました。清水聡史さんは第1回日本循環器学会基礎フォーラム(東京)・Asian Pacific Society of Cardiology Congress(台湾)・IUBMB Focused Meeting on GATA Transcription Factors(ギリシャ)の3つの学会で受賞しています。また6月に開催された第64回日本薬学会東海支部大会(愛知)において、砂川陽一助教

が日本薬学会東海支部学術奨励賞を受賞しています。まだ発展途上のテーマもありますが、スタッフ・学生みんなでより大きな成果としていければと思っています。

昨年、静岡県立総合病院の先端医学棟にも研究室が新たに開設されました。これまでも臨床研究でクルクミンや緑茶などの健康への効果を明らかにしてきましたが、県立総合病院にも研究室が出来たことでこれまで以上に臨床研究を進めやすい体制が整いました。

この春には森本先生による禁煙外来も静岡県立総合病院で始まり、禁煙と健康についても研究を進めていく予定です。また次年度9月には森本先生を会長として静岡県立大学にて第21回応用薬理シンポジウムを開催いたします。これからも基礎研究と臨床研究の両輪を動かし、社会に貢献できるよう努力していきます。



2018年5月26日 第23回国際心血管薬物療法学会にて

臨床薬剤学分野

臨床薬剤学研究室は、2002年度に本学で初めての臨床系講座として開設され、2005年度から賀川義之教授が主催しています。なお、学部運営上、薬局管理学を含めて活動しています。研究インフラは大学（草薙キャンパス）と静岡県立総合病院にあります。静岡県立総合病院内の研究室は、2002年に開設され、2008年に新築された循環器病センター6階に移設され、さらに2017年9月からは新築された先端医学研究棟内に再移設されました。地方自治体が設立した病院内に薬学部の実験室を設置することは極めて珍しく、我が国におけるモデル事例とされており、内外から注目されています。

教育面では、6年制薬学教育の病院・薬局実務実習（5年次）を他分野と分担協力して担当しています。講義では、薬学概論（1年次）、早期体験学習（1年次）、医薬品安全性学（3年次）、薬学と社会（3年次）、医薬品情報学Ⅰ（3年次）、薬物治療学特論（大学院）等を担当しています。研究面では臨床現場での臨床薬物動態学・薬理学的課題を研究テーマとして捉え、薬学的手法で解決に導く研究を行っています。認知症治療薬、抗がん薬および抗てんかん薬等の有害事象を臨床的な課題として捉え、医療施設と共同研究を実施しています。最近では、健康

食品の体内動態にも着目し、関節リウマチでよく摂取されているN・アセチル・D・グルコサミンの体内動態測定法を新規に開発し、実際の程度の体内吸収があり、軟骨成分再生にどの程度利用されているかを検討しています。臨床研究では症例数の集積に時間がかかり、数年をかけて論文一報を完成させるような根気強い研究姿勢が必要になります。当研究室の研究業績は臨床研究の成果ですので、研究室所属学生、大学院生および教員が一丸となって、根気強く質の高い臨床薬学研究に取り組んでいます。これからも、当研究室は、臨床薬学研究で社会に貢献できる成果を出せるように精進していきます。



2018年4月3日 4年生歓迎の花見にて



草薙キャンパス上空より



薬学部棟



薬学部棟レジャールーム
机、椅子は静薬学友会より寄贈



ユニバーシティプラザ



夕焼けに映えるキャンパス

キャンパス風景

薬学部教室名および教員一覧 (カッコ内は大学院薬学研究院)

薬学科			薬学科		
生体機能薬学大講座			臨床薬学大講座		
生化学分野 (生化学講座)	教授	鈴木 隆	臨床薬剤学分野 (臨床薬剤学講座)	教授	賀川 義之
	准教授	高橋 忠伸		准教授	宮寄 靖則
	講師	南 彰		講師	石井 康子
	助教	紅林 佑希		講師	内野 智信
衛生分子毒性学分野 (衛生分子毒性学講座)	教授	吉成 浩一	臨床薬効解析学分野 (臨床薬効解析学講座)	教授	伊藤 邦彦
	講師	佐々木 崇光		准教授	井上 和幸
	助教	保坂 卓臣		講師	辻 大樹
	助教	志津 怜太		助教	平井 啓太
薬理学分野 (薬理学講座)	教授	石川 智久	医薬品情報解析学分野 (医薬品情報解析学講座)	教授	山田 浩
	講師	金子 雪子		助教	古島 大資
	助教	山口 桃生	実践薬学分野 (実践薬学講座)	教授	並木 徳之
医薬生命化学分野 (医薬生命化学講座)	教授	浅井 知浩		准教授	内田 信也
助教	小出 裕之	講師		柏倉 康治	
身体運動科学分野	准教授	窪田 辰政		助教	田中 紫茉莉
科学英語分野	准教授	ホーク フィリップ (Philip HAWKE)	薬局管理学分野 (臨床薬剤学講座)	助教	谷澤 康玄
			薬科学科		
分子薬学大講座			創薬科学大講座		
生体機能分子分析学分野 (生体機能分子分析学講座)	教授	轟木 堅一郎	医薬品化学分野 (薬化学講座)	教授	眞鍋 敬
	特任教授	豊岡 利正		講師	岩本 憲人
	講師	水野 初		講師	小西 英之
医薬品製造化学分野 (医薬品製造化学講座)	教授	菅 敏幸		助教	山口 深雪
	准教授	吉村 文彦	生命物理化学分野 (生命物理化学講座)	教授	橋本 博
	講師	稲井 誠		准教授	石川 吉伸
	助教	大内 仁志		助教	原 幸大
生薬学分野 (生薬学講座)	教授	渡辺 賢二		助教	菱木 麻美
	講師	恒松 雄太	医薬品創製化学分野 (医薬品創製化学講座)	教授	濱島 義隆
	講師	佐藤 道大		講師	江上 寛通
医療薬学大講座				助教	川戸 勇士
薬物動態学分野 (薬物動態学講座)	教授	尾上 誠良	生命薬科学大講座		
	講師	世戸 孝樹	統合生理学分野 (統合生理学講座)	教授	武田 厚司
	助教	佐藤 秀行		准教授	海野 けい子
創剤科学分野 (創剤工学講座)	教授	近藤 啓		講師	井口 和明
	准教授	岩尾 康範		助教	鈴木 美希
	助教	木村 晋一郎	免疫微生物学分野 (免疫微生物学講座)	教授	今井 康之
分子病態学分野 (分子病態学講座)	教授	森本 達也		講師	三宅 正紀
	講師	刀坂 泰史		講師	黒羽子 孝太
	助教	砂川 陽一		助教	中西 勝宏
	助教	宮崎 雄輔	大学院付属施設		
生体情報分子解析学分野 (生体情報分子解析学講座)	教授	黒川 洵子	創薬探索センター	教授	浅井 章良
	講師	山崎 泰広		准教授	澤田 潤一
	講師	坂本 多穂		講師	小郷 尚久
	助教	山口 賢彦	薬食研究推進センター	センター長・特任教授	山田 静雄
				講師	伊藤 由彦

在学生だより

今回は、学生代議員、コラボレーターに就任された皆さんを紹介します。

ご縁を大切に

五十嵐千乃

(薬学部 薬科学科1年)

大学に入学して、早いもので半期の授業が終講しました。県大の薬学部は、北は北海道、南は沖縄まで様々な地域から人が集まっています。色々なバックグラウンドのある人に出会い、日々刺激を受けています。

この度、私は静薬学友会の代議員をさせて頂いたことになりました。代議員制を取るのは今年からということで、このような機会を頂けたことを有難く思っています。先日、静薬学友会の総会に参加させて頂きました。

静岡県立大学ないしは前身の大学の薬学部を卒業した先輩方とお話する機会がありました。薬学生なら誰しもが知っている薬を開発された方や、薬剤師として薬局や病院で働いている方、大学で教鞭をとっている方、起業された方、行政で活躍している方まで、様々な業種に就いている先輩がいっぱい



しいました。薬学部と聞いただけでは、私が考えたことのないような道があるのだなと

驚きました。

以前から、北海道・東北人会や九州人会があるというのは知っていました。が、なぜ他の地方人会はないのだろうと思っていました。学友会の集まりでお話をする中で、昔は他の地方人会もあったというお話を伺いました。それならば、他の地方人会が再び立ち上げられればと思い、北陸人会を立ち上げることになりました。何から手を付ければいいのか見当もつきませんでした。多くの人の助けを得て何とか形づくることができました。人との繋がりを大切にしようと立ち上げた北陸人会の立ち上げの中でも人との繋がりの大切さ、有難さを感じました。また、私が北陸人会を作りたいと周りに話し始めた時に、同期に自分たちの地方も作ったらどうかと話してくれている人がいました。まだ実現には至っていませんが、そのような動きに少しでも繋がったら嬉しいです。

受験期に、恩師に「ご縁のある大学に行きますから。」という言葉を頂きました。ご縁あってやって来た静岡で、人との繋がりを大切にして学生生活を送っていききたいです。

離島薬剤師取材と学友会懇親会の参加を通して



宮国 大介

(薬学部2年)

私は、去年、株式会社梶屋の企画する、離島薬剤師の取材に参加した。それは、石垣島の病院で薬剤師がどのように働かれているかを取材するものであった。その動機は、薬剤師として地元の宮古島に戻り、島の医療を担う一員になりたいからだ。さらに、現場のイメージを私はあまり持っていなかったからでもあった。取材を通し、臨機応変に問題解決しうる即戦力の必要性を改めて感じた。島から本土の学会・研修参加に交通費などの費用面で大きなり、かつ島の患者層・数が少ないため知識面でも広げにくい点が実際問題あった。その一方、人手が足りない分、一人ひとりの責任や役割が大きい点も印象に残った。取材で話を聞いて私は、ある程度の知識を高めつつ、地元で活かす即戦力を今後、身に付けていくべきだと感じ、将来の目標を一層はつきりさせることができた。

今年私は、静薬学友会の総会とその後の懇親会に参加し、役員の先輩方の話を聞く機会を頂いた。大きく感じたこ

ととして、一言で「薬剤師」と語れるような方は誰一人としていなかった。薬局で働きつつ減塩食の開発に取り組みされていたり、重金属工場での社員の健康サポートなど、薬剤師としての幅の広さを改めて実感した。その機会を通して、私も何かと掛け算した薬剤師を目指したいと思うようになった。その何かは具体的にはまだはっきりと定まっていなかったが、「地域医療における在宅医療」×「薬剤師」が現段階で興味深い。静薬学友会総会後の懇親会で先輩方から聞いた話を通して、自分の将来について見つめ直すことができた。

私が静薬学友会に期待することは、こうした先輩と話す機会である。卒業生の方々の存在は、本学の強みが活かせるはずだ。今後、代議員、コラボレーターとして、その機会づくりを始めとした取り組みに貢献していきたい。また、自分の将来に柔軟性も持ちながらもしっかりと見つめ直し、それに基づくことを少しずつ取り組んでいきたい。

101年目のプロデュース

中村 洸友

(薬学部3年)

今回、静薬学友会の代議員をさせていただくことになりました。このような形で学友会に関わり、お願いしたいのは、卒業後の情報面での、卒業生の方からの在学生へのサポートです。大学では様々な先生方から講義や実習を通して、「薬学」に関わったことについて教わっています。しかし、それを学んで卒業した先にはどのような進路があるのかということをあまり意識できる機会はないように思います。薬局や病院こそ、働いている方と関われることはありますが、他に關しては仕事内容など深いところまで知ることができないことはあまりありません。県大の卒業生は幅広い業種で多様な場所活躍されている中で、学友会を通して、卒業生からお仕事のことなどを

をうかがったりできる機会をお願いできれば、在学生が仕事について知ることができきつかけとなるようにも思います。

私は予防医学や医療データの解析の分野に興味をもち、大学で医療を学び研究する道を志しました。そして、学んだことを、社会の人々の健康



日本薬学会第137年会（仙台）での
ポスター発表での写真

の維持や病気の予防につなげることに寄与できる仕事をしたいです。それには、ひとつとして公務員薬剤師などといった形で地域に関わるという方法もありますし、他にも様々な観点からの目標を叶えられる仕事があると思います。現在学んでいる学部での勉強は、私にとって難しく感じることも多いですが、それ越えた先には広い世界が見えてくると思うので、一つ一つこなせるようにしていきたいです。

学友会が新しい制度になって初年度ということ、これから在学生としてどのように関われるのかまだ手探りですが、これからよろしく願います。

今までの部活動を振り返って

安部 友涼

(薬学部5年)

私は陸上競技部に所属しています。入学時の県大陸上部は、まだ創部2年目で、部活ではなくサークル活動という位置付けでした。当然、大会成績も少ないため、大学パンフレットにも記載はなく、県大に陸上競技部はないと思っていました。クラブ・サークル紹介時に初めてその存在を知りましたが、私は高校3年の秋、肺の病気で手術したということもあり、陸上競技を続けないつもりでした。しかし、クラブ・サークル紹介後、特に目的もなく歩いていると、気付けば陸上競技部の集団の中にいました。それは、本当に不思議だったなと思います。先輩に勧められる形で見学に行くと、そこには少ない部員数ながらも、「走る・跳ぶ・投げる」、何より陸上競技が好きな選手たちが切磋琢磨しながら自分の競技力を磨く姿がありました。私は、最初から決めていたかのように入部を決めました。

それから5年、部員数は40人を超え、日々、各自の目標に向かって練習しています。私自身も自己記録更新や2015年/2017年全日本医歯薬獣陸上競技選手権大会1500mで優勝する等、記録・結果を残してきました。



静岡マラソン完走後 陸上部の仲間達と
(左上が本人)

た。陸上競技部として、全体の実力が上がってきた今年は、駅伝で好記録を残したいと考えています。最近、実務実習や研究活動が忙しく、全体練習の時間に間に合わないため、1人で練習することも増えましたが、最大目標としている、12月に愛知県知多半島で開催される東海学生駅伝で、県大過去最高記録・順位を達成したいと考えています。

今後、記録・結果を残していく中で、県大陸上部の存在が広く知られるようになり、陸上競技に興味のある学生が入部し、活躍してくれれば嬉しいと思います。

実務実習を通して

私が静岡県立大学に入学してから、今年で6年目に突入しました。大学生活も残り1年をきり、大学生活6年間は長いようであつという間だったと感じています。就職活動も終え、卒業後は地元の病院で病院薬剤師として働くことになりました。大学入学時から病院で働きたいと思っていたので、無事に就職でき、大変うれしく思っています。

そんな私にとって、5年次の病院・薬局実務実習は大変意義深い実習となりました。病院実習、薬局実習ともに多くの薬剤師の方や他の医療従事者の方と関わる機会があり、現場で働く

方々の思いや考えを直接聞くことができたのは、大変有難い機会だったと思います。また、患者様に対して服薬指導を数多く行えたことも大変貴重な経験でした。同じ病気をもち患者様でも使用している薬剤やその薬剤を服用するタイミングが異なることが多くありました。そこには、病態の重症度はもちろん、生活のスタイルの違いや性格の違い等、病気だけを見ているとわからない違いも影響していることがわかり、薬剤師として病気と薬という単純な繋がり以外にも様々な視点から患者

大嶽 瞳

(薬学部6年)

様の治療に携わっていく必要があると感じ、薬剤師の仕事の幅の広さを実感しました。また、仕事の幅が広い中でも、分野に応じた薬学の専門性が求められてきていることも実感し、就職後には専門薬剤師の資格も取得していくべきだと考えています。

22週間と長い実習でしたが、実務実習を通して自分の将来を見つめ直すことができました。残り少ない学生生活を悔いなく過ごすためにも、卒業研究や薬剤師国家試験に懸命に取り組み、6年間の大学生活の集大成としたいと思います。



研究室の同期と共に 一番左が本人

博士後期課程を通じて

私は3年次のコース振り分けで研究の道へ進みたいと考え、4年制コースを選択しました。昨年度博士前期課程を修了し、今年度から博士後期課程に進学しました。私は有機合成化学を専門としています。医薬品や農薬など有機機能分子の多くは多様な構造を持つ有機化合物であるため有機合成化学は分子レベルでの「ものづくり」といえます。私はその中でも新規触媒の開発

に取り組んできました。昨年度、これまでの成果を論文として発表しました。この結果は学会で発表し、賞を頂くなど国内外で高く評価していただき満足のいくものとなっています。しかし、この論文をまとめていく過程においては共同実験者や先生方の力が大きいと感じ、ひとりの研究者としてまだまだ未熟であると強く感じました。博士後期課程においては人一倍実験し、一つでも多くの論文を出すことも大事です。しかし、その過程を私はより大事にしていきたいと考えています。つまり、先行研究から情報を集め、仮説を立て、検証し、論文としてまとめていく過程を自分を中心となって進めていけるように成長したいと考えています。そのためには日々学術書籍や論文等で勉強

丹羽 智紀

(博士課程)

に励むことは勿論のこと、学会やセミナーへの積極的な参加、異分野の研究者との交流を深め視野を広げることも大事であると思います。そして、薬学に携わる者として一つの学問にとらわれることなく物理化学、分子生物学、薬理学など広く関心を持ち研究に取り組み、卒業時には自分の研究に自信を持てるように日々の努力を続けていきたいと思っています。



研究室の同期メンバーと 一番左が本人

静薬微生物学教室開設六十周年記念同門会 開催のご案内

静岡薬科大学 微生物学教室
静岡県立大学薬学部 微生物学教室
免疫微生物学教室

昭和33年静岡薬科大学に微生物学教室（現在、免疫微生物学分野）が開設されて以来、本年で六十周年にあたります。そこで、研究室の開設六十周年を記念し、様々な分野でご活躍の諸先輩・卒業生の交流の機会として、同門会を下記の通り開催致します。また静岡県立大学名誉教授、柳原保武先生に御講演いただきます。万障お繰り合わせの上ご参加いただけますようご案内申し上げます。

記

日 時：平成30年10月27日（土）
15時30分より 講演会受付（同門会受付も兼ねます）
16時より **柳原保武先生講演会**（参加費無料）

「梅毒から垣間見た医学史の断片的側面」

柳原先生の講演会につきましては、同門会以外の方でもご参加いただけます。
是非、ご参加下さい。

17時30分より 同門会受付
18時より 同門会

会 場：静岡グランドホテル中島屋（TEL:054-253-1151）
住 所：静岡市葵区紺屋町3-10（静岡駅北口、徒歩5分）
参加費：講演会のみ 無料
同門会 一万円（当日会場受付でお支払い下さい）

すでに案内状はお手元に届いていることと存じますが、転居先不明等により届いていない場合もございます。その場合はお手数ですが、静薬微生物学教室同門会事務局担当までご連絡下さい。尚、準備の都合上、平成30年10月13日までにご連絡いただければ幸いです。

尚、参加申し込みがお済みでない方で、ご参加を希望される場合には、返信葉書をご投函いただくか、事務局までご連絡下さい。

静薬微生物学教室同門会事務局 担当 黒羽子孝太
メール：kurohane@u-shizuoka-ken.ac.jp
TEL：054-264-5710、FAX：054-264-5715

大学院学位論文（平成29年度）

■大学院薬食生命科学総合学府 博士課程 薬科学専攻 秋

氏 名	所属研究室	論文題目（和文）
太田 祐也	医薬品創製化学	キラル有機酸触媒を用いた炭素－炭素結合形成反応：不斉アリル化とaza-Friedel-Crafts反応
佐々木 司	生体機能分子分析学	イオン性化合物の保持予測に基づく超高性能逆相液体クロマトグラフィー移動相最適化手法の確立
長坂 洋祐	医薬品製造化学	ムスカリン受容体拮抗作用を有するTAN1251Cの全合成
近藤 仙巳	創剤工学	外部滑沢法がフィルムコーティング層の接着に与える影響の評価

■大学院薬学研究科 博士課程 製薬学専攻 秋

氏 名	所属研究室	論文題目（和文）
岩本 一徳	創薬探索センター	抗悪性腫瘍薬ベンダムスチンによるSTAT3阻害作用

■大学院薬食生命科学総合学府 博士課程 薬科学専攻

氏 名	所属研究室	論文題目（和文）
岡田 裕介	創薬探索センター	蛍光タンパク質タグを用いた新規細胞内STAT3ホモ二量体化解析方法の開発
永井 美香	衛生分子毒性学	創薬への活用を指向した薬物代謝酵素誘導の <i>in silico</i> 予測モデルの構築に関する研究
芳野 裕行	創剤工学	Quality by Design アプローチを適用したフィルムコーティングプロセスのスケールアップ論の確立
安室 修	実践薬学	塩基性肺がん分子標的治療薬と胃酸分泌抑制薬との薬物相互作用とその臨床的意義
大塚 智子	創剤工学	統計学的手法を用いた造粒工程における重要中間品質特性の管理と最終製品の重要品質特性への影響評価
椎野 甲斐	創剤工学	口腔内崩壊錠の適用を目指した溶融吸着造粒による放出制御微粒子の設計
井出 貴文	医薬品創製化学	水素原子移動を介したベンジル位Csp ³ -H官能基化反応の開発
石田 裕丈	薬理学	皮膚血流障害を標的とした神経障害性疼痛緩和に関する生理学的研究
中垣 史哲	実践薬学	トラニラスト含有グミ製剤の服用性に関する研究

■大学院薬食生命科学総合学府 博士課程 薬食生命科学専攻

氏 名	所属研究室	論文題目（和文）
鈴木 寛貴	薬物動態学	微粒子設計技術を用いたシクロスポリン A の体内動態制御
湖城 吉紀	薬物動態学	Self-micellizing solid dispersion 技術を応用した難水溶性薬物の生物薬剤学的特性改善

■大学院薬食生命科学総合学府 博士課程 薬学専攻

氏 名	所属研究室	論文題目（和文）
岡本 彩香	医薬生命化学	効率的なsiRNA送達システムの開発を目的とした機能性脂質ナノ粒子の設計
長尾 芳大	医薬品創製化学	非対称化型不斉プロモ環化反応：医薬品合成と反応機構解析

本部だより

静薬学友会平成29年度第3回理事会報告

日時…平成29年10月7日(土) 17:30～19:30

場所…静岡県立大学 はばたき棟 3階 特別会議室

出席者…横倉輝男、仲谷博明、大石悦子、高橋千恵子、鈴木隆、植松正吾、安倍道治、岩崎年史、若林敬二、杉井邦好、賀川義之、池田雅彦、大木明代、渡邊学、黒羽子孝太、伊藤由彦(敬称略)

事務局…鈴木敬子、鈴木いずみ

欠席者…木苗直秀、北川俊朗、涌澤伸哉、武田厚司、井口和明、内田信也、関本征史、高橋忠伸、清水広介、河本光宏(敬称略)

議題…

1. 学友会の法人化について

平成29年11月11日に臨時総会を行い、決定する。

各支部の扱いについては、任意団体とし、支部への援助についても極力スムーズに行えるよう検討する。税法上の問題が無いよう処理をする。

法人化に伴う定款の変更について、以下の検討を行う。

第1章、第2章、第4章、第6章、第10章は変更なし。

第3章…第7条会費の返還については「既納の会費は特段の理由がない限り返還しない」とする。

第5章…第20条、総会等に関する委任状の件を明文化する。

第21条2項、「理事及び監事の解任」とする。

第11章…広告の募集について

第12章…委員会を整理し、財務委員会などの設置を検討。支部を定款で定めるなど。

第14章…2項は規則に記載があるので重複を避けるため削除する。

第16章…規則を定める(事務取扱規定)その他、個人情報保護規定は別枠で定める。

2. 平成29年度薬学生涯研修講座について

再生医療、モバイルファーマシー、診療報酬の改定をテーマとする。会場はレ

イアアップ御幸町ビルCSA会議室、平成30年2月25日(日)を予定している。

3. 静薬学友会報85号について

特集記事は「次の100年に向けて」とした。ホームページによるPDF版の配布は法人化が確定してから行う予定。

静薬学友会平成29年度第4回理事会報告

日時…平成30年1月20日(土) 17:30～20:00

場所…中島屋グランドホテル 日本料理 四季

出席者…横倉輝男、大石悦子、高橋千恵子、植松正吾、安倍道治、岩崎年史、武田厚司、杉井邦好、賀川義之、黒羽子孝太、関本征史、渡邊学、清水広介、伊藤由彦、木苗直秀(特別顧問)、仲谷博明(関東支部長)、河本光宏(関西支部長)、鈴木いずみ(事務局)、鈴木敬子(事務局)

欠席者…鈴木隆、若林敬二、北川俊朗、涌澤伸哉、井口和明、池田雅彦、大木明代、内田信也、高橋忠伸、大石稔、大村洋一(順不同、敬称略)

議題…

1. 新法人役員、代議員の選考規定について

別紙資料①に従い、安倍理事から説明があり、各支部の代議員の割り当てが提案された。代議員選考は、(後日、本理事会での話し合いを基に、条件3の割り当て数37名(うち学生会員7名)にて選考を行うことで決定した。)

2. 一般社団法人静薬学友会定時社員総会(仮)について

平成30年5月20日(日)の13時から、ザバンケット竜宮にて行われる。第1回の社員総会になる。

3. その他

・支部会について

四国支部(報告)

昨年の11月26日に四国支部会に本部より関本理事が参加した。新しい会員の参加もあり、製薬会社の方が多く来られた。

東海支部(報告)

本部より大石副会長が参加した。30名の参加があり、他大学からの出席者があった。来年度より三上栄一支部長から松崎雅英支部長(愛知県がんセン

ター)に交代となる。

一般社団法人静薬学友会平成30年度第1回理事会報告

日時…平成30年4月14日(土) 17:30～20:00

場所…静岡県立大学 はばたき棟3階 特別会議室

出席者…横倉輝男、木苗直秀、植松正吾、安倍道治、岩崎年史、木下俊也、武田厚

司、鈴木隆、高橋千恵子、杉井邦好、賀川義之、池田雅彦、大木明代、内田信也、黒羽子孝太、関本征史、伊藤由彦、仲谷博明、河本光宏(敬称略)

欠席者…大石悦子、若林敬二、渡邊学、清水広介(敬称略)

事務局…鈴木いずみ、望月めぐみ

1. 一般社団法人としての認可について

横倉会長より、下記の報告があった。

・4月2日付で一般社団法人としての認可が下りたこと(法人番号は508000505007078)

・設立時理事は8名「横倉(代表理事)、大石、木苗、安倍、岩崎、鈴木、高橋、賀川」

監事は2名(伊藤、若林)

・法人化に伴い、静岡県立大学薬学部同窓会(静薬学友会)を解散する。

・財産についてはそのまま一般社団法人に移行する。

2. 役員・代議員の選考について

安倍理事より以下のとおり、選考規定の経過説明があった。

・1月20日の理事会で論点整理を行った後、押田司法書士の意見、会長の意見を踏まえ、以下のように変更した。

○代議員選考規定

第2条…学生会員を除き、30名とする。また、大学院博士課程で1名、各学年で1名選出し、大学枠を計7名と変更する。

質疑応答の結果、以下のように決議された。

・役員、代議員とも平成30年4月16日の週早々に告示を行い、平成30年4月末日までを公募期間とする。

・地区の所属先は住所または職場住所どちらも選択可能とし、本人の申請で所属支部を決めることとする。

・名簿システムの更新時に、自分で所属する支部を選べるよう変更する。

3. 各種委員会について

横倉会長より会報委員会は黒羽子先生、生涯研修は若林先生、予算委員会は伊藤先生、名簿委員会は浅井先生にお願いしたいとの提案があった。また、法人化したことで、新規事業を行う際、大学側と打ちあわせの必要があるので教授会との懇談会の設置が提案された。学友会賞は、新たに委員会を立ち上げるかまたはワーキンググループを検討する。新しい事業、委員会の設置について、次回の理事会までの検討課題とする旨の提案があり、決議された。

4. 平成29年度の事業報告

・今年度の理事会は平成29年4月15日、7月8日、10月7日、平成30年1月20日に行われた。主な議題は法人化に関すること、他に生涯研修講座に関すること、細則の一部変更であった。

・総会は平成29年5月14日にレイアップ御幸町ビルにて行われた。その際の講演会は学友会賞の方々によって行われた。

・平成29年11月11日に臨時総会および、一般社団法人静薬学友会の設立総会も行われた。

・県立大学の事業への参加として、100周年記念事業への協力、岩崎先生の肖像レリーフの除幕式、学友会入会式、入学式への出席、就職説明会への参加、静岡県立大学30周年記念同窓会への出席、生涯研修講座の開催を行った。

・支部活動としては長野、関西(奈良)、四国、東海、北陸支部会が行われた。

・会報85号が発行された。

*会計収支報告

伊藤理事より平成29年度の収支報告が行われた。支出は、システム更新のために予算を計上していたが、スケジュールの都合上行えず、ホームページ更新のみ行ったため予算が残った。名簿の管理費として50万円支出があった。新法人となつてから改めてシステムの更新を行う。次年度繰越金は2,470,991円となる。

5. 平成30年度事業計画

理事会開催…年4回予定。総会は平成30年5月20日、バンケット竜宮で予定している。

県大行事への参加は例年通り行う。就職説明会は平成30年4月21日に予定。生涯研修講座はこれから計画する。卒業式、成績優秀者、岩崎賞への参加、謝恩会、退官記念行事への参加が予定されている。

支部会は、地区同窓会という名前になる。平成30年度は関西地区同窓会が予定されている。

6. 社団法人化に伴う諸事業について

新規事業の決め方について議論された。今までは4月の理事会で検討し、総会で承認を受けていたが、これからは理事会ですべて決定できる。収益事業の実施、寄附金を募ることも可能になる。予算の半分は学生会員の入会金で成り立っている、学生に還付できる新規事業を検討することが提案された。

・理事選考について

役員選考の規定に基づいて、平成30年5月20日の定時総会時に選挙管理委員会を設けて理事の選挙を行う。

関東地区の選挙管理委員は代議員の多田義孝様、松浦大輔様とする。

静岡地区の選挙管理委員は代議員の伊藤めぐみ様、田中喜久夫様とする。

一般社団法人静薬学友会第一回定時総会報告

日時…平成30年5月20日(日) 午後1時～2時30分
会場…ザ・バンケット竜宮 3階 朝日の間
〒420-0858 静岡市葵区伝馬町10-5 マイホテル竜宮内

議題…

1. 平成29年度事業報告
2. 平成29年度会計報告
3. 理事の選考について(審議)
4. 一般社団法人静薬学友会平成30年度事業計画(報告)
5. 一般社団法人静薬学友会平成30年度予算(報告)
6. その他

出席者(敬称略、50音順)…

代議員…安部友涼、五十嵐千乃、池田潔、伊藤めぐみ、井上泰秀、大木明代、岡田宜彦、岡本彩香、笠井智代、勝山善彦、河本光宏、齋藤和弘、佐藤泰士、清水広介、関本征史、多田義孝、田中喜久夫、中村洸友、中村和重、中山大輔、丹羽智紀、深澤由紀子、藤本司、松浦大輔、松崎雅英、松田通明、三上栄一、水島教之、宮国大介、村松郁延、渡邊学、綿野尚幸

欠席代議員…石原由美、内田信也、大嶽瞳、高橋忠伸、本島玲子

役員…監事 伊藤由彦、若林敬二

理事 横倉輝男代表理事(会長)、安倍道治、岩崎年史、大石悦子、賀川義、木苗直秀、鈴木隆、高橋千恵子

欠席役員…なし

議事要旨…

横倉代表理事より、この度行われた静薬学友会の一般社団法人への移行についてその目的、移行過程における理事会での検討過程などの報告(設立年月日…平成30年4月2日、会社法人等番号…08001051007078)があった。

議題1. 平成29年度事業報告

横倉代表理事より、配布資料に基づき報告がなされ、了承された。

議題2. 平成29年度会計報告

伊藤由彦監事より、配布資料に基づき報告がなされ、了承された。

議題3. 理事の選考について

去る平成30年5月2日の静薬学友会理事会において選出された選挙管理委員4名(田中喜久夫、伊藤めぐみ、多田義孝、松浦大輔)により進行された。

代議員による理事候補者に対する投票の結果、投票数37名(うち欠席による議決権行使数5名、委任状0)であり、全候補者は、新理事に選任することが議決された。その結果、今後の一般社団法人静薬学友会の役員は設立時理事8名に加え、新たに選任された17名の理事(計25名)とすでに決定している監事2名により運営されることとなった。

新たに選任された理事は次の通り(敬称略、50音順)

秋山欣三、浅井知浩、池田雅彦、植松正吾、内田信也、大木明代、大澤勝一、木下俊也、黒羽子孝太、近藤隆、清水広介、杉井邦好、関本征史、武田厚司、仲谷博明、前田徹、渡邊学

議題4. 一般社団法人静薬学友会平成30年度事業計画

横倉会長より、配布資料に基づき説明が行われ、配布資料の内容で了承された。なお、地区同窓会の活動として、本年10月28日(日)に関東地区同窓会を、12月9日(日)に東海地区同窓会を行うとの追加発言があった。

議題5. 一般社団法人静薬学友会平成30年度予算

伊藤監事より、配布資料に基づき説明が行われ、支部費を地区費と改めること以外は配布資料の内容で了承された。

議題6. その他

①議長から今後の静薬学友会の活動について出席者の意見を聞いたところ、卒業生と在校生の交流を盛んにするためのイベント(ホームカミングデー)などの

開催を考えてはどうか、という意見があった。
②議長から以下の報告があった。

- ・同窓会の設立は静岡薬科大学設立の翌年（昭和29年）で、初代会長は宮道悦男学長、二代目会長は鶴飼貞二学長、3代目からは卒業生が会長になった。現在の会長は7代目、会員数は8000名を超えた。
- ・平成6年に事務局が開設された。現在の事務局員は3名（鈴木いずみ、望月めぐみ、鈴木敬子）である。
- ・昭和46年静岡薬科大学卒の近藤隆様から当会に多額（1億円）の寄付の申し出があった。今後その使途について近藤様のご希望に沿った形で学友会会員のために役立たせて頂くための方策をワーキンググループを作って検討を進める。
- ・支部会については今後も任意団体の地区同窓会として存続するが、その運営については今後検討する。

一般社団法人静薬学友会平成30年度第2回理事会報告

日時…平成30年7月14日（土） 15:00～17:00

場所…静岡県立大学 はばたき棟3階 特別会議室

出席者（理事16名）…横倉輝男、大石悦子、高橋千恵子、鈴木隆、植松正吾、安倍道治、岩崎年史、近藤隆、木下俊也、秋山欣三、大沢勝一、前田徹、渡邊学、黒羽子孝太、浅井知浩、清水広介（以上理事）、若林敬二（監事）、伊藤由彦（監事）、鈴木いずみ（事務局）、鈴木敬子（事務局）
欠席者（理事9名）…木苗直秀、仲谷博明、武田厚司、杉井邦好、賀川義之、池田雅彦、大木明代、内田信也、関本征史（以上理事） 順不同、敬称略

議題…

1. 会長（代表理事）の選任について

定款第33条により代表理事（会長）の選任を行い、全会一致で横倉理事が代表理事（会長）に就任することが承認された。

2. 副会長の選任と順位付けについて（定款第25条3項）

副会長として、優先順位第一に安倍理事、第二位に鈴木理事、第三位に高橋理事が推薦され、全会一致で承認された。副会長の担当業務として安倍理事は総務、渉外、定款関係を、鈴木理事には財務、大学窓口業務を、高橋理事には人事に関

する業務が任された。

3. 定款の変更について

定款第24条を改定し、議長および出席した理事2名が議事録に署名または記名押印する。

4. 平成30年事業計画および予算

平成30年5月20日の社員総会で事業計画および予算の承認が得られている。新規事業計画として、リレーフォーライフへの参加が検討された。静薬学友会として学生も含めて患者の視点に立って活動することが大事な事業になるとの意見があった。本年度は、静岡市薬剤師会のご協力をいただき、一緒に参加させていただくことになった。

5. 理事会各種委員会について

各委員会のリーダーとして会報委員会に黒羽子理事、生涯研修委員会に若林監事、財務委員会に伊藤監事、学友会賞委員会に鈴木理事、総務委員会に安倍理事が指名された。

6. 平成30年度薬学生涯研修講座について

企画案は、腸内フローラと健康、AI、IoTによる薬剤師業務の変革。

7. 近藤静薬奨学基金の設立について

近藤理事より学友会に対して高額な寄付をいただいた。具体的な活用方法は、検討チーム（安倍理事、岩崎理事、若林監事、賀川理事、鈴木隆理事、杉井理事、高橋理事、横倉会長）を立ち上げ検討する。

8. 地区同窓会開催のための運用ガイドについて

法人化後はこれまで行われていた支部総会を、地区同窓会として運用する。本部からの支援は、定款の会費等規定の第5条（地区同窓会）のとおりであり、運用ガイドに従って各地区で責任を持って同窓会を開催する。

平成29年度静岡県立大学薬学部同窓会会計収支報告書

単位:円

	費 目	29年度予算額	29年度決算額	備 考
収入の部	入 会 金	5,640,000	5,840,000	@40,000 x146名(学部生132名、大学院生14名)
	維 持 会 費	3,500,000	3,428,000	終身会費@50,000 x16名 10年会費@20,000 x7名含む
	利 息	100	34	
	雑 収 入	400,000	283,000	
	繰 越 金	1,567,743	1,567,743	
	合 計	11,107,843	11,118,777	
支出の部	事 業 費	7,400,000	6,365,760	
	広 報 名 簿 事 業 費	1,500,000	715,522	名簿管理システム・ホームページ 年間利用料、パンフレット作成
	会 報 発 行 費	1,400,000	1,344,226	会報85号
	退 官 記 念 事 業 費	200,000	105,000	奥直人教授、板井茂教授
	同 期 会 援 助 費	200,000	100,000	S42卒同期会
	大 学 行 事 援 助 費	350,000	625,900	新入生、卒業生記念品、成績優秀者賞、岩崎賞
	生 涯 学 習 費	400,000	212,201	薬学生涯研修講座開催(大学からの助成あり)
	就 職 説 明 会 参 加 費	100,000	65,380	
	表 彰 費	0	0	
	慶 弔 費	50,000	19,794	
	渉 外 費	100,000	235,000	
	通 信 費	100,000	89,451	
	事 務 費	2,600,000	2,502,395	
	振 込 手 数 料	400,000	350,891	
	会 議 費	1,100,000	1,598,894	
	総 会 費	600,000	907,792	
	理 事 会 費	400,000	511,980	
	小 委 員 会 費	100,000	179,122	
	支 部 費	950,000	683,132	
	支 部 活 動 費	600,000	527,536	支部総会:長野県、東海、関西(奈良県)、四国、北陸
	支 部 通 信 費	50,000	0	
	支 部 会 出 張 費	300,000	155,596	
	事 業 積 立 金	1,000,000	0	
	特 別 会 計 積 立 金	1,000,000	0	
	予 備 費	657,843	0	
	次 年 度 繰 越 金		2,470,991	
	合 計	11,107,843	11,118,777	
収 支 差 額		0	0	

以上の通り相違ありません

平成30年4月25日

会計担当理事 伊藤 由彦



会計担当理事 池田 雅彦



監 事 大村 洋一



監 事 大石 稔



平成29年度静岡県立大学薬学部同窓会特別会計
(事業所設立準備金)
収支報告書

単位:円

	摘 要	29年度決算額	備 考
収入の部	前年度繰越金	3,181,383	
	静岡銀行定期預金利息	255	
	合 計	3,181,638	
支出の部	次年度繰越金	3,181,638	
	合 計	3,181,638	
	収 支 差 額	0	

以上の通り相違ありません

平成30年3月31日

会計担当理事 伊藤 由彦



会計担当理事 池田 雅彦



監 事 大村 洋一



監 事 大石 稔



平成29年度静薬学友会災害支援基金収支報告書

単位:円

	摘 要	29年度決算額	備 考
収入の部	前年度繰越金	637,291	
	預金利息	6	
	合 計	637,297	
支出の部	次年度繰越金	637,297	
	合 計	637,297	

以上の通り相違ありません

平成30年3月31日

会計担当理事 伊藤 由彦



会計担当理事 池田 雅彦



監 事 大村 洋一



監 事 大石 稔



平成30年度一般社団法人静薬学友会 予算書

単位:円

	費 目	30 年 度 予 算 額	備 考
収入の部	入 会 金	5,640,000	@40,000×141名
	維 持 会 費	3,500,000	
	利 息	100	
	雑 収 入	300,000	
	繰 越 金	5,846,082	(暫定値)
	合 計	15,286,182	
支出の部	事 業 費	7,250,000	
	広 報 名 簿 事 業 費	1,500,000	名簿管理システム・ホームページ年間利用料、システム更新料
	会 報 発 行 費	1,400,000	会報86号
	退 官 記 念 事 業 費	200,000	
	同 期 会 援 助 費	200,000	
	大 学 行 事 援 助 費	300,000	記念品代(新入生・卒業生)、成績優秀者、岩崎賞
	生 涯 学 習 費	400,000	薬学生涯研修講座
	就 職 説 明 会 参 加 費	100,000	
	表 彰 費	0	
	慶 弔 費	50,000	
	渉 外 費	100,000	
	通 信 費	100,000	
	事 務 費	2,500,000	
	振 込 手 数 料	400,000	
	会 議 費	1,700,000	
	総 会 費	1,200,000	代議員旅費¥523,810(概算)
	理 事 会 費	400,000	
	小 委 員 会 費	100,000	
	支 部 費	550,000	
	支 部 活 動 費	300,000	
	支 部 通 信 費	50,000	
	支 部 会 出 張 費	200,000	本部からの出席旅費・宿泊費
	予 備 費	5,786,182	
	合 計	15,286,182	

*会長は費目間の流用を認めることができる

静薬学友会ホームページをご活用ください

静薬学友会ではホームページを通して会員の皆様にさまざまなご案内をしております。
会員の皆様、ぜひホームページをご覧ください、ご活用ください。



静薬学友会ホームページ <http://shizuyaku.jp>

☆掲載記事☆

薬学講座のご案内、同期会のお知らせ、求人情報、静薬学友会の活動、母校の活動などをご案内しています。

☆マイページ☆ 【会員専用ページ】ログインには会員ID／パスワードが必要です。

1. 静薬学友会に登録しているご自身の情報を確認、修正できます。
2. 同窓生の連絡先などを知ることができます。
3. 年会費の納入がクレジット払いで行えます。
4. 静薬学友会主催（または共催）の薬学講演会や各種会合への参加登録が簡単に行えます。

※掲載してほしい記事がある、自らコラムを書きたい、求人情報を載せたい、そういった方は事務局までお問い合わせください。

※メールアドレスをお持ちの方はぜひアドレスを静薬学友会にご登録ください。同窓会、同門会、支部会、講演会等各種情報のご案内をお送りいたします。

問い合わせ先 ▶▶ 一般社団法人静薬学友会

〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1 静岡県立大学薬学部内
TEL 054-265-8763 FAX 054-265-8769

(10:00～15:00以外は留守番電話での対応とさせていただきます)

Eメール shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp <http://shizuyaku.jp>

平成30年度 寄付者芳名 (平成30年7月末日現在)

寄附金額 50,000,000円

ご納入日 平成30年5月10日

静岡薬科大学 昭和46年卒

近 藤 隆 様

平成29年度 会費納入者一覧 (卒業年順、平成30年7月末日現在) 敬称略

◆終身会費 50,000円

No.	学校種別	卒業年 修了年	姓 名
42	静岡県立大学	平成24年	坪 井 綾 香
43	静岡県立大学	平成24年	矢 吹 晴一郎
44	静岡県立大学	平成25年	大 滝 俊 也
45	静岡県立大学	平成27年	小山内 崇 人

◆10年会費 20,000円

※括弧内は有効終了年度

No.	学校種別	卒業年 修了年	姓 名
1	静岡薬学専門学校	昭和29年	小 野 郁 夫 (2025)
2	静岡薬学専門学校	昭和29年	増 田 令 子 (2025)
3	静岡薬科大学	昭和32年	杉 浦 暢 (2024)
4	静岡薬科大学	昭和32年	山 村 美智彦 (2023)
5	静岡薬科大学	昭和34年	酒 井 光 江 (2022)
6	静岡薬科大学	昭和35年	星 由利子 (2026)
7	静岡薬科大学	昭和37年	鈴木 智 彦 (2022)
8	静岡薬科大学	昭和41年	中 村 好 志 (2023)
9	静岡薬科大学	昭和46年	安 倍 道 治 (2022)
10	静岡薬科大学	昭和48年	伊 藤 久 男 (2023)
11	静岡薬科大学	昭和50年	川 口 順 子 (2022)
12	静岡薬科大学	昭和50年	望 月 雅 史 (2023)
13	静岡薬科大学	昭和51年	涌 澤 伸 哉 (2025)
14	静岡薬科大学	昭和52年	土 屋 益 美 (2023)
15	静岡薬科大学	昭和53年	木 下 俊 也 (2027)
16	静岡薬科大学	昭和54年	鈴木 隆 (2027)
17	静岡薬科大学	昭和55年	小 林 才世子 (2024)
18	静岡薬科大学	昭和56年	高 木 由 紀 (2024)
19	静岡薬科大学	昭和56年	鈴木 直 人 (2023)
20	静岡薬科大学	昭和59年	堺 谷 研 嗣 (2025)
21	静岡薬科大学	昭和60年	伊 藤 治 美 (2026)
22	静岡薬科大学	昭和63年	大 城 雅 章 (2024)
23	静岡薬科大学	昭和63年	伊 吹 裕 子 (2025)
24	静岡県立大学	平成3年	川 嶋 実 (2023)
25	静岡県立大学	平成7年	横 山 由 斉 (2023)
26	静岡県立大学	平成12年	石 川 裕 子 (2023)
27	静岡県立大学	平成15年	中 村 ほなみ (2026)
28	静岡県立大学	平成19年	根 建 悠 希 (2025)
29	静岡県立大学	平成19年	総 崎 克 哉 (2022)
30	静岡県立大学	平成20年	藤 原 理 恵 (2026)
31	静岡県立大学	平成20年	佐 藤 秀 行 (2025)

No.	学校種別	卒業年 修了年	姓 名
1	静岡薬科大学	昭和40年	横 倉 輝 男
2	静岡薬科大学	昭和43年	山 本 武 司
3	静岡薬科大学	昭和46年	若 林 敬 二
4	静岡薬科大学	昭和48年	大 村 洋 一
5	静岡薬科大学	昭和48年	大 井 利 夫
6	静岡薬科大学	昭和49年	三 上 栄 一
7	静岡薬科大学	昭和51年	海 野 けい子
8	静岡薬科大学	昭和51年	和 田 まり子
9	静岡薬科大学	昭和52年	柳 原 幸 子
10	静岡薬科大学	昭和55年	後 藤 美重子
11	静岡薬科大学	昭和55年	後 藤 利 宏
12	静岡薬科大学	昭和55年	高 橋 俊 博
13	静岡薬科大学	昭和57年	門 脇 真
14	静岡薬科大学	昭和58年	間 中 友季子
15	静岡薬科大学	昭和58年	高 橋 秀 明
16	静岡薬科大学	昭和58年	賀 川 義 之
17	静岡薬科大学	昭和58年	南 部 佳代子
18	静岡薬科大学	昭和58年	鹿 野 昇
19	静岡薬科大学	昭和59年	海 野 敬 乃
20	静岡薬科大学	昭和60年	清 水 宣 秀
21	静岡薬科大学	昭和62年	大 木 明 代
22	静岡県立大学	昭和62年	児 玉 直 美
23	静岡県立大学	平成4年	中 村 和 重
24	静岡県立大学	平成6年	飯 田 海 保
25	静岡県立大学	平成8年	黒羽子 孝 太
26	静岡県立大学	平成8年	川 合 真由美
27	静岡県立大学	平成8年	佐久間 文 誉
28	静岡県立大学	平成9年	内 田 恵 子
29	静岡県立大学	平成9年	佐 藤 扶由子
30	静岡県立大学	平成9年	丹 治 麻 希
31	静岡県立大学	平成9年	佐久間 宏 行
32	静岡県立大学	平成10年	野 寄 秀 明
33	静岡県立大学	平成12年	長 瀬 邦 彦
34	静岡県立大学	平成12年	板 持 雅 恵
35	静岡県立大学	平成12年	関 口 祐 史
36	静岡県立大学修士課程	平成13年	勝 又 孝
37	静岡県立大学	平成15年	高 久 修 司
38	静岡県立大学	平成16年	永 吉 旭 土
39	静岡県立大学修士課程	平成16年	北 尾 有樹子
40	静岡県立大学	平成19年	鶴 田 修
41	静岡県立大学	平成19年	和久田 浩 一

No.	卒業年・修了年	姓 名
97	昭和33年	太 田 保
98	昭和33年	縣 貴 江
99	昭和33年	小 西 陞 子
100	昭和33年	片 山 克 彦
101	昭和33年	水 野 啓 子
102	昭和33年	小 林 喜久子
103	昭和33年	小 林 猛 夫
104	昭和33年	近 藤 道 男
105	昭和33年	野 呂 和 子
106	昭和33年	塩 谷 勝 夫
107	昭和33年	伊 庭 治 子
108	昭和33年	鈴 木 健 介
109	昭和33年	中 島 信 子
110	昭和33年	園 原 寛 幸
111	昭和33年	鈴 木 鈴 子
112	昭和33年	田 村 重 継
113	昭和33年	谷 口 年 男
114	昭和33年	風里谷 歌 子
115	昭和33年	大 坪 千恵子
116	昭和33年	中 村 てる子
117	昭和33年	三 枝 好 乃
118	昭和33年	前 田 祐 子
119	昭和33年	東 博 幸
120	昭和33年	福 地 康 浩
121	昭和33年	辻 本 美 保
122	昭和33年	石 田 佳 子
123	昭和33年	村 井 勉
124	昭和33年	村 井 晶 子
125	昭和33年	中 村 迪 子
126	昭和33年	吉 田 佳 子
127	昭和33年	堀 田 好
128	昭和34年	富 田 弥 生
129	昭和34年	逸 見 絹 代
130	昭和34年	安 藤 圭 子
131	昭和34年	小野田 従 子
132	昭和34年	飯 島 千穂子
133	昭和34年	太 田 英 子
134	昭和34年	石 和 誠
135	昭和34年	稲 岡 万 里
136	昭和34年	飯 田 真 弓
137	昭和34年	伏 見 喜代子
138	昭和34年	村 上 圭 子
139	昭和34年	大 石 有 二
140	昭和34年	大 村 二三夫
141	昭和34年	影 山 静 夫
142	昭和34年	山 添 節 子
143	昭和34年	神 谷 大三郎
144	昭和34年	伊 藤 典 子
145	昭和34年	長 倉 久美子
146	昭和34年	柴 田 幸 子
147	昭和34年	田 中 幹 晃
148	昭和34年	神 田 礼 子
149	昭和34年	遠 藤 瑞 子
150	昭和34年	池 田 啓 子
151	昭和34年	松 下 倭文夫

No.	卒業年・修了年	姓 名
46	昭和29年	寺 井 和 子
47	昭和29年	村 上 敏 子
48	昭和29年	鈴 木 安喜子
49	昭和29年	平 野 信 三
50	昭和29年	平 林 和 子

静岡薬科大学

No.	卒業年・修了年	姓 名
51	昭和29年	西 川 佳 代
52	昭和29年	淵 野 恒 雄
53	昭和29年	松 永 公 良
54	昭和29年	山 下 友 子
55	昭和32年	青 山 健 一
56	昭和32年	斎 藤 弘
57	昭和32年	石 川 哲 朗
58	昭和32年	石 和 信 弘
59	昭和32年	稲 名 一 枝
60	昭和32年	内 田 貞 夫
61	昭和32年	梅 村 隆 久
62	昭和32年	増 井 幸 子
63	昭和32年	増 井 俊 夫
64	昭和32年	渡 辺 規 子
65	昭和32年	林 貞 子
66	昭和32年	太 田 斐 子
67	昭和32年	中 山 須恵子
68	昭和32年	森 谷 甫 美
69	昭和32年	開 堯 邦 男
70	昭和32年	辰 己 好 美
71	昭和32年	河 西 健
72	昭和32年	中 谷 貴美子
73	昭和32年	増 田 恵美子
74	昭和32年	鳥 山 明 子
75	昭和32年	佐 藤 秀 一
76	昭和32年	酒 見 圭 子
77	昭和32年	鈴 木 康 之
78	昭和32年	野 村 由紀子
79	昭和32年	松 岡 淑 子
80	昭和32年	泉 安 子
81	昭和32年	土 屋 一 朗
82	昭和32年	丸 山 晶
83	昭和32年	佐 伯 ト ミ
84	昭和32年	秋 山 矩 子
85	昭和32年	三 谷 倫 一
86	昭和32年	増 井 千恵子
87	昭和32年	山 内 丈
88	昭和32年	依 光 悦 子
89	昭和33年	長 崎 宏
90	昭和33年	青 木 富 佐
91	昭和33年	青 山 仁
92	昭和33年	杉 本 多喜子
93	昭和33年	右 近 洋 英
94	昭和33年	小 原 博 光
95	昭和33年	大 桑 滋 之
96	昭和33年	太 田 善 三

◆年会費 2,000円

静岡女子薬学校

No.	卒業年・修了年	姓 名
1	昭和20年	荻 原 末美恵
2	昭和20年	麻 谷 昌 子
3	昭和20年	佐 古 長 子
4	昭和20年	平 尾 定 子
5	昭和20年	三 村 治 子
6	昭和21年	児 玉 光 子
7	昭和21年	櫻 井 菊 子

静岡女子薬学専門学校

No.	卒業年・修了年	姓 名
8	昭和23年	山 川 久 代
9	昭和23年	木 下 静 代
10	昭和23年	奥 田 政 子
11	昭和24年	久保田 田鶴子
12	昭和24年	三 上 郁 美
13	昭和24年	米 澤 宜 子
14	昭和24年	土 村 保 子
15	昭和24年	中 村 光 子
16	昭和24年	崎 山 邦 子
17	昭和24年	中 村 あけみ
18	昭和24年	森 光 子
19	昭和25年	武 藤 幸 子
20	昭和25年	安 間 俊 子
21	昭和25年	平 野 祥 子
22	昭和25年	川 村 幸 子
23	昭和25年	木 口 隆 子
24	昭和25年	渡 辺 喜久代
25	昭和25年	西 村 トシエ
26	昭和25年	望 月 摩利子

静岡薬学専門学校

No.	卒業年・修了年	姓 名
27	昭和26年	小 林 仁 美
28	昭和26年	佐 藤 伊佐子
29	昭和26年	栗 山 理 子
30	昭和26年	三 沢 真 弓
31	昭和26年	杉 浦 昌 子
32	昭和28年	秋 山 薫 子
33	昭和28年	室 伏 すみ子
34	昭和28年	上 塚 敬 子
35	昭和28年	細 田 興 子
36	昭和28年	山 本 早 苗
37	昭和28年	原 田 雄 吉
38	昭和28年	山 田 和 子
39	昭和29年	正 木 ミツエ
40	昭和29年	大 西 安 子
41	昭和29年	織 田 武
42	昭和29年	中 林 さち子
43	昭和29年	戸 田 英 子
44	昭和29年	杉 本 敬 一
45	昭和29年	瀬 尾 弘 子

No.	卒業年・修了年	姓 名
262	昭和38年	袴 田 康 允
263	昭和38年	古 畑 喜 博
264	昭和38年	村 井 一 博
265	昭和38年	吉 田 信 正
266	昭和39年	八 鍬 恭 子
267	昭和39年	石 原 庸 男
268	昭和39年	犬 伏 式 生
269	昭和39年	柿 谷 芳 宏
270	昭和39年	角 重 信
271	昭和39年	河原畑 二 郎
272	昭和39年	小 坂 恭 一
273	昭和39年	左 納 通 正
274	昭和39年	佐 野 勝
275	昭和39年	須 藤 和 勇
276	昭和39年	鈴 木 次 郎
277	昭和39年	鈴 木 康 夫
278	昭和39年	飯 塚 優規子
279	昭和39年	小 沢 敬 子
280	昭和39年	田 中 源 治
281	昭和39年	田 中 洋 子
282	昭和39年	竹 上 英 男
283	昭和39年	竹 野 精 治
284	昭和39年	辻 邦 郎
285	昭和39年	豊 田 満
286	昭和39年	名 倉 猛 夫
287	昭和39年	中 村 宏 子
288	昭和39年	西 澤 伸 行
289	昭和39年	石 原 さち子
290	昭和39年	林 英 文
291	昭和39年	犬 伏 三千代
292	昭和39年	有 光 とし子
293	昭和39年	深 沢 彰
294	昭和39年	岩 本 浩 代
295	昭和39年	三 浦 勇 二
296	昭和39年	宮 本 正 紀
297	昭和39年	望 月 達 之
298	昭和39年	新 邦 夫
299	昭和39年	高 桑 幸 子
300	昭和40年	河 野 悦 子
301	昭和40年	足 立 一 彦
302	昭和40年	秋 山 喜 彦
303	昭和40年	池 田 正 章
304	昭和40年	石 原 廣 男
305	昭和40年	岩 村 晋
306	昭和40年	大 塚 坦 造
307	昭和40年	山 下 紘 子
308	昭和40年	山 添 悦 子
309	昭和40年	高 橋 圭 子
310	昭和40年	木 苗 直 秀
311	昭和40年	岸 野 文 治
312	昭和40年	志 村 洋 子
313	昭和40年	角 淑 子
314	昭和40年	黒 澤 秀 文
315	昭和40年	佐 合 武
316	昭和40年	山 口 正 代

No.	卒業年・修了年	姓 名
207	昭和36年	佐 藤 卓 也
208	昭和36年	佐 藤 美也子
209	昭和36年	鈴 木 勇 夫
210	昭和36年	中 村 阿 丈
211	昭和36年	大 長 孝 雄
212	昭和36年	中 川 豊 子
213	昭和36年	仲 道 述 夫
214	昭和36年	西 野 章
215	昭和36年	渡 辺 亜沙子
216	昭和36年	古 田 尚 平
217	昭和36年	松 永 純 一
218	昭和36年	山 崎 宏 子
219	昭和36年	山 下 敏 夫
220	昭和37年	千 葉 隆 子
221	昭和37年	川 合 穎 子
222	昭和37年	石 井 漱 一
223	昭和37年	賀 村 雅 子
224	昭和37年	河 村 信 弘
225	昭和37年	鈴 木 光 子
226	昭和37年	小 西 一 宏
227	昭和37年	亀 井 興
228	昭和37年	奥 田 允 子
229	昭和37年	大 長 美穂子
230	昭和37年	境 澤 貞 夫
231	昭和37年	白 井 千恵子
232	昭和37年	田 中 恒 夫
233	昭和37年	袴 田 和 子
234	昭和37年	平 良 武 男
235	昭和37年	吉 岡 は ま
236	昭和37年	笹 田 庸 子
237	昭和37年	工 藤 弘 子
238	昭和37年	佐 藤 朝 子
239	昭和37年	桑 原 伊玖子
240	昭和37年	松 岡 千恵子
241	昭和37年	平 松 朋 子
242	昭和38年	有 光 英 二
243	昭和38年	風 間 舜 介
244	昭和38年	河 合 善 夫
245	昭和38年	川 口 和 子
246	昭和38年	上 杉 史 代
247	昭和38年	佐 藤 武
248	昭和38年	佐 藤 寛 子
249	昭和38年	境 宏
250	昭和38年	志 村 孝
251	昭和38年	鈴 木 清
252	昭和38年	砂 本 勝
253	昭和38年	角 興 三
254	昭和38年	小 泉 恵 子
255	昭和38年	小 栗 瑠璃子
256	昭和38年	竹 津 秀 磨
257	昭和38年	寺 田 章 男
258	昭和38年	中 川 淳
259	昭和38年	野 口 英 世
260	昭和38年	野 未 一 茂
261	昭和38年	野 呂 忠 敬

No.	卒業年・修了年	姓 名
152	昭和34年	溝 口 し づ
153	昭和34年	村 上 博 達
154	昭和34年	矢 沢 光 子
155	昭和34年	大 嶽 英 子
156	昭和34年	山 本 昭 野
157	昭和34年	望 月 和 美
158	昭和34年	伊 藤 玲 子
159	昭和35年	鈴 木 千 枝
160	昭和35年	鈴 木 正 子
161	昭和35年	杉 山 豊 美
162	昭和35年	有 田 政 彦
163	昭和35年	山 田 とし子
164	昭和35年	久保田 浩 子
165	昭和35年	溝 口 謙 吾
166	昭和35年	宇 都 宗 長
167	昭和35年	後 藤 晴 代
168	昭和35年	中 嶋 稔
169	昭和35年	小 栗 信 彦
170	昭和35年	百 々 紗世子
171	昭和35年	小 林 弘 子
172	昭和35年	鈴 木 澄 雄
173	昭和35年	奥 村 太 一
174	昭和35年	小 川 高 子
175	昭和35年	金 子 治 郎
176	昭和35年	小 林 富二男
177	昭和35年	佐々木 良 子
178	昭和35年	篠 崎 文 秀
179	昭和35年	尾 崎 克 子
180	昭和35年	市 中 洋 子
181	昭和35年	宇 都 仁 子
182	昭和35年	中 村 哲 子
183	昭和35年	上 野 千枝子
184	昭和35年	鳥 居 暁
185	昭和35年	中 嶋 イチ子
186	昭和35年	鍋 谷 勤
187	昭和35年	谷 戸 恵 子
188	昭和35年	遠 藤 伸 江
189	昭和35年	増 井 ほとり
190	昭和35年	赤 羽 昌 江
191	昭和35年	松 永 義 明
192	昭和35年	坂 田 千恵子
193	昭和35年	宮 原 武 恒
194	昭和35年	林 正 康
195	昭和35年	金 子 暁 子
196	昭和35年	寺 田 姉 生
197	昭和36年	高 木 操
198	昭和36年	矢満田 怜 子
199	昭和36年	木 下 幸 子
200	昭和36年	岡 鐵 雄
201	昭和36年	大 塚 信 子
202	昭和36年	小 堤 公 子
203	昭和36年	金 井 修 躬
204	昭和36年	洪 谷 けい子
205	昭和36年	山 崎 雅 江
206	昭和36年	三 宅 匡 子

No.	卒業年・修了年	姓 名
427	昭和43年	永 野 博 正
428	昭和43年	谷 口 邦 子
429	昭和43年	長 岡 彰 子
430	昭和43年	梅 村 尚 子
431	昭和43年	美 崎 陽 子
432	昭和43年	深 沢 伸 之
433	昭和43年	藤 井 武 教
434	昭和43年	藤 原 伸 司
435	昭和43年	本 間 文 夫
436	昭和43年	丸 山 博 三
437	昭和43年	美 崎 英 生
438	昭和43年	高 橋 久美子
439	昭和43年	村 松 鐸 治
440	昭和43年	鈴 木 ふみ子
441	昭和43年	前 田 文 子
442	昭和43年	渡 辺 敏 昭
443	昭和43年	高 山 修 一
444	昭和44年	柴 原 綾 子
445	昭和44年	佐 藤 しづ子
446	昭和44年	大 石 悦 子
447	昭和44年	浮 島 美 之
448	昭和44年	伴 晴 江
449	昭和44年	桐 浴 静 江
450	昭和44年	佐 藤 仁 尤
451	昭和44年	佐 藤 正 基
452	昭和44年	柴 原 慎 右
453	昭和44年	鈴 木 勝 雄
454	昭和44年	佐 藤 令 子
455	昭和44年	山 本 栄 子
456	昭和44年	安 藤 亮 司
457	昭和44年	武 田 隆 幸
458	昭和44年	岩 城 節 子
459	昭和44年	望 月 笙 子
460	昭和44年	藤 井 真
461	昭和44年	宮 武 忠 司
462	昭和44年	村 上 実
463	昭和44年	村 松 郁 延
464	昭和44年	森 本 正 信
465	昭和44年	若 尾 直 司
466	昭和44年	中 島 勝 明
467	昭和45年	稲 葉 藤 子
468	昭和45年	荒 木 恵 一
469	昭和45年	内 神 啓 子
470	昭和45年	望 月 和 子
471	昭和45年	桑 山 雅 枝
472	昭和45年	小 楠 和 彦
473	昭和45年	和 田 澄 子
474	昭和45年	小 林 美 幸
475	昭和45年	小 林 政 幸
476	昭和45年	後 藤 武 茂
477	昭和45年	衣 川 朋 義
478	昭和45年	佐 藤 悦 子
479	昭和45年	横 山 さと子
480	昭和45年	新 川 千 春
481	昭和45年	折 田 和 恵

No.	卒業年・修了年	姓 名
372	昭和42年	長 島 紀 子
373	昭和42年	木 村 昭三郎
374	昭和42年	浜 村 恵 子
375	昭和42年	鷺 巢 幸 子
376	昭和42年	小 泉 听 也
377	昭和42年	後 藤 正 典
378	昭和42年	白 橋 美智子
379	昭和42年	石 原 知 子
380	昭和42年	板 東 智恵子
381	昭和42年	小 澤 久 子
382	昭和42年	山 本 正 枝
383	昭和42年	近 松 房 枝
384	昭和42年	杉 山 雪 江
385	昭和42年	杉 山 晴 彦
386	昭和42年	鈴 木 和 子
387	昭和42年	鈴 木 紳 一
388	昭和42年	林 邦 子
389	昭和42年	高 柳 法 康
390	昭和42年	竹 下 邦 雄
391	昭和42年	寺 田 欽 造
392	昭和42年	鈴 木 孝 子
393	昭和42年	長谷川 進 彦
394	昭和42年	望 月 知嘉子
395	昭和42年	船 山 和 彦
396	昭和42年	前 田 国 昭
397	昭和42年	内 田 文 代
398	昭和42年	茗 荷 昭 男
399	昭和42年	斉 藤 紀 恵
400	昭和42年	糠 谷 ミツル
401	昭和42年	山 本 敏 博
402	昭和42年	若 宮 忠 弘
403	昭和42年	鷺 巢 昭 弘
404	昭和42年	渡 辺 武 明
405	昭和43年	安 間 勝 男
406	昭和43年	酒 井 伊佐子
407	昭和43年	岩 崎 健 一
408	昭和43年	宇都宮 岩 生
409	昭和43年	植 松 正 吾
410	昭和43年	雨 宮 敏 子
411	昭和43年	大 庭 均
412	昭和43年	川 口 彰
413	昭和43年	北 村 久 代
414	昭和43年	木 俣 六 司
415	昭和43年	佐 藤 美代子
416	昭和43年	北 原 功 久
417	昭和43年	野 沢 千鶴子
418	昭和43年	斎 藤 正 子
419	昭和43年	向 後 勝 成
420	昭和43年	山 上 寿 子
421	昭和43年	山 田 幸 子
422	昭和43年	梶 原 和 恵
423	昭和43年	中 公 子
424	昭和43年	浅 岡 公 江
425	昭和43年	立 石 力ヨ子
426	昭和43年	辻 静 子

No.	卒業年・修了年	姓 名
317	昭和40年	齋 下 光 宏
318	昭和40年	中 川 いく子
319	昭和40年	鈴 木 一 市
320	昭和40年	手 塚 勇
321	昭和40年	中 島 欣 吾
322	昭和40年	奥 村 淑 恵
323	昭和40年	松 浦 美恵子
324	昭和40年	村 上 みね子
325	昭和40年	増 田 吉 雄
326	昭和40年	三 井 純 子
327	昭和40年	宮 本 靖 夫
328	昭和40年	村 上 雄 厚
329	昭和40年	小 西 みゆき
330	昭和40年	本 多 洋 子
331	昭和40年	長 沢 淑 子
332	昭和41年	野 田 弘 子
333	昭和41年	山 中 矩 子
334	昭和41年	池 田 洋 子
335	昭和41年	石 上 幸 司
336	昭和41年	渡 邊 能 子
337	昭和41年	稲 垣 忠
338	昭和41年	糠 谷 東 雄
339	昭和41年	海 野 郁 夫
340	昭和41年	大 場 浩
341	昭和41年	木 下 孝 夫
342	昭和41年	田 中 敏 子
343	昭和41年	金 原 昌 臣
344	昭和41年	片 岡 睦
345	昭和41年	酒 井 秀 夫
346	昭和41年	石 川 いく子
347	昭和41年	斎 藤 慎 一
348	昭和41年	清 水 義 允
349	昭和41年	杉 山 葉 子
350	昭和41年	服 部 徳 子
351	昭和41年	岡 本 雅 子
352	昭和41年	関 健 一
353	昭和41年	田 辺 智 弘
354	昭和41年	伊 藤 静 代
355	昭和41年	富 坂 茂
356	昭和41年	成 田 愈 尚
357	昭和41年	沼 田 洋
358	昭和41年	板 東 信 夫
359	昭和41年	古 木 昭 夫
360	昭和41年	森 田 俊 夫
361	昭和41年	味 知 恵 子
362	昭和41年	高 橋 郁 子
363	昭和41年	山 崎 悦 孝
364	昭和41年	阿 部 千恵子
365	昭和42年	長谷川 米 子
366	昭和42年	土 屋 久美子
367	昭和42年	内 田 隆
368	昭和42年	奥 村 令 子
369	昭和42年	興 津 馨
370	昭和42年	高 田 トシ子
371	昭和42年	芹 沢 嘉 子

No.	卒業年・修了年	姓 名
592	昭和48年	川 原 利 春
593	昭和48年	絹 村 厚 幸
594	昭和48年	佐 合 徳 穂
595	昭和48年	酒 井 博
596	昭和48年	斉 藤 喜 孝
597	昭和48年	中 川 久 司
598	昭和48年	馬 場 克 行
599	昭和48年	服 部 幸 男
600	昭和48年	前 田 真 悟
601	昭和48年	矢 崙 高
602	昭和48年	芳 澤 正 士
603	昭和49年	山 田 玲 子
604	昭和49年	左 中 ナチ子
605	昭和49年	飯 沼 光 壽
606	昭和49年	石 川 慎 一
607	昭和49年	仲 野 慶 子
608	昭和49年	渡 辺 ちづ子
609	昭和49年	宇佐美 ふさ枝
610	昭和49年	佐 藤 礼 子
611	昭和49年	太 田 伊 則
612	昭和49年	河 野 洋 子
613	昭和49年	駒 木 玲 子
614	昭和49年	竹 内 和 代
615	昭和49年	稲 田 幸 江
616	昭和49年	石 原 幸 子
617	昭和49年	菅 原 義 生
618	昭和49年	増 田 美保子
619	昭和49年	高 下 寛
620	昭和49年	石 川 優 子
621	昭和49年	服 部 久美子
622	昭和49年	小 瀬 晶 子
623	昭和49年	宮 三 保
624	昭和49年	松 島 須 美
625	昭和49年	安 田 誠 治
626	昭和49年	篠 田 礼 子
627	昭和49年	宇 野 勝 次
628	昭和49年	大 石 稔
629	昭和49年	北 川 俊 朗
630	昭和49年	佐 藤 重 一
631	昭和49年	深 江 志津子
632	昭和49年	新 村 博 昭
633	昭和49年	杉 山 清
634	昭和49年	鈴 木 達 始
635	昭和49年	高 橋 治鳴紀
636	昭和49年	西 園 憲 郎
637	昭和49年	野 瀬 和 孝
638	昭和49年	山 本 豊
639	昭和49年	渡 辺 和 樹
640	昭和50年	井 戸 康 子
641	昭和50年	小 池 洋 子
642	昭和50年	楨 裕 子
643	昭和50年	白 鳥 和 子
644	昭和50年	小 杉 智 子
645	昭和50年	三 瓶 由美子
646	昭和50年	渡 邊 裕美子

No.	卒業年・修了年	姓 名
537	昭和46年	廣 田 孝 之
538	昭和46年	堀 川 正
539	昭和46年	味 知 博 泰
540	昭和46年	水 野 茂
541	昭和46年	山 岸 一 美
542	昭和47年	金 田 恵美子
543	昭和47年	福 田 陽 子
544	昭和47年	大 石 章
545	昭和47年	宇 野 恵美子
546	昭和47年	小 瀬 俊 裕
547	昭和47年	酒 井 道 雄
548	昭和47年	北 田 裕 子
549	昭和47年	高 橋 俊 二
550	昭和47年	木 下 俊 子
551	昭和47年	真 野 由里子
552	昭和47年	川 田 礼 子
553	昭和47年	中 村 共 子
554	昭和47年	広 瀬 信 長
555	昭和47年	堀 川 隆 道
556	昭和47年	芝 和 子
557	昭和47年	矢 野 千 恵
558	昭和47年	福 田 陽 子
559	昭和47年	熊 谷 ますみ
560	昭和47年	秋 山 岳 士
561	昭和47年	池 谷 幸 信
562	昭和47年	石 川 雅 章
563	昭和47年	稲 葉 正 治
564	昭和47年	大 庭 茂 樹
565	昭和47年	加 藤 広 啓
566	昭和47年	河 村 博
567	昭和47年	坂 本 忠 勝
568	昭和47年	澤 田 栄 二
569	昭和47年	寺 田 佳 織
570	昭和47年	羽 場 昇
571	昭和47年	長谷川 隆 一
572	昭和47年	堀 茂 子
573	昭和47年	茂 籠 英 晴
574	昭和47年	柳 川 英 幸
575	昭和48年	鍋 田 由美子
576	昭和48年	柴 田 光 子
577	昭和48年	佐 藤 英 二
578	昭和48年	鈴 木 信 雄
579	昭和48年	鈴 木 幸 男
580	昭和48年	田 中 豊
581	昭和48年	高 井 優
582	昭和48年	平 林 義 雄
583	昭和48年	多 田 文 樹
584	昭和48年	清 水 みち子
585	昭和48年	松 林 重 幸
586	昭和48年	二 見 真理子
587	昭和48年	宮 内 泰 代
588	昭和48年	大 井 英 男
589	昭和48年	安 藤 知 世
590	昭和48年	牛 川 務
591	昭和48年	大 橋 洋 次

No.	卒業年・修了年	姓 名
482	昭和45年	谷 山 忠 義
483	昭和45年	高 山 雅 子
484	昭和45年	富 坂 修
485	昭和45年	山 下 健二郎
486	昭和45年	北 脇 康 子
487	昭和45年	柴 田 揚 子
488	昭和45年	有 本 博 雄
489	昭和45年	伊 藤 徳 雄
490	昭和45年	市 尾 義 昌
491	昭和45年	浦 野 治 明
492	昭和45年	尾 阪 芳 孝
493	昭和45年	金 月 一 夫
494	昭和45年	久米澤 正 樹
495	昭和45年	熊 谷 直 人
496	昭和45年	後 藤 守 男
497	昭和45年	佐 野 満 昭
498	昭和45年	櫻 田 照 男
499	昭和45年	澤 島 侑
500	昭和45年	清 家 功
501	昭和45年	仲 谷 博 明
502	昭和45年	青 木 興 治
503	昭和45年	野 田 幸 男
504	昭和45年	橋 本 茂
505	昭和45年	廣 田 勇 夫
506	昭和45年	堀 内 淳 司
507	昭和45年	増 田 義 典
508	昭和45年	望 月 利 郎
509	昭和45年	山 崎 正 敏
510	昭和46年	安 倍 恵 子
511	昭和46年	木 苗 恵 子
512	昭和46年	村 岡 孝 子
513	昭和46年	入 江 俊 夫
514	昭和46年	田 中 隆 子
515	昭和46年	野 路 久仁子
516	昭和46年	桶 川 修
517	昭和46年	熊 谷 猛
518	昭和46年	坂 上 むつみ
519	昭和46年	望 月 智 子
520	昭和46年	山 城 實 子
521	昭和46年	前 田 利 男
522	昭和46年	前 田 稔
523	昭和46年	前 田 勝 代
524	昭和46年	久保田 美恵子
525	昭和46年	山 田 静 雄
526	昭和46年	熊 谷 房 子
527	昭和46年	松 島 三重子
528	昭和46年	入 江 洋 子
529	昭和46年	青 木 行 雄
530	昭和46年	岩 崎 年 史
531	昭和46年	落 合 泰
532	昭和46年	神 谷 庸
533	昭和46年	鈴 木 正 子
534	昭和46年	近 藤 隆
535	昭和46年	中 村 芳 正
536	昭和46年	二 橋 純 一

No.	卒業年・修了年	姓 名
757	昭和53年	堀 江 久美子
758	昭和53年	竹 本 訓 子
759	昭和53年	武 田 厚 司
760	昭和53年	辻 本 喜 則
761	昭和53年	岡 田 澄 子
762	昭和53年	丹 羽 正 弘
763	昭和53年	牧 田 淑 子
764	昭和53年	久 嶋 道 広
765	昭和53年	前 田 典 子
766	昭和53年	正 木 典 子
767	昭和53年	福 沢 知 子
768	昭和53年	山 本 啓 二
769	昭和54年	池 田 潔
770	昭和54年	池 本 長 司
771	昭和54年	村 上 博 子
772	昭和54年	坂 井 節 子
773	昭和54年	牧 田 智津子
774	昭和54年	丹 羽 知登世
775	昭和54年	北 村 俊 夫
776	昭和54年	宮城島 正 枝
777	昭和54年	坂 井 俊 則
778	昭和54年	星 野 豊 子
779	昭和54年	月 井 裕 二
780	昭和54年	海 野 一 美
781	昭和54年	林 真 人
782	昭和54年	加 藤 泉
783	昭和54年	水 島 教 之
784	昭和54年	水 島 久 美
785	昭和54年	山 崎 芳 枝
786	昭和54年	吉 田 静 生
787	昭和54年	安 藤 公 一
788	昭和54年	市 橋 透
789	昭和54年	守 屋 美保子
790	昭和54年	菊 地 勝
791	昭和54年	土 田 素 子
792	昭和54年	堀 田 豊 子
793	昭和54年	栄 田 達 夫
794	昭和54年	近 藤 久美子
795	昭和54年	桑 原 尚 子
796	昭和54年	高 木 邦 明
797	昭和54年	佐々木 敏 郎
798	昭和54年	土 田 治 之
799	昭和54年	成 瀬 聰
800	昭和54年	八 田 明
801	昭和54年	木 村 美 子
802	昭和55年	石 川 和 正
803	昭和55年	篠 塚 朋 子
804	昭和55年	結 川 宏 子
805	昭和55年	西 浦 伊公子
806	昭和55年	日 下 英 昭
807	昭和55年	牧 野 法 子
808	昭和55年	佐 藤 和 裕
809	昭和55年	辻 由紀子
810	昭和55年	谷 重 喜
811	昭和55年	内 藤 縁

No.	卒業年・修了年	姓 名
702	昭和51年	芹 澤 重 男
703	昭和51年	矢 寄 淳 子
704	昭和51年	千 葉 和 美
705	昭和51年	千 葉 直 子
706	昭和51年	服 部 隆 夫
707	昭和51年	古 谷 泰 治
708	昭和51年	牧 田 寿 男
709	昭和51年	松 本 順 子
710	昭和51年	山 下 裕 次
711	昭和51年	小 野 公 江
712	昭和52年	中 島 美智子
713	昭和52年	佐 藤 京 子
714	昭和52年	上 田 恵 子
715	昭和52年	大 橋 光 代
716	昭和52年	神 谷 公 子
717	昭和52年	杉 山 富士江
718	昭和52年	古 西 清 司
719	昭和52年	市 橋 純 子
720	昭和52年	中 島 典 子
721	昭和52年	高 橋 由紀子
722	昭和52年	滝 口 清 子
723	昭和52年	大 石 真由美
724	昭和52年	勝 丸 清 美
725	昭和52年	橋 爪 崇
726	昭和52年	山 浦 久美子
727	昭和52年	青 木 登
728	昭和52年	浅 原 圭 子
729	昭和52年	牧 野 栄 一
730	昭和52年	名 倉 美恵子
731	昭和52年	山 下 千鶴子
732	昭和52年	生 越 朋 子
733	昭和52年	戸 塚 順 子
734	昭和52年	齋 藤 博
735	昭和52年	竹之内 敏 弘
736	昭和52年	戸 塚 実
737	昭和52年	丸 山 久美子
738	昭和53年	岩 本 明 彦
739	昭和53年	工 藤 武 施
740	昭和53年	宇佐美 美 雪
741	昭和53年	青 木 恵 子
742	昭和53年	栗 田 祐 子
743	昭和53年	曾布川 和 則
744	昭和53年	千 葉 良 之
745	昭和53年	藤 井 きょうこ
746	昭和53年	池 上 まり子
747	昭和53年	石 岡 政 子
748	昭和53年	藤 井 裕 子
749	昭和53年	成 瀬 典 子
750	昭和53年	松 橋 直 美
751	昭和53年	山 本 裕 美
752	昭和53年	井 浦 教 子
753	昭和53年	宇治田 文 香
754	昭和53年	老 田 達 雄
755	昭和53年	瓦 谷 秀 治
756	昭和53年	佐 藤 和 彦

No.	卒業年・修了年	姓 名
647	昭和50年	野 口 祐 子
648	昭和50年	浅 場 知恵子
649	昭和50年	石 原 弘 子
650	昭和50年	蓑 内 徳 蔵
651	昭和50年	小長井 晴 美
652	昭和50年	網 蔵 雄 三
653	昭和50年	安 積 昌 信
654	昭和50年	稲 葉 良 生
655	昭和50年	川 島 順 市
656	昭和50年	河 口 進 次
657	昭和50年	小 島 大 二
658	昭和50年	服 部 知恵子
659	昭和50年	大 塩 雪 江
660	昭和50年	瀬戸山 亨
661	昭和50年	野 中 則 孝
662	昭和50年	高 井 容 子
663	昭和50年	星 野 忠 男
664	昭和50年	松 岡 芳 幸
665	昭和50年	村 越 正 典
666	昭和50年	脇 田 久美子
667	昭和50年	鈴 木 清
668	昭和51年	小 島 克 子
669	昭和51年	伊 藤 あゆみ
670	昭和51年	今 井 公 江
671	昭和51年	川 上 典 子
672	昭和51年	清 水 志 津
673	昭和51年	相 良 美企子
674	昭和51年	加 藤 珠 江
675	昭和51年	玄 寿 美
676	昭和51年	田 村 敬 子
677	昭和51年	八 木 怜 子
678	昭和51年	立 花 有美子
679	昭和51年	清 水 明
680	昭和51年	篠 塚 和 正
681	昭和51年	安 積 宏 美
682	昭和51年	斎 藤 由美子
683	昭和51年	服 部 訓 子
684	昭和51年	渋谷 住 枝
685	昭和51年	米 山 美 鈴
686	昭和51年	小 平 郁 子
687	昭和51年	五 味 和 代
688	昭和51年	浜 本 延 哉
689	昭和51年	野 尻 美智子
690	昭和51年	塩 川 敏 江
691	昭和51年	杉 山 和 美
692	昭和51年	高 橋 嘉代子
693	昭和51年	百 瀬 佳寿子
694	昭和51年	高 橋 千恵子
695	昭和51年	赤 坂 喜 孝
696	昭和51年	神 谷 昌 子
697	昭和51年	石 井 康 子
698	昭和51年	芹 澤 房 子
699	昭和51年	武 田 初 実
700	昭和51年	北 島 裕 子
701	昭和51年	関 根 英 市

No.	卒業年・修了年	姓 名
922	昭和60年	根 本 智 恵
923	昭和60年	竹 下 智重子
924	昭和60年	櫻 井 のり子
925	昭和60年	長 尾 智 子
926	昭和60年	高 橋 寿
927	昭和60年	松 尾 憲 一
928	昭和60年	松 崎 雅 英
929	昭和60年	宮 崎 多 恵
930	昭和61年	野 崎 洋 子
931	昭和61年	阿出川 佳 枝
932	昭和61年	久 保 浩 之
933	昭和61年	小 林 淳 一
934	昭和61年	中 野 浩 美
935	昭和61年	原 田 晴 司
936	昭和61年	塚 田 佳 夫
937	昭和61年	土 屋 浩 司
938	昭和61年	前 田 徹
939	昭和61年	牧 野 尚 美
940	昭和61年	渡 辺 浩 樹
941	昭和62年	井 口 潔
942	昭和62年	松 尾 紀 子
943	昭和62年	岩 田 尚 美
944	昭和62年	野 末 清 美
945	昭和62年	木 村 正 伸
946	昭和62年	金 子 富 子
947	昭和62年	小 林 俊 子
948	昭和62年	小 沢 美 佳
949	昭和62年	井 口 裕 子
950	昭和62年	小田原 富士夫
951	昭和62年	金 子 孝 司
952	昭和62年	高 田 真 人
953	昭和62年	三 宅 秀
954	昭和62年	赤 松 泰 子
955	昭和63年	居出上 敬 祐
956	昭和63年	川 瀬 一 朗
957	昭和63年	堀 田 博 美
958	昭和63年	藤 本 司
959	昭和63年	川 瀬 直 子
960	昭和63年	加 藤 広 之
961	昭和63年	笠 毛 浩 彦
962	昭和63年	久 門 弘 子
963	平成1年	今 津 佳 子
964	平成1年	佐々木 史 歩
965	平成1年	多 田 義 孝
966	平成1年	長 尾 美 宏
967	平成1年	松 浦 大 輔
968	平成2年	伊 野 充 洋
969	平成2年	久 保 美 恵
970	平成2年	佐 藤 哲
971	平成2年	下 尾 貴 宏
972	平成2年	田 中 真寿美
973	平成2年	白 井 真 紀
974	平成2年	小 島 房 子
975	平成2年	松 田 通 明
976	平成2年	松 丸 直 美

No.	卒業年・修了年	姓 名
867	昭和57年	乙 田 ゆかり
868	昭和57年	石 原 由 美
869	昭和57年	上 田 春 美
870	昭和57年	太 田 正 昭
871	昭和57年	勝 山 善 彦
872	昭和57年	河 本 光 宏
873	昭和57年	塚 田 秀 夫
874	昭和57年	名 倉 基 雄
875	昭和57年	永 田 実
876	昭和57年	美濃部 淳 子
877	昭和57年	増 澤 俊 幸
878	昭和57年	塚 田 淳 代
879	昭和57年	大 軽 靖 彦
880	昭和58年	石 川 日出美
881	昭和58年	石 原 夕 美
882	昭和58年	本 島 玲 子
883	昭和58年	吉 里 貞 範
884	昭和58年	加 藤 善 久
885	昭和59年	山 本 通 代
886	昭和59年	稲 葉 厚 弘
887	昭和59年	大 家 毅
888	昭和59年	鈴 木 文 子
889	昭和59年	片 山 富 彦
890	昭和59年	木 村 郁 子
891	昭和59年	深 澤 由紀子
892	昭和59年	田 中 喜久夫
893	昭和59年	大 岩 祐 子
894	昭和59年	吉 田 千佳代
895	昭和59年	野 中 稔
896	昭和59年	矢 島 ゆ か
897	昭和59年	渡 辺 詩 織
898	昭和59年	和 田 久仁恵
899	昭和59年	岩 川 ふさ枝
900	昭和59年	井 上 泰 秀
901	昭和59年	大 石 哲 久
902	昭和59年	大 木 英 嗣
903	昭和59年	大 澤 勝 一
904	昭和59年	森 信 智 子
905	昭和59年	芦 川 裕 子
906	昭和59年	黒 澤 豊 彦
907	昭和59年	越 田 晃
908	昭和59年	柴 田 隆 之
909	昭和59年	阪 田 美 子
910	昭和59年	長 尾 康 博
911	昭和59年	橋 本 佳 己
912	昭和59年	福 山 俊 典
913	昭和59年	古 川 真 郎
914	昭和59年	堀之内 英 樹
915	昭和59年	前 沢 正 和
916	昭和59年	渡 辺 徹 志
917	昭和60年	阿出川 滋
918	昭和60年	池 田 雅 彦
919	昭和60年	平 野 千 恵
920	昭和60年	黒 木 由 香
921	昭和60年	清 水 千賀子

No.	卒業年・修了年	姓 名
812	昭和55年	橋 爪 隆 江
813	昭和55年	山 下 瑞 江
814	昭和55年	勝 丸 由美子
815	昭和55年	宇 藤 淳 子
816	昭和55年	渡 辺 文 孝
817	昭和55年	阿 部 信 夫
818	昭和55年	岡 田 宜 彦
819	昭和55年	川 嶋 宏 美
820	昭和55年	深 尾 幸 保
821	昭和55年	榊 原 幹 生
822	昭和55年	杉 井 邦 好
823	昭和55年	竹 中 裕 行
824	昭和55年	内 藤 弘
825	昭和55年	鈴 木 みどり
826	昭和56年	高 松 美保子
827	昭和56年	木 村 和 男
828	昭和56年	石 田 さとみ
829	昭和56年	小 池 弘 子
830	昭和56年	立 川 富 子
831	昭和56年	石 間 街 子
832	昭和56年	宮 腰 弘 子
833	昭和56年	勝 又 陽 子
834	昭和56年	高 木 玲 子
835	昭和56年	松 下 保 彦
836	昭和56年	中 根 文 重
837	昭和56年	本 島 久 也
838	昭和56年	北 川 日佳子
839	昭和56年	秋 山 欣 三
840	昭和56年	伊 藤 章
841	昭和56年	上 坂 一 行
842	昭和56年	西 千賀子
843	昭和56年	立 川 哲 也
844	昭和56年	土 肥 佳 史
845	昭和56年	丸 山 徹 也
846	昭和56年	内 田 玲 子
847	昭和56年	山 下 和 夫
848	昭和56年	杉 山 裕 茂
849	昭和57年	朝比奈 由 和
850	昭和57年	杉 岡 典 子
851	昭和57年	今 井 信 行
852	昭和57年	大 島 勝
853	昭和57年	小久保 宏 恭
854	昭和57年	倉 澤 由美子
855	昭和57年	鈴 木 直 人
856	昭和57年	山 口 典 子
857	昭和57年	角 田 真 澄
858	昭和57年	諸 田 和 子
859	昭和57年	松 永 正 之
860	昭和57年	松 本 正 敏
861	昭和57年	田 畑 尚 子
862	昭和57年	古 橋 美佳子
863	昭和57年	諸 田 隆
864	昭和57年	小 栗 康 代
865	昭和57年	有 賀 美津子
866	昭和57年	松 浦 智 子

No.	卒業年・修了年	姓 名
1083	平成10年	西 中 大 輔
1084	平成10年	山 崎 亮
1085	平成10年	田 中 麻衣子
1086	平成10年	林 秀 樹
1087	平成11年	小 林 由紀子
1088	平成11年	浦 上 武 雄
1089	平成11年	栗 田 拓 朗
1090	平成11年	高 橋 忠 伸
1091	平成11年	村 田 周 子
1092	平成11年	森 田 満
1093	平成11年	横 田 崇
1094	平成11年	金 子 雪 子
1095	平成12年	川 瀬 亮 介
1096	平成12年	菊 池 保 正
1097	平成12年	南 彰
1098	平成12年	中 西 美 智
1099	平成12年	堀 秀 成
1100	平成13年	高 橋 麻由子
1101	平成13年	星 野 有 吾
1102	平成13年	岩 坪 沙奈恵
1103	平成13年	金 子 直 樹
1104	平成13年	清 水 広 介
1105	平成13年	田 川 真 由
1106	平成13年	福 井 貴 史
1107	平成13年	吉 田 梨 沙
1108	平成13年	若 尾 晃 一
1109	平成14年	伊 藤 由 彦
1110	平成14年	笹 靖 昇
1111	平成14年	真 野 英里子
1112	平成14年	村 本 千 尋
1113	平成14年	川 合 大 介
1114	平成14年	秋 山 将 寛
1115	平成14年	長谷部 ふ み
1116	平成14年	二 橋 智 郎
1117	平成14年	長谷部 文 春
1118	平成14年	米 澤 正
1119	平成14年	久保田 陽 子
1120	平成15年	伊 藤 めぐみ
1121	平成15年	正 野 厚 子
1122	平成15年	原 田 俊 彦
1123	平成15年	益 岡 尚 由
1124	平成15年	山 岡 麻衣子
1125	平成15年	和 氣 良 仁
1126	平成15年	稲 垣 芳 文
1127	平成15年	清 水 直 美
1128	平成15年	山 本 麻里子
1129	平成16年	大 江 和 子
1130	平成16年	岡 崎 浩 一
1131	平成16年	小 泉 靖 明
1132	平成16年	瀧 優 子
1133	平成16年	中 川 武 史
1134	平成16年	奥 山 大 輔
1135	平成17年	増 井 碧
1136	平成17年	高 木 友 里
1137	平成17年	平 井 啓 太

No.	卒業年・修了年	姓 名
1028	平成5年	内 田 信 也
1029	平成5年	大 道 克 裕
1030	平成5年	影 山 知 子
1031	平成5年	河 島 知 子
1032	平成5年	高 本 英 治
1033	平成5年	大 谷 知 子
1034	平成5年	佐 藤 泰 士
1035	平成5年	神 野 文 宏
1036	平成5年	小 澤 紀 子
1037	平成5年	中 村 光 博
1038	平成5年	名 和 秀 起
1039	平成5年	西 村 慎 也
1040	平成5年	畑 真太郎
1041	平成5年	本 多 達 也
1042	平成5年	阿 部 庸 江
1043	平成5年	中 村 理 子
1044	平成5年	杉 本 憲 昭
1045	平成6年	大 城 まゆみ
1046	平成6年	河 西 きよみ
1047	平成6年	櫻 井 幹 也
1048	平成6年	西 島 秀 明
1049	平成6年	番 場 勇
1050	平成6年	渡 邊 佳 子
1051	平成6年	藤 川 郁 世
1052	平成6年	山 中 章 弘
1053	平成6年	渡 邊 学
1054	平成7年	内 田 恵
1055	平成7年	鈴 木 博 子
1056	平成7年	吉 田 友 子
1057	平成7年	渡 邊 学
1058	平成7年	高 橋 延 空
1059	平成7年	羽 岡 昌 紀
1060	平成7年	小 西 宏 治
1061	平成7年	水 口 英 明
1062	平成8年	相 曾 いずみ
1063	平成8年	田 口 雅 揮
1064	平成8年	梶 野 大二郎
1065	平成8年	中 山 大 輔
1066	平成8年	竹 村 純 子
1067	平成8年	田 代 正 富
1068	平成8年	高 橋 朋 子
1069	平成8年	関 本 征 史
1070	平成9年	浅 井 知 浩
1071	平成9年	西 澤 有 夏
1072	平成9年	大 谷 直 美
1073	平成9年	石 井 祐 香
1074	平成9年	中 田 智 雄
1075	平成9年	関 由希子
1076	平成9年	山 下 和香子
1077	平成9年	小 林 正 典
1078	平成10年	大 澤 美由紀
1079	平成10年	佐 藤 敦 史
1080	平成10年	出 羽 歩 美
1081	平成10年	後 藤 こま希
1082	平成10年	大 賀 美 幸

No.	卒業年・修了年	姓 名
977	平成2年	北 嶋 時 世
978	平成2年	須 原 義 智
979	平成2年	須 原 のり子
980	平成2年	林 勇
981	平成2年	丸 山 恭 史
982	平成2年	森 田 芳 樹
983	平成2年	平 野 晃 子

静岡県立大学

No.	卒業年・修了年	姓 名
984	平成3年	川 口 峰 雄
985	平成3年	川 嶋 実
986	平成3年	長 野 有美子
987	平成3年	日 比 貴 子
988	平成3年	鈴 木 由美子
989	平成3年	園 田 祥 司
990	平成3年	多 田 明 弘
991	平成3年	園 田 寿 寿
992	平成3年	松 木 いつ子
993	平成3年	渡 邊 哲 史
994	平成3年	櫻 井 孝 司
995	平成3年	猪 俣 千香子
996	平成3年	長 野 敬
997	平成3年	岩 田 直 子
998	平成3年	谷 澤 康 玄
999	平成3年	福 原 正 博
1000	平成4年	鈴 木 太嘉栄
1001	平成4年	八 神 宜 子
1002	平成4年	岡 本 典 子
1003	平成4年	長 尾 明 美
1004	平成4年	住 井 直 美
1005	平成4年	鈴 木 登紀子
1006	平成4年	川 口 香苗子
1007	平成4年	新 田 茂 彦
1008	平成4年	福 原 裕 子
1009	平成4年	池 田 美 保
1010	平成4年	中 園 裕 子
1011	平成4年	岩 崎 綾 乃
1012	平成4年	望 月 由木子
1013	平成4年	大 月 昭 子
1014	平成4年	尾 形 有 規
1015	平成4年	川 口 健 次
1016	平成4年	喜 好 昭 彦
1017	平成4年	栗 田 晃 伸
1018	平成4年	島 田 和 彦
1019	平成4年	竹 入 章
1020	平成4年	築 本 美喜子
1021	平成4年	大 川 知 子
1022	平成4年	長 岡 恵
1023	平成4年	藤 本 勝 博
1024	平成4年	榛 葉 亜由美
1025	平成4年	増 崎 詞 子
1026	平成4年	谷 本 倫 子
1027	平成5年	安 部 紳 一

No.	卒業年・修了年	姓 名
1248	平成29年	小 林 香奈子
1249	平成29年	榊 原 綾 海
1250	平成29年	鷺ノ森 拓 生
1251	平成29年	佐々木 康 太
1252	平成29年	佐々木 美 紅
1253	平成29年	佐々木 里 菜
1254	平成29年	篠 原 美 紀
1255	平成29年	芝 切 若 奈
1256	平成29年	清 水 研一郎
1257	平成29年	鈴 木 千 尋
1258	平成29年	鈴 木 誠 規
1259	平成29年	鈴 木 友季子
1260	平成29年	須 山 大 輔
1261	平成29年	関 田 理 沙
1262	平成29年	曾 根 早 織
1263	平成29年	高 橋 爽
1264	平成29年	高 橋 瞳
1265	平成29年	高 橋 美 玲
1266	平成29年	田原迫 奨 大
1267	平成29年	竹 田 健 吾
1268	平成29年	天 白 宗 和
1269	平成29年	外 山 皓 基
1270	平成29年	中 井 真 純
1271	平成29年	中 山 貴 寛
1272	平成29年	南 場 美 緒
1273	平成29年	野 口 真里茄
1274	平成29年	橋 本 千 尋
1275	平成29年	深 谷 菜 月
1276	平成29年	福 地 壮 吾
1277	平成29年	藤 瀬 裕 貴
1278	平成29年	舟 橋 弘 樹
1279	平成29年	前 田 久美子
1280	平成29年	松 尾 和 香
1281	平成29年	御 宿 正 敏
1282	平成29年	三 原 寛 貴
1283	平成29年	宮 武 将 之
1284	平成29年	森 兼 捷 太
1285	平成29年	諸 星 晴 香
1286	平成29年	山 崎 悠里子
1287	平成29年	山 下 千 晶
1288	平成29年	横 井 茉 里
1289	平成29年	依 光 奈津美
1290	平成29年	若 月 綾 乃
1291	平成29年	富 永 健一郎
1292	平成29年	北 川 護
1293	平成29年	高 宮 万 里
1294	平成29年	藤 原 正 和

No.	卒業年・修了年	姓 名
1193	平成25年	寺 澤 直 彦
1194	平成25年	永 井 啓 裕
1195	平成25年	若 林 夢 人
1196	平成26年	遠 藤 壮 真
1197	平成26年	若 宮 紀 子
1198	平成26年	杉 浦 隆 俊
1199	平成26年	柏 倉 康 治
1200	平成27年	小 谷 広 夢
1201	平成27年	國 安 健 太
1202	平成27年	橋 本 宇 矩
1203	平成27年	宮 崎 雄 輔
1204	平成27年	鈴 木 弥 生
1205	平成27年	横 田 将 史
1206	平成27年	古 谷 恵 理
1207	平成27年	田草川 翔 太
1208	平成27年	宇 久 美奈子
1209	平成27年	小 池 勇 太
1210	平成27年	佐 藤 健太郎
1211	平成27年	新 宅 彩也加
1212	平成27年	土 田 大 貴
1213	平成27年	當 山 晃 弘
1214	平成27年	中 田 裕 之
1215	平成27年	仁 平 拓 也
1216	平成27年	橋 本 正 寛
1217	平成27年	水 野 春 花
1218	平成27年	森 田 直 樹
1219	平成27年	若 林 弘 樹
1220	平成28年	後 藤 純
1221	平成28年	佐 藤 宏 平
1222	平成28年	中 嶋 小百合
1223	平成28年	丸 川 敬 大
1224	平成28年	加 島 宗
1225	平成29年	福 泉 裕 己
1226	平成29年	青 野 雅 士
1227	平成29年	秋 山 季理子
1228	平成29年	秋 山 紗記子
1229	平成29年	天 野 七 菜
1230	平成29年	有 泉 早 紀
1231	平成29年	石 上 加 菜
1232	平成29年	稲 木 聖 矢
1233	平成29年	岩 見 恭 介
1234	平成29年	上 野 宏 大
1235	平成29年	上 野 純 平
1236	平成29年	内 田 雅 之
1237	平成29年	梅 村 晃 子
1238	平成29年	江 川 仁 美
1239	平成29年	大 嶽 亜 季
1240	平成29年	小 川 衿 菜
1241	平成29年	小川原 慎太郎
1242	平成29年	小 塩 渚
1243	平成29年	加 藤 彩
1244	平成29年	川 崎 温 子
1245	平成29年	木 下 晏 菜
1246	平成29年	清 川 千 秋
1247	平成29年	櫛 田 まどか

No.	卒業年・修了年	姓 名
1138	平成17年	本 多 正 樹
1139	平成17年	村 上 涼 子
1140	平成17年	村 田 敏 拓
1141	平成18年	千 葉 健 人
1142	平成18年	相 原 淑 子
1143	平成18年	井 上 直 樹
1144	平成18年	笠 井 智 代
1145	平成18年	保 坂 卓 臣
1146	平成18年	秋 本 真友子
1147	平成18年	林 哲 男
1148	平成19年	野 嶋 芳 紀
1149	平成19年	渡 邊 歩
1150	平成19年	兵 頭 正 員
1151	平成20年	鈴 木 早江子
1152	平成20年	天 野 祥 吾
1153	平成20年	遠 藤 康 平
1154	平成20年	内 本 武 亮
1155	平成20年	佐 藤 紘 彰
1156	平成20年	高 野 真 弓
1157	平成20年	田野井 隆
1158	平成21年	福 島 圭 穰
1159	平成21年	入 江 こはる
1160	平成21年	紅 林 佑 希
1161	平成21年	鈴 木 美 希
1162	平成21年	今 西 正 樹
1163	平成21年	岩 佐 陽 介
1164	平成21年	宇都宮 崇 広
1165	平成21年	定 光 慧
1166	平成21年	森 田 真 介
1167	平成21年	綿 野 尚 幸
1168	平成22年	大 内 仁 志
1169	平成22年	高 田 俊 介
1170	平成22年	新 谷 亮
1171	平成22年	松 岡 毅
1172	平成22年	青 木 裕希子
1173	平成23年	井 出 和 希
1174	平成23年	河 西 昭 典
1175	平成23年	鈴 木 寛 人
1176	平成23年	山 口 桃 生
1177	平成23年	横 山 智 紀
1178	平成23年	川 端 洋 平
1179	平成24年	鈴 木 絵 莉
1180	平成24年	成 島 悠 太
1181	平成24年	横 澤 浩 子
1182	平成24年	植 木 桂一郎
1183	平成24年	河 辺 佑 介
1184	平成25年	福 田 達 也
1185	平成25年	鈴 木 友季子
1186	平成25年	寺 田 健一郎
1187	平成25年	長 澤 孝 真
1188	平成25年	藤 山 みなみ
1189	平成25年	諸 田 有 佳
1190	平成25年	渡 邊 雄 一
1191	平成25年	石 井 裕 大
1192	平成25年	加 藤 由希子

Eメール : shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp ホームページ : <http://shizuyaku.jp>

静薬学友会・第一回小鹿ゴルフコンペのお知らせ

小鹿ゴルフコンペ実行委員会

会 長 辻 邦郎（元静岡県立大学副学長）

幹事長 木下 俊也（昭和53年卒）

会員の皆様におかれましては、時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、静薬学友会は、創立100周年を機に本年4月に一般社団法人に変わり、県立大学薬学部的发展並びに薬学・薬業の振興に貢献すべく、新たなステージに入りました。

このたび、法人化後の新規事業についての意見交換や会員相互の親睦をはかるため、静岡薬科大学の発祥地である小鹿に因んだ「小鹿ゴルフコンペ」という名称で、下記ゴルフコンペを開催することにしましたので、皆様のご参加をお待ちしております。

これを機に会員としての相互の絆や連帯感を高めませんか。また、学生時代に戻った気持ちでプレーしてみませんか。なお、参加者は先着40名とさせていただきます。参加希望者は11月20日までに一般社団法人静薬学友会事務局までご連絡ください。

記

日 時：平成30年12月23日(日) 午前8時30分集合、9時開会式、9時16分開始

場 所：静岡カントリー島田ゴルフコース

会 費：1万円（プレーフィ、キャディーフィ、昼食代、パーティー代等全てを含む）

人 数：40名（アウト5組、イン5組）

ルール：ダブルペリア方式

一般社団法人静薬学友会事務局 静薬学友会 メールアドレス：shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

静薬学友会fax 054-265-8769 （ご連絡はメールまたはfaxをお願いします）

〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1 静岡県立大学薬学部内

激甚災害に指定された災害で被災された方へ

近年、異常気象による豪雨災害や度重なる地震により日本全国の各地域に被害がもたらされています。

被災された会員の皆様には、謹んでお見舞いを申し上げます。

平成30年5月20日から7月10日までの間の豪雨及び暴風雨による災害が、内閣府から激甚災害に指定されました。（平成30年7月豪雨災害 主な被災地：広島県、岡山県、愛媛県）

また、平成30年9月13日付でこの度の北海道での地震が激甚災害指定見込みとなっております。

静薬学友会では、災害支援基金運用規定に基づき会員への支援を行います。

対象 激甚災害に指定された災害で下記の被害にあわれた方（会員ご本人）

1. 負傷された方、または死亡された方
2. 家屋が甚大な被害に遭われた方

災害で被害に遭われた方、被害に遭われた方をご存知の方は静薬学友会までご連絡をいただきますようお願いいたします。

連絡先

一般社団法人静薬学友会

TEL 054-265-8763 FAX 054-265-8769

Eメール shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

ホームページ <http://shizuyaku.jp>

（事務局在室時間 午前10時～午後3時）

静薬学友会関東地区同窓会総会開催のお知らせ

本年4月、静薬学友会は長年の目標でもありました一般社団法人静薬学友会へと発展的改変をいたしました。これに伴い従来の関東支部は静薬学友会関東地区同窓会として新たに運用してまいります。

そして10月、関東地区同窓会では、下記の通り総会、講演会および懇親会を開催します。皆様お誘い合わせの上、ご参加くださいますようお願い申し上げます。なお、この度の講演会は目黒会との共催で行います。地区同窓会総会に併せて同期会等を開催することもご検討ください。

記

日時：平成30年10月28日(日) 14:00～18:00 (受付開始 13:30)

場所：アルカディア市ヶ谷 予定会場 6階 阿蘇(東・西)

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25 TEL 03-3261-9921

東京メトロ 有楽町線・南北線 市ヶ谷駅 (1またはA1出口)、都営新宿線 市ヶ谷駅 (A1またはA4出口) または J R 中央線 (各駅停車) 市ヶ谷駅 から徒歩2分

次第：

1. 総会 (14:00～14:40)

2. 講演会 (共催：目黒会) (14:45～16:20)

(1)「静岡県立大学薬学部 大学近況報告」

静岡県立大学薬学部 薬学部長 賀川 義之先生 (昭和58年卒)

(2)「保健機能食品の実態と活用について」

昭和女子大学 生活科学部 食安全マネジメント学科

教授 梅垣敬三先生 (博 昭和60年修了)

前：国立健康・栄養研究所 食品保健機能研究部長

3. 集合写真撮影 (16:30～16:40)

4. 懇親会 (16:40～18:00)

参加費：

・総会・講演会のみ 無料

・総会・講演会・懇親会 7,000円

*以下の①から③のいずれかに該当する場合、一人6,000円 (ダブルカウント無)

①夫婦 (親子) で参加 ②学部生・院生 ③70歳以上

総会へご出席の方は、以下を10月20日までに事務局にご連絡ください。

- 1) 氏名
- 2) 卒業年度または在学年
- 3) 懇親会の出欠
- 4) 懇親会出席の方で①～③のいずれかを満たす場合、該当する番号

連絡先：

一般社団法人静薬学友会

TEL 054-265-8763 FAX 054-265-8769

事務在室時間 10:00～15:00

(在室時間以外は留守番電話にて対応)

E-mail shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

静薬学友会ホームページ <http://shizuyaku.jp>

以上

静薬学友会東海地区同窓会 第42回薬剤師セミナーのお知らせ

静薬卒業生の皆様方には益々ご清栄のことと推察いたします。

さて、下記により第42回薬剤師セミナーを開催いたします。ご多忙のことと思いますが、皆様お誘い合わせの上、ご参加くださいますようご案内申し上げます。

記

1. 日 時：平成30年12月9日（日）午後1時30分～

2. 場 所：ウインクあいち（愛知県産業労働センター）1003会議室
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4丁目4-38 TEL：052-571-6131

3. 演 題

①「PBPMをご存知ですか？」

～薬剤師による支持療法の設計を可能にするPBPM～

愛知県がんセンター中央病院薬剤部 橋本直弥（平成15年院卒）

②「あるべき姿を見据えた薬局を目指して」

～包括ケアの一翼を担う薬局になるためへの取組み～

あおい薬局 服部宏明（昭和54年卒）

③「愛知県の環境施策」

～県民みんなで未来へつなぐ環境首都あいちの取組み～

愛知県尾張県民事務所環境保全課長 近藤浩史（昭和61年卒）

4. その他

①意見交換会（懇親会）：研修会場近くで午後5時より予定しております。

②参加費：研修会無料 意見交換会（懇親会）¥3,000円（予定）

③申込み〆切り：11月30日（金）

④日本薬剤師研修センター集合研修シールの配布を予定しております。

連絡先

愛知県がんセンター愛知病院薬剤部 松崎雅英

（静薬学友会代議員・静薬学友会東海地区同窓会代表）

TEL：0564-25-3105 E-mail：mmatsuzaki@katch.ne.jp

または 一般社団法人静薬学友会

〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1 静岡県立大学薬学部内

TEL 054-265-8763 FAX 054-265-8769

Eメール shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

ホームページ <http://shizuyaku.jp>



静薬学友会報への広告掲載について

平素は本会の活動にあたり格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。本会では会員約7,800名を対象に広報誌『静薬学友会報』を毎年発行し、今回で86号となります。

学友会報は、本会の発展と会員間の親睦および相互連携を目的に、学部の現状、支部および同窓会の活動を含めた様々な情報を提供してまいりました。

現在、すでに会員の皆様から広告を掲載していただき、作成費の一部として利用させていただいております。

今後も学友会報を通じて静薬学友会の一層の発展と充実を図るべく努力する所存であります。何卒、広告掲載へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

広告掲載原稿募集要項

1. 媒体名称：静薬学友会報（10月1日発行）

2. 掲載資格：静薬学友会員

3. 広告の種類：一般広告

4. 発行部数：約7,800部（A4版）

5. 広告掲載料：

カラー掲載（募集件数：A4版2件）

単発掲載の場合

A4版 1ページ 80,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 40,000円（縦127mm, 横178mm）

連続掲載の場合（2年以上連続掲載）

A4版 1ページ 70,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 35,000円（縦127mm, 横178mm）

モノクロ掲載（募集件数：制限なし）

単発掲載の場合

A4版 1ページ 60,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 30,000円（縦127mm, 横178mm）

連続掲載の場合（2年以上連続掲載）

A4版 1ページ 50,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 25,000円（縦127mm, 横178mm）

6. 広告原稿の形態：ファイル、または紙焼き（校正は行いませんのでご了承ください）

7. 広告掲載申込先：〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1

静岡県立大学薬学部内 一般社団法人静薬学友会

代表者 会長 横倉 輝男

電話 054-265-8763 FAX 054-265-8769（在室10:00～15:00）

8. 広告料振込先：銀行口座：静岡銀行 草薙支店 普通預金0277279

郵便振替：00820-8-19012 名義：一般社団法人静薬学友会

定 款

一般社団法人静薬学友会

第1章 総 則

(名 称)

第1条 当法人は、一般社団法人静薬学友会と称する。

(事務所)

第2条 当法人は、主たる事務所を静岡県静岡市に置く。

第2章 目的及び事業

(目 的)

第3条 当法人は、会員相互の親睦と学識及び職能の向上を図るとともに、静岡県立大学薬学部の発展並びに薬学・薬業の振興に貢献し、あわせて社会に寄与することを目的とする。

(事 業)

第4条 当法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 会報の発行及び会員名簿の作成に関する事業
- (2) 会員相互の親睦及び知識の向上に関する事業
- (3) 講演会、セミナー、研究会等の企画、開催及び運営事業
- (4) 静岡県立大学薬学部の教育及び研究の発展に対する支援事業
- (5) 薬学・薬業の教育、研究及び振興に関する事業
- (6) 各種出版物の企画、制作及び発行
- (7) 薬局支援関連事業
- (8) 奨学金貸与事業
- (9) 留学、海外調査の支援事業
- (10) 静岡県立大学が進める各種事業への支援事業
- (11) 前各号に附帯又は関連する事業

及び当法人の目的を達成するために必要な事業

第3章 会 員

(会員の資格)

第5条 当法人の会員は以下の4種類とし、それぞれ次の資格を有するものとする。

(1) 正会員

- ① 静岡女子薬学校卒業生
- ② 静岡女子薬学専門学校卒業生
- ③ 静岡薬学専門学校卒業生
- ④ 静岡薬科大学卒業生
- ⑤ 静岡薬科大学大学院修了生
- ⑥ 静岡県立大学薬学部卒業生
- ⑦ 静岡県立大学大学院薬学研究科修了生
- ⑧ 静岡県立大学大学院薬食生命科学総合学府修了生（但し、薬学専攻、薬科学専攻及び薬食生命科学専攻(薬学系講座)に限る）

(2) 学生会員

- ① 静岡県立大学薬学部在学生
- ② 静岡県立大学大学院薬学研究科在学生
- ③ 静岡県立大学大学院薬食生命科学総合学府在学生（但し、薬学専攻、薬科学専攻及び薬食生命科学専攻(薬学系講座)に限る）

(3) 特別会員（但し、正会員である者は除く。）

- ① 静岡県立大学薬学部及び同大学院の現職員及び旧職員
- ② 静岡薬科大学及び同大学院の旧職員
- ③ 静岡薬学専門学校、静岡女子

薬学専門学校及び静岡女子薬
学校の旧職員

- (4) 賛助会員本会の事業を賛助する
意思を有する団体又は個人で、理
事会の承認を得た者

(入 会)

第6条 前条(1)及び(2)に定める者は、入
会の手続を経ることなく各会員となる。

2 本会に特別会員として入会を希望する
者は、所定の入会申込書により申し込み、
理事会の承認を得なければならない。

3 本会に賛助会員として入会を希望する
者は、所定の入会申込書に当該年度の会
費を添えて申し込み、理事会の承認を得
なければならない。

(会 費)

第7条 会員は、社員総会において別に定める
入会金及び年会費を納入しなければならない。
既納の会費は特段の理由がない限り
返還しない。

(会員の資格喪失)

第8条 会員は、次の事由によってその資格を
喪失する。

- (1) 退会したとき
- (2) 死亡し、又は失跡宣告を受けた
とき
- (3) 除名されたとき

(退 会)

第9条 会員が退会しようとするときは、その
旨を当法人に届け出なければならない。

(除 名)

第10条 会員が次の各号の一に該当するときは、
社員総会の決議を経て、除名することが
できる。但し、その会員に弁明する機会
を与えなければならない。

- (1) 当法人の名誉を傷つけ、又は当
法人の目的に違反する行為があっ
たとき。
- (2) この定款その他の規定に違反し
たとき。
- (3) その他除名すべき正当な事由が
あるとき。

第4章 代議員及び社員

(代議員及び社員)

第11条 会員は、最大で50名(定数は理事会で
定める)の代議員を選出し、その代議員
をもって、一般社団法人及び一般財団法
人に関する法律(以下、「法人法」とい
う。)に定める社員とする。

2 代議員は、正会員及び学生会員の中よ
り、正会員及び学生会員の互選によって
選出するものとする。選出を行うために
必要な規定は、理事会において定める。

3 代議員が会員の資格を喪失した場合は、
代議員の職を失うものとする。

4 代議員の任期は、選任後4年以内に終
了する事業年度のうち最終のものに関す
る定時社員総会の終結のときまでとする。
なお、再任は妨げないものとするが、連
続3期を超えて在任することはできない
ものとする。

5 前項の規定にかかわらず、学生会員た
る代議員の任期は、以下のいずれか早い
ときをもって任期満了となるものとする。

(1) 選任後6年以内に終了する事業
年度のうち最終のものに関する定
時社員総会の終結のとき

(2) 大学又は大学院を卒業して学生
会員の地位を失ったのち、後任の
学生会員たる代議員が選任され、
その者が就任を承諾したとき

6 代議員の任期が満了した場合であって
も、代議員が社員総会決議取り消しの訴
え、解散の訴え、責任追及の訴え又は役
員の解任の訴えを提起している場合には、
当該訴訟が終結するまでの間、当該代議
員は、社員たる地位を失わない(なお、
当該代議員は、役員の選任及び解任並び
に定款変更についての議決権を有しない
こととする。)

7 代議員が欠けたとき又は、代議員の員
数を欠くこととなるときは、補欠の代議
員を選任することができる。補欠の代議
員の任期は、任期の満了前に退任した代

議員の任期の満了までとする。

- 8 補欠の代議員を選任する場合には、次に掲げる事項も併せて決定しなければならない。

(1) 当該候補者が補欠の代議員である旨

(2) 当該候補者を1名又は2名以上の特定の代議員の補欠の代議員として選任するときは、その旨及び当該特定の代議員の氏名

(3) 同一の代議員(2名以上の代議員の補欠として選任した場合にあっては、当該2名以上の代議員)につき2名以上の補欠の代議員を選任するときは、当該補欠の代議員相互間の優先順位

- 9 会員は、法人法に規定された次に掲げる社員の権利を、社員と同様に当法人に対して行使することができる。

(1) 法人法第14条第2項の権利(定款の閲覧等)

(2) 法人法第32条第2項の権利(社員名簿の閲覧等)

(3) 法人法第50条第6項の権利(社員の代理権証明書面等の閲覧等)

(4) 法人法第52条第5項の権利(電磁的方法による議決権行使記録の閲覧等)

(5) 法人法第57条第4項の権利(社員総会の議事録の閲覧等)

(6) 法人法第129条第3項の権利(計算書類等の閲覧等)

(7) 法人法第229条第2項の権利(清算法人の貸借対照表等の閲覧等)

(8) 法人法第246条第3項、第250条第3項及び第256条第3項の権利(合併契約等の閲覧等)

- 10 代議員のうち理事又は監事である者の人数は、代議員の総数の半数以下でなければならないものとする。

- 11 設立時理事であった者は代議員に就任することができないものとし、また、代表理事及び監事は、代議員を兼ねること

ができないものとする。

(任意退任)

第12条 代議員は、別に定める代議員退任届を提出することにより退任することができる。

(解 任)

第13条 代議員が本会の名誉を傷つけ、又は代議員としての義務を怠り、若しくは第3条の目的に反する行為をしたときは、社員総会の決議を経て、その代議員を解任することができる。

第5章 総 会

(構 成)

第14条 総会は、すべての代議員をもって構成する。

2 前項の総会をもって法人法上の社員総会とする。

(権 限)

第15条 社員総会は、次の事項について決議する。

(1) 貸借対照表及び損益計算書(正味財産増減計算書)の承認

(2) 定款の変更

(3) 当法人の解散及び残余財産の処分

(4) 会員の除名

(5) 代議員の解任

(6) 理事及び監事の選任又は解任

(7) その他社員総会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項

(開 催)

第16条 社員総会は、定時社員総会として毎事業年度終了後3か月以内に1回開催するほか、必要がある場合に開催する。

(招 集)

第17条 社員総会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき代表理事が招集する。代表理事に事故又は支障があるときは、あらかじめ理事会において定めた順序により他の理事が招集す

る。

- 2 社員総会を招集するには、会日より2週間前までに、代議員に対して招集通知を発するものとする。また、議案の内容については、当法人のホームページにも掲載するものとする。

- 3 総代議員の議決権の10分の1以上の議決権を有する代議員は、代表理事に対し、社員総会の目的である事項及び招集の理由を示して、社員総会の招集を請求することができる。

(招集手続の省略)

第18条 社員総会は、代議員全員の同意があるときは、招集手続を経ずに開催することができる。

(議 長)

第19条 社員総会の議長は、代表理事がこれに当たる。但し、代表理事に事故又は支障があるときは、あらかじめ理事会において定めた順序により他の理事が議長となる。

(議決権等)

第20条 社員総会における議決権は、代議員1名につき1個とする。

- 2 社員総会に出席できない代議員は、あらかじめ通知された事項について書面又は電磁的方法をもって議決権を行使することができる。

- 3 代議員以外の会員は議決権を有しないが、総会に出席して発言することができる。

(議決権の代理行使)

第21条 代議員は、当法人の代議員を代理人として、議決権を行使することができる。但し、この場合には、社員総会ごとに代理権を証する書面を提出するか、又は、当該書面に記載すべき事項を電磁的方法により提供しなければならない。

(決 議)

第22条 社員総会の決議は、総代議員の議決権の過半数を有する代議員が出席し、出席した当該代議員の議決権の過半数をもって行う。

- 2 前項の規定にかかわらず、次の決議は、総代議員の議決権の3分の2以上に当たる多数をもって行う。

- (1) 定款の変更
- (2) 解散
- (3) 会員の除名
- (4) 代議員の解任
- (5) 理事及び監事の解任
- (6) その他法令で定められた事項

- 3 理事又は監事を選任する議案を決議するに際しては、各候補者ごとに第1項の決議を行わなければならない。理事又は監事の候補者の合計数が第25条に定める定数を上回る場合には、過半数の賛成を得た候補者の中から得票数の多い順に定数の枠に達するまでの者を選任することとする。

(社員総会の決議及び社員総会への報告の省略)

第23条 社員総会の決議の目的たる事項について、理事又は代議員から提案があった場合において、その提案に代議員の全員が書面又は電磁的記録によって同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の社員総会の決議があったものとみなす。

- 2 理事が代議員の全員に対して社員総会に報告すべき事項を通知した場合において、その事項を社員総会に報告することを要しないことについて、代議員の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その事項の社員総会への報告があったものとみなす。

(社員総会議事録)

第24条 社員総会の議事については、法令に定める事項を記載した議事録を作成し、議長及び出席理事が署名又は記名押印し、社員総会の日から10年間当法人の主たる事務所に備え置くものとする。

第6章 役 員

(役員の設定等)

第25条 当法人に、次の役員を置く。

(1) 理事 6名以上25名以内

(2) 監事 3名以内

- 2 理事のうち1名を代表理事とする。
- 3 代表理事を会長とし、この他に3名以内の副会長を選定することができるものとする。
- 4 当法人の理事のうちには、理事のいずれか1人及びその親族その他特殊の関係がある者の合計数が、理事総数(現在数)の3分の1を超えて含まれることになってはならない。
- 5 当法人の監事には、当法人の理事(親族その他特殊の関係がある者を含む。)及び当法人の使用人が含まれてはならない。また、各監事は、相互に親族その他特殊の関係があってはならない。

(役員を選任)

第26条 理事及び監事は、正会員又は学生会員の中から社員総会の決議によって選任する。

- 2 代表理事(会長)及び副会長は、理事会の決議によって理事の中から選定する。

(理事の職務及び権限)

第27条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの定款で定めるところにより、職務を執行する。

- 2 代表理事は、法令及びこの定款で定めるところにより、当法人を代表し、その業務を執行する。
- 3 代表理事又は代表理事以外で業務執行を行う理事は、毎事業年度に4か月を超える間隔で2回以上、自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務及び権限)

第28条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。

- 2 監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、当法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。

(役員任期)

第29条 理事の任期は、1期を選任後2年以内

に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時社員総会の終結の時までとする。なお、再任は妨げないものとするが、連続4期を超えて在任することはできないものとする。

- 2 監事の任期は、1期を選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時社員総会の終結の時までとする。なお、再任は妨げないものとするが、連続2期を超えて在任することはできないものとする。

3 任期満了前に退任した理事又は監事の補欠として選任された者の任期は、前任者の任期の残存期間と同一とする。

4 増員により選任された理事の任期は、他の在任理事の任期の残存期間と同一とする。

5 理事又は監事は、第25条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお理事又は監事としての権利義務を有する。

(役員解任)

第30条 理事及び監事は、社員総会の決議によって解任することができる。

(役員報酬等)

第31条 理事及び監事は、無報酬とする。

第7章 理事会

(構成)

第32条 当法人に理事会を置く。

- 2 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(権限)

第33条 理事会は、次の職務を行う。

- (1) 当法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 代表理事(会長)の選定及び解任
- (4) 副会長の選定及び解任
- (5) その他必要と認められた事項

2 理事会は、次に掲げる事項その他の重

要な業務執行の決定を理事に委任することができない。

- (1) 重要な財産の処分及び譲受け
- (2) 多額の借財
- (3) 重要な使用人の選任及び解任
- (4) 従たる事務所その他の重要な組織の設置、変更及び廃止
- (5) 理事の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制その他当法人の業務の適正を確保するために必要なものとして法令で定める体制の整備

(招 集)

第34条 理事会は、代表理事がこれを招集し、会日の1週間前までに各理事及び各監事に対して招集の通知を発するものとする。但し、緊急の場合にはこれを短縮することができる。

2 代表理事に事故又は支障があるときは、あらかじめ理事会において定めた順序により他の理事が招集する。

(招集手続の省略)

第35条 理事会は、理事及び監事の全員の同意があるときは、招集手続を経ずに開催することができる。

(議 長)

第36条 理事会の議長は、代表理事がこれに当たる。但し、代表理事に事故又は支障があるときは、あらかじめ理事会において定めた順序により他の理事が議長となる。

(理事会の決議)

第37条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

(理事会の決議及び報告の省略)

第38条 理事が理事会の決議の目的である事項について提案をした場合において、当該提案につき議決に加わることができる理事の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたとき(監事が当該提案に異議を述べたときを除く。)は、当該提案を可決する旨の理事会の決議があったものとみなす。

2 理事又は監事が理事及び監事の全員に対して、理事会に報告すべき事項を通知したときは、その事項を理事会に報告することを要しない。但し、法人法第91条第2項の規定による報告については、この限りではない。

(理事会議事録)

第39条 理事会の議事については、法令に定める事項を記載した議事録を作成し、出席理事に回覧のうえ、出席した代表理事及び監事がこれに署名又は記名押印し、理事会の日から10年間主たる事務所に備え置くものとする。

(理事会規定)

第40条 理事会に関する事項は、法令又はこの定款に定めるもののほか、理事会において定める理事会規定による。

第 8 章 資産及び会計

(事業年度)

第41条 当法人の事業年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

(事業計画及び収支予算)

第42条 当法人の事業計画書、収支予算書、資金調達及び設備投資の見込みを記載した書類については、毎事業年度の開始の日の前日までに、代表理事が作成し、理事会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も、同様とする。

2 前項の書類については、主たる事務所に、当該事業年度が終了するまでの間備え置くものとする。

(事業報告及び決算)

第43条 当法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、代表理事が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告
- (2) 事業報告の附属明細書
- (3) 貸借対照表
- (4) 損益計算書(正味財産増減計算書)

(5) 貸借対照表及び損益計算書（正味財産増減計算書）の附属明細書

(6) 財産目録

2 前項の承認を受けた書類のうち、第1号、第3号、第4号及び第6号の書類については、定時社員総会に提出し、第1号の書類についてはその内容を報告し、その他の書類については承認を受けなければならない。

3 第1項の書類のほか、監査報告を主たる事務所に5年間備え置き、定款及び社員名簿を主たる事務所に備え置くものとする。

（剰余金の分配の禁止）

第44条 当法人は、剰余金の分配を行うことができない。

第9章 基 金

（基 金）

第45条 当法人は、基金を引き受ける者の募集をすることができる。

2 拠出された基金は、基金の拠出者と合意した期日まで返還しない。

3 基金の返還の手続については、返還する基金の総額について定時社員総会の決議を経るものとするほか、基金の返還を行う場所及び方法その他の必要な事項を理事会において別に定めるものとする。

第10章 定款の変更及び解散

（定款の変更）

第46条 この定款は、社員総会の決議によって変更することができる。

（解散の事由）

第47条 当法人は、次に掲げる事由によって解散するものとする。

(1) 社員総会の決議

(2) 社員が欠けたこと

(3) 合併（合併により当法人が消滅する場合）

(4) 破産手続開始の決定

(5) 裁判所の解散命令

（残余財産の帰属）

第48条 当法人が清算をする場合において有する残余財産は、社員総会の決議を経て、国若しくは地方公共団体又は公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人であって租税特別措置法第40条第1項に規定する公益法人等に該当する法人に贈与するものとする。

第11章 公告の方法

（公告の方法）

第49条 当法人の公告は、電子公告により行う。

2 事故その他やむを得ない事由によって前項の電子公告をすることができない場合は、官報に掲載する方法により行う。

第12章 委員会

（委員会）

第50条 当法人の事業を円滑に進めるため、委員会を設置することができる。

2 委員会の設置及び運営に関し必要な事項は、理事会の決議によって定める。

第13章 事務局

（事務局）

第51条 当法人の事務を処理するため、事務局を設置することができる。

2 事務局には所要の職員を置くことができる。

3 事務局の組織及び運営に関し必要な事項は、理事会の決議によって定める。

第14章 支 部

（支 部）

第52条 当法人は、理事会の決議により支部を置くことができる。

2 支部の設置及び運営に必要な事項は、

理事会の決議によって定める。

第15章 個人情報の保護

(個人情報の保護)

第53条 当法人は、運営上知り得た個人情報の保護に万全を期するものとし、その扱いについては別に定める個人情報保護規定に従って適切に管理を行わなければならないものとする。

第16章 規定等

(規定等)

第54条 この定款に定めるもののほか、当法人の運営に必要な事項を定めるため、別途規定及びこれに附随する細則等を理事会の決議によって定めることができる。

第17章 附 則

(設立時社員の氏名及び住所)

第55条 当法人の設立時社員の氏名及び住所は、次のとおりである。

- (1) 横倉輝男
- (2) 大石悦子

(設立時役員)

第56条 当法人の設立時理事、設立時監事及び設立時代表理事は、次のとおりとする。

設立時理事	横倉輝男
設立時理事	安倍道治
設立時理事	岩崎年史
設立時理事	大石悦子
設立時理事	賀川義之
設立時理事	木苗直秀
設立時理事	鈴木隆
設立時理事	高橋千恵子
設立時監事	伊藤由彦
設立時監事	若林敬二
設立時代表理事	横倉輝男

(設立時代議員)

第57条 第11条の規定にかかわらず、当法人の設立時社員をもって、設立時代議員とす

る。

2 当法人設立後、第11条の規定に基づき代議員が選出されるまでの間、設立時代議員が代議員としての権利及び義務を有するものとする。

3 本条の定めにより代議員となる者については、本定款第11条第11項の規定は適用しないものとする。

(特別会員及び賛助会員)

第58条 静岡県立大学薬学部同窓会の特別会員又は賛助会員である者は、第6条第2項又は第3項の規定にかかわらず、当法人の成立の日からそれぞれ当法人の特別会員又は賛助会員となるものとする。

(設立時の主たる事務所の所在場所)

第59条 当法人の設立時の主たる事務所の所在場所は静岡県静岡市駿河区谷田52番地1とする。

(最初の事業年度)

第60条 当法人の最初の事業年度は、当法人成立の日から平成31年3月31日までとする。

(定款に定めのない事項)

第61条 この定款に定めのない事項については、すべて法人法その他の法令の定めるところによる。

一般社団法人静薬学友会代議員 (37名)

地区別50音順

氏 名	卒業・修了年 (学生は所属)	地 区	氏 名	卒業・修了年 (学生は所属)	地 区
丹 羽 智 紀	博士課程	院 生	石 原 由 美	昭和57年	静岡県
五十嵐 千 乃	1年	学 生	内 田 信 也	平成5年	静岡県
宮 国 大 介	2年	学 生	大 木 明 代	昭和62年	静岡県
中 村 洸 友	3年	学 生	清 水 広 介	平成13年	静岡県
齋 藤 和 弘	4年	学 生	高 橋 忠 伸	平成11年	静岡県
安 部 友 涼	5年	学 生	田 中 喜久夫	昭和59年	静岡県
大 嶽 瞳	6年	学 生	深 澤 由紀子	昭和59年	静岡県
水 島 教 之	昭和54年	北海道	渡 邊 学	平成7年	静岡県
岡 田 宜 彦	昭和55年	東北	綿 野 尚 幸	平成21年	静岡県
岡 本 彩 香	平成26年	関東	笠 井 智 代	平成18年	東海
佐 藤 泰 士	平成5年	関東	松 崎 雅 英	昭和60年	東海
関 本 征 史	平成8年修了	関東	三 上 栄 一	昭和49年	東海
多 田 義 孝	平成元年	関東	河 本 光 宏	昭和57年	関西
中 村 和 重	平成4年	関東	藤 本 司	昭和63年	関西
松 浦 大 輔	平成元年	関東	松 田 通 明	平成2年	関西
本 島 玲 子	昭和58年	関東	池 田 潔	昭和54年	中国
勝 山 善 彦	昭和57年	長野県	井 上 泰 秀	昭和59年	四国
村 松 郁 延	昭和44年	北陸	中 山 大 輔	平成8年	九州・沖縄
伊 藤 めぐみ	平成15年	静岡県			

一般社団法人静薬学友会 役員 (27名)

50音順

役 職		卒業・修了年	氏 名
理事		昭和56年	秋 山 欣 三
理事		平成9年	浅 井 知 浩
理事	副会長	昭和46年	安 倍 道 治
理事		昭和60年	池 田 雅 彦
理事		昭和46年	岩 崎 年 史
理事		昭和43年	植 松 正 吾
理事		平成5年	内 田 信 也
理事・設立時社員		昭和44年	大 石 悦 子
理事		昭和62年	大 木 明 代
理事		昭和59年	大 澤 勝 一
理事		昭和58年	賀 川 義 之
理事		昭和40年	木 苗 直 秀
理事		昭和53年	木 下 俊 也
理事		平成8年	黒羽子 孝 太
理事		昭和46年	近 藤 隆
理事		平成13年	清 水 広 介
理事		昭和55年	杉 井 邦 好
理事	副会長	昭和54年	鈴 木 隆
理事		平成8年	関 本 征 史
理事	副会長	昭和51年	高 橋 千恵子
理事		昭和53年	武 田 厚 司
理事		昭和45年	仲 谷 博 明
理事		昭和61年	前 田 徹
代表理事・設立時社員	会長	昭和40年	横 倉 輝 男
理事		平成7年	渡 邊 学
監事		平成14年	伊 藤 由 彦
監事		昭和46年	若 林 敬 二

集記 編後

静岡県立大学薬学部沿革をたどると、大正5年の静岡女子薬学校に始まる100年以上もの長い歴史があります。医療、学術、行政などの分野で活躍する卒業生を多数輩出し、静岡県立大学薬学部は社会的に高い評価を得てきました。薬学部創設100周年を期して静薬学友会の社会的信頼性をより高めるため一般社団法人（非営利型）に移行することが平成29年7月8日の学友会理事会で議論されました。法人化に向けて作業が進み、平成29年11月11日には一般社団法人静薬学友会設立総会が行われました。そして、平成30年5月20日には一般社団法人静薬学友会第一回定時総会が開催され、今後の一般社団法人静薬学友会の役員は設立時理事8名に加え、新たに選任された17名の理事（計25名）とすでに決定している監事2名によって運営されることになりました。往古来今のなかにあつて、静薬学友会が在学生ならびに卒業して社会で活躍しているOB・OGとの絆、OB・OG間の絆を深めるために今後ますます貢献していくことが期待されます。一方で、平成30年度静岡県立大学薬学部入学者選抜方法は学部一括から、薬科学科（40名）、薬学科（80名）の学科毎に変更されました。これは薬科学科在籍では薬剤師国家試験の受験資格が得られなくなるためであります。したがって、今年度から薬科学科に入学した学生は、薬学科の薬剤師養成教育と異なり、大学院（博士前期課程および後期課程）と連携した研究者・技術者・教員などの養成教育を受けることになります。いずれの学科においても薬学部卒業後、本学に入学して学び、そして卒業した喜びを心に刻み、その誇りを基盤に地域社会、国際社会で大きく活躍することを心から期待しています。

会報編集委員 武田厚司（昭和53年卒）

訃報

次の方が逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

宮城島利一様 昭和40年卒

平成二十九年六月二十二日 逝去

森田 全様 昭和34年卒（静岡県立大学名誉教授）

平成二十九年六月二十四日 逝去

東 博幸様 昭和33年卒

平成三十年三月十五日 逝去

会報担当

委員長

黒羽子孝太（平成8年卒 理事 薬学部 免疫微生物学分野）
武田 厚司（昭和53年卒 理事 薬学部 統合生理解分）
大木 明代（昭和62年卒 理事）
南 彰（平成12年卒 薬学部 生化学分野）
伊藤 由彦（平成14年卒 監事 薬学部 薬食研究推進センター）
横倉 輝男（昭和40年卒 一般社団法人静薬学友会会長）

静薬学友会報 第86号 平成三十年十月一日発行

〒422-8526 静岡市駿河区谷田五二一 静岡県立大学薬学部内

発行者 一般社団法人静薬学友会

振替口座 〇〇八二〇一八一九〇二二

TEL 〇五四―二六五―八七六三

FAX 〇五四―二六五―八七六九

メールアドレス shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

ホームページアドレス <http://shizuyaku.jp>

わかさ薬局グループ

「良き仕事は良き社員から、
良き社員は良き会社から」

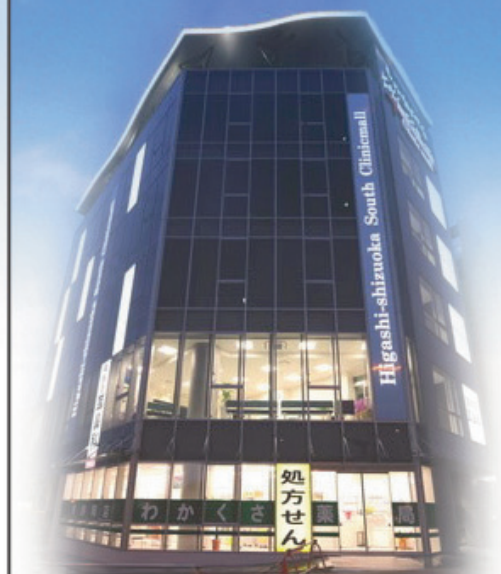
これを信念に、
わかさ薬局グループでは社員教育に力を注いでいます。

それは職場だけにとどまらず、経験を活かし、己を高め、
自己研鑽が楽しくなるような場の提供をしています。

いつでも、高きを仰ぐ気持ちを忘れずに。
日々を過ごすことに誇りを持ち、実践できるように。

わかさ薬局グループ
代表 高橋 千恵子

つづきはWebで。
<http://www.stcy.co.jp>



県大卒業生も多数活躍中！

静岡で就職なら
メディスン

静岡市内に薬局 8 店舗
健康食品・OTC 専門店 1 店舗展開

静岡県立大学薬学部連携薬局

株式会社 静岡メディスン

静岡市駿河区宮竹 1 丁目 4 番 5 号
TEL : 054-237-5316
E-mail : soumu@e-medicine.co.jp



平成30年度薬学生涯研修講座

AI技術がもたらす医療の進展と薬剤師の将来像

主催／一般社団法人静薬学友会・静岡県立大学薬学部

日 時／平成31年2月24日(日) 13:00～16:30 (12:30受付開始)

会 場／あざれあ2階 大会議室 静岡市駿河区馬淵1丁目17-1 TEL 054-255-8440

参加費／500円(学生無料) 参加定員／144名(同窓会会員以外のご参加も受け付けます)

後 援／静岡市薬剤師会、静岡県薬剤師会、静岡県病院薬剤師会

共 催／日本薬剤師研修センター

超高齢社会を迎えた我が国においては、疾病の様相も大きく変化しており、それに伴い薬学領域の研究開発、国や地方自治体の薬事行政、病院や薬局における薬剤師業務も大きく変わっています。今回の研修会では、AI技術の急速な進展に伴う調剤ロボットの開発と展望、およびIoTを利用した在宅医療や地域の健康支援をサポートする取り組みに関する最新情報の紹介、更にはメタゲノム解析を用いた腸内フローラと肥満、免疫疾患、がん等の疾病発生との関連性の解明について講演をいただきます。

プログラム

(日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師制度2単位認定)

【開会挨拶】 13:00 一般社団法人静薬学友会 会長 横倉輝男
静岡県立大学 薬学部長 賀川義之

講演座長：一般社団法人静薬学友会 理事 秋山欣三、理事 木下俊也

【講演 1】 13:10～14:40
「調剤ロボット・システムと薬剤師の未来像に関する一考察」
株式会社ユヤマ 学術部 部長 森 和明 先生
「見守り支援システム ニプロハートラインについて」
ニプロ株式会社 事業戦略室 水谷良夫 先生
(講演各45分 質疑応答各5分を含む)

【講演 2】 14:50～16:20
「腸内フローラと我々の健康との密接な関係」
東京農業大学生命科学部 分子微生物学科 教授 野本康二 先生
(講演90分 質疑応答10分を含む)

【閉会挨拶】 16:20 静岡県立大学 薬学研究院長 鈴木 隆
終了 16:30

平成30年度薬学生涯研修講座運営委員会 委員長 若林敬二

問い合わせ・参加申込／一般社団法人静薬学友会

〒422-8526静岡県静岡市駿河区谷田52-1

TEL：(054) 265-8763 ・ FAX：(054) 265-8769

Eメール：shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp 静薬学友会ホームページ <http://shizuyaku.jp>

※裏面のFAX用参加登録用紙、またはホームページより 平成31年1月25日(金) までにお申込ください。